

れも互によほど愛してゐると僕が考へるのは、それはいづれあそこからさう遠いところに住んでゐる人ではなからうが、それならあの家に纏はる不気味千萬な噂はもとより知つてゐるのだらうから、迷信深い臺灣人がその恐ろしさにめげずに、あの場所を擇ぶといふところに、その戀人たちの熱烈が現れてゐる。それから、また僕は考へるね。そのふたりは大部以前から、あの時刻とあの場所とを利用することに慣れてゐるのだ。でない位なら、そんないやな場所へ、女が先に來て待つ度胸も珍しいし、男だつてそれぢやあまり不人情さ。——君が、あの聲を聞いて咄嗟にそれをその住人のものと斷定してしまつたのも無理はないよ。彼等はそのをもう自分たちふたりの場所と信じ切つてゐるほど、その場所に安心し慣れ切つてゐるのだ。それならばこそ我我の足音を聞いただけで輕輕しく、あんな聲をかけたりのだ。——あそこへは全く近よる人もないと思えるね。そのくせあの家は、女ひとりで這入つて行つても何の怖ろしい事もないほど、異變のない場所なのさ。若い美しい女——藝者の玉葉仔のやうな奴かな。いや、若い女ではなくつて——

「隣は若かつたがな」

「さ、隣は若くつても、事實は圖太い年増女かも知れないな。でなけりや、やつぱり必ず若い熱

烈なる少女か。——それはどうでもいい。判らない。しかし兎も角もさ、今日のあの隣は不埒かは知らないが不思議は何もない生きた女のもので、あそこが逢曳の場所に擇ばれてゐたといふ事と、又それだから、あそこにはほんの噂だけで何の怪異もない事は、おのづと明瞭さ。僕は疑はない——ああ、這入つて見れやよかつたのになあ」

「例によつてそろそろ理窟つぽくなつたぞ。——理窟には合つてゐさうだよ。ただね、それが僕の神経を鎮めるには何の役にも立たない」

「さうかい。困つたね」

世外民はやつぱり私に同感しようとはしない。私は少しばかり、ほんの少しだが、忌忌しかつた。私は酒を飲めば飲むほど、奇妙に理窟つぽくなる。人を説き伏せたくなる。そこでお喋りになるといふごく好くない癖があつた。自分では頭が冴えて來るやうな氣がするんだが、それは酔つぱらひの己惚れで傍で聞いたらさぞをかしいのだらう。私はつづけた。

「仕方がない。君は何とでも思ひ給へ。だが、今日の事實は怪異譚としてはまるで何の値打もないのだがなあ。禿頭港で聞いた話にしたつて、因縁話にはなつてゐるものか。——そんな見方をすれや、せいぜい三面特種の値打だ。寧ろ面白いのは、あんな荒つぽいやな話のなかに案外、

支那人といふものの性格や生活が現れてゐることだ。……」
 「夜中に境界標の石を四方へ擴げる話か。——あれや、君、臺灣の大地主のことなら、みんなあんな風に言ふんだ。あれこそ臺灣共通の傳説だよ。——現に」と世外民は酒で蒼くなつた顔を苦笑させて、

「僕の家のことだつてもさう言つてらあ！」

「へえ？ これはなほ面白い。いづれはどこかに本當の例が、事實あつたのだらうがね。多分、あの沈家が本當だらう。それにしてもそいつをどこの大地主にも應用するところはえらい。實際、あの話はあらゆる富豪といふものを簡單明瞭に説明するからね。ふむ。さうかね。だがそれよりも僕にもつと面白いのは、犁でよぼよぼの老寡婦を突き殺す話だ。——僕はその沈の祖先といふのは粗野な悪黨でこそあるがなかなかの人傑だつたやうな氣がするのだ。ね、さうでなければ道理に合はない。いかに清朝の末期に近い政府だつて、また先が植民地の臺灣だからと言つて、さうさう腐敗した碌でなしの役人ばかりをあとへあとへ派遣したわけではあるまい。それが皆丸められるのだ。單に金の力だけではあるまい。沈にはきつと役人たちよりもえらい經營の才があつたのだ。——まことの聞きたまへ、僕の幻想だから。胡蘆屯附近と言へば、君、この島でも最も

よく開墾された農業地だらう。……いつもいふ通り、おれは自分の地所の近所に手とどかない畑があるのは、氣に入らないのだ。……婆さん。さあどいた。畑といふものは荒して置くものぢやない。……本當に死にたいんだな。もう死んでもいい年だ」か。さう言つてひらりと馬を下りて自分の手で突き殺したと言つたね。僕には強い實行力のある男の横顔が見えるやうな氣がするんだ。さういふ男の手によつてこそ、未開の山も野も開墾出来るのだ。草創時代の植民地はさういふ人間を必要としたのだ。役人たちの目の利いたものは、彼の事業を、政府自身の爲めに樂しみにしてゐたかも知れないのだ。その報酬に悪徳を見逃すばかりか、暗には獎勵してゐたかも知れないのだ。その男はちゃんとそれを心得てゐた。その遺言が更に面白いではないか。「三十年すれば」いかに植民地政治でもだん／＼行届いて整つて來た擧句には、彼が折角開拓した廣大な土地を、今度は彼よりもつと大きい暴虐者が出て左右することを見抜いてゐたのだ。何と怖ろしい識見ではないか——彼は政治といふものの根本義を、まるで社會學者みたいに知つてゐて、それを利用したのだ。人のものを掠奪してそれへすつかり仕上げをかけて、やれ田だの畑だのと鍍金をするさ、そいつを賣拂つて金に代へる。それから商賣をするんだね。全く商賣といふものは世が開化した後の唯一の戦争だからね。しかも安全な戦争だ——元手の多い奴ほど勝つに定つて

ある。彼は自分の子孫たちに必勝の戦術を傳授して置いたのさ。奴の仕事は何もかも生きる力に満ちてゐる。萬歳だ。ところでさ、そのやうな先見のある男でも、自然が不意に何をするかは知らなかつたのが、人間の浅ましさだ。繁茂してゐた自然を永い間かかつて斬り苛んだ結果に贏ち得た富を、一晚の颶風でやつぱりもとの自然に返上したといふのだから好いな。態を見やがれさ。——するとやつぱり因果應報といふことになるのかな。僕はそんなことを説教するつもりではなかつたつけな……」

私はいつの間にかひどく酔つて来て、舌も縛れては來るし、段段牙えて來ると己惚れてゐた頭がへんにとりとめがなくなり、ふと口走つた——「花嫁の姿をして腐つてゐたつて？ よくある奴さ。花嫁の姿をして死ぬ。それがだんだん腐つてくる、か。生きてゐる奴で冷たくなつて、だんだん腐つてくるのもある。金簪で飾つてさ、ウム」

世外民はこれも亦いつもの癖で、深淵のやうに沈黙したまま、私のをかした言葉などは聞き咎めるどころか、てんで耳に入らぬらしく、老酒の盃を持ち上げたまままで中空を凝視してゐた。「世外民、世外民。この男の盃を持つてゐるところには少々魔氣があるて」

世外民といふ風變りな名を、私はこの話の當初から何の説明もなしに連發してゐることに気がついたが、これは私の臺灣時代の殆んど唯一の友人である。この妙な名前もとより匿名である。彼のペンネームである。彼の投稿したものを見て私はそれを新聞に採録した。私は彼の詩——無論、漢詩であるが、その文才を十分解したといふわけではないが、寧ろその反抗の氣概を喜んだのである。しかし、その詩は一度採録したきりだつた。當局から注意があつて、私は呼び出されて統治上有害だと言ふのでその非常識を咎められた。再度の投稿に對しては、私は正直にその旨を附記して返送した。すると、世外民は私を訪ねて遊びに來た。見かけは優雅な若者であつたが案外な酒徒で、盃盤が私たちを深い友達にした。彼は臺南から汽車で一時間行程の龜山の麓の豪家の出であつた。家は代代秀才を出したといふので知られてゐた。その頃の私は、つまらない話だが或る失戀事件によつて自暴自棄に墮入つて、世上のすべてのものを否定した態度で、だから世外民が友達になつたのだ。この頃の私にいつも酒に不自由させなかつたのがこの世外民だ。だが私が世外民の幫間をつとめたと誰も思ふまい。第一に世外民は友をこそ求めたが幫間な

どを必要とする男ではなかつた。私はその點を敬してゐた。——この話として何の用もあることではないが、私の交友録を抄録したままである。彼が私との訣別を惜んで私に與へた一詩を私は覚えてゐる。——あまり上手な詩でもないさうだが、私にはそんなことはどうでもいい。

登彼高岡空夕曛 斷雲孤鶴嘆離群
温盟何必杯酒 君夢我時我夢君

* * * * *

五 女誠扇

私がいやがる世外民を無理に強ひて、禿頭港の廢屋のなかへ、今度こそ這入つて行つたのは、彼がその次に臺南へ出て來た時であつた。多分最初にあの家を發見してから五日とは經てゐなかつたらう——世外民は當時少くとも週に二度は私を訪れたものなのだから。

「さあ。今日こそ僕の想像の確なことを見せる。運がよければ、君がそれほど氣に病む幽霊の正體が見られるかも知れないよ。」

私はいかゞ宣言して、この前の機會と同じ時刻を撰んだ。そこに幽霊のゐないことを信じてゐる私は、しかし、自分の事を、高い雕欄のいい窪みを見つけて巢を營んでゐる双燕を驚愕させる蛇ではないかと思つて、最初は考へたのだが構はないと思つた。といふのはもしそこに一對の男女がゐるやうならば、自分はその時の相手の風態によつては、わざと氣がつかないふりをして、彼等をその家の居住者のやうに扱つて、自分達が無法にも闖入したのを謝罪しようとするかからである。私たちはそれだからごく普通の足音をさせて、あの石の圓柱のある表からこの前の日のとほりに入口を這入つた。その時、さすがに私もちよつと立止つて聞き耳を立ててはみた。勿論どんな泉州言葉も聞かれはしなかつた。それなのに困つた事に、世外民は氣味悪がつて先に這入らないのだ。表の廣間のなかはうす暗くて、またこんな家のどこに二階への階段があるか、私には見當がつきにくい。しかし世外民は口で案内して、表扉を這入つて廣間の奥の左或は右の小扉を開いてみたら、そこから上るやうになつてゐるだらう、といふのである。その廣間といふのは二十疊以上はあるだらう。四つの閉めた窓の破れた隙間からの光で見ると、他には何一つないらしい。私は這入つて行つた。その時、思はず私が呻つたのは、例の聲を聞いたからではないのだ。ただの閉め切つた部屋の臭ひである。どんな臭ひとも言へない。ただ蒸れるやうなやつ

で、それがしかし建物がいいから熱いのではない。割に冷たくつてゐて蒸れるとでもいふより外には言ひ方がない。この臭ひを、世外民は案外平氣らしかつた。天井を見ると眞白に粉がふいて微がはえてゐる。その微の臭ひだつたかも知れない。私たちは先づ右の扉を開けた。——果してすぐそこが階段であつた。幅二尺位の細いのが一直線に少し急な傾斜で立つてゐる。それが上からの光で割に明るい。何も怖氣がさすやうなものは一つもないが、また私は傳説をさう眼中におかないが、それでもやはりさう明るい心持にはなれないことは確かだ。氣味が悪いと言つては言ひすぎるが、私はよく世外民をひつばつて來たと思つた。私はひとりでも一度來てみる意志はあつたのだが、もしもひとりだつたらあまり落着いて見物はしにくいかと思ふ。それにしてもあんな傳説を迷信深く抱いてゐる人人が、たとひそれは二人連れであつた事が確でも、第一日によくまあここへ來たものだと言へる。いや、よくもここを撰ぶ氣になつたものだ。私はこの細い階段を戀人たちが互に寄りそひながらおづおづして、のぼつて行つた時を想像してみた。

私は世外民を振り返つて促しながら、階段を昇り出した。そこには私の想像を満足させることには、ごく稀にはあるがこのごろでもそこを昇降する人間があることは疑へなかつた。といふのは、それは何も鮮かな足跡はないのだが、寧ろ譬へば冬原の草の上におのづと出來た小徑とい

ふ具合に、そこだけは他の部分より黒くなつて、白い塵埃のなかから、階段の板の色がぼんやり見えてゐるのであつた。二階には人のけはひはない。私は幽靈の正體は先づ見られさうにもないとと思つた。二階へ出た。

案外にそこは明るかつた。その代りどうしてだか急に暑くムツとした。人影のやうなものは何もなかつた。氣が落着いて來たので私は何もかも注意して見ることが出來たが、床の上にもまた人の歩いたあとがあつて、それがまた一筋の道になつて残つてゐる。L形になつた部屋の壁のかけから、光が帯になつて流れて來る。この部屋へ澤山の明るさを供給してゐるのは、その窓で、人の歩いたあととまたその窓の方へ行つてゐる。壁のかけに誰かがピツタリと身をよせて隠れてゐるやうな氣もする。私はその窓の方へおのづと歩いて行つた。我々の足元から立つ塵は、光の帯のなかで舞ひ立つた。顔に珍しく風が當つて、明るい窓といふのが開いてゐること、その壁に沿つて一つの臺があることが、一時に私の目についた。臺といふのはごく厚く黒檀で出來たもので、四方には五尺ほどの高さの細い柱が、その上にはやはり黒檀の屋根を支へてゐる。その大き

「寢牀だね」

「さうだ」
 これが私と世外民とが、この家へ這入つてからやつと第一に取交した會話であつた。寢床には塵は積つてはゐなかつた——少くとも軽い塵より外には。さうして黒檀は落着いた調子で冷冷と底光りがしてゐた。私は世外民を顧みながら、その寢床の上を指さした。私の指が黒檀の厚板の面へ白くうつつた。

世外民は頷いた。

その寢床の外には家具と言へば、目立つものも目立たないものも文字通りに一つもなかつた。話に聞いたあの金簪を飾つた花嫁姿の狂女は、この寢床の上で腐りつつあつたのではないだらうか。それにしてもこれだけの立派な檀木の家具を、今だにここに遺してあるのは、憐憫によつてではなく、やはり恐怖からであらう。

寢床のうしろの壁の上には大小幾疋かの壁虎が、時時のつそりと動く。尤もこれは珍しい事ではない。この地方では、どこの家の天井にだつて多少は動いてゐる。内地に於ける蜘蛛ぐらゐの資格である。ただこの壁の上には、廣さの割合から言つて少少多すぎるだけだ。六坪ほどの壁に三四十疋はゐるた。

世外民はどうだか知らないが、私はもう充分に自分の見たところのもので満足であつた。歸らうと思つて、歸りがけにもう一度窓外の碧い天を見た。その他の場所はあまりに氣を沈ませたからだ。歸らうとして私はふと自分の足もとへ目を落とすと、そこに、ちやうど寢床のすぐ下に、扇子見たやうなものがある——骨が四五本開いたままで。私は身をかがめて拾つた。そのままハンケチと一緒に自分のポケットのなかへ入れた。なぜかといふのに世外民はいつの間にか歸るために、私に背を向けて四五歩も歩き出してゐたからだ。

世外民も私も下りる時には何だかひどく急いだ。表の入口を出る時には今まで壓へてゐた不氣味が爆發したのを感じて、我我は無意識に早足で出た。さうして無言をつづけてその屋敷の裏門を出た。

「どうだい。世外民君。別に幽霊もゐなかつたね」

「うむ」世外民は不承不承に承認しはしたが「しかし、君、君はあの黒檀の寢床の上へ今出て来た大きな紅い蛾を見なかつたかね。まるで掌ほどもあるのだ。それがどこからか出て来て、あの黒光りの板の上を這つてゐるのを一目は美しいと思つたが、見てゐるうちに、僕はへんに氣味が悪くなつて、出たくなつたのだ」

「へえ。そんなものが出て来たか。僕は知らなかった。僕はただ壁虎を見ただけだ。君、君の詩ではないのか。幻想ではないのか」

——私は世外民がああ寝床の上で死んだ狂女のことをさう美化してゐるのだらうと思つた。

「いいや、本當だとも。あんな大きな赤い蛾を、僕は初めてだ」

私は歩きながら、思ひ出してさつきの扇をとり出してみた。さうして豫想外に立派なのに驚き、また困りもした。

その女持の扇子といふのは親骨は象牙で、そこへもつて来て水仙が薄肉で彫つてある。その花と蕾との部分は透彫になつてゐる。それだけでも立派な細工らしいのに、開けてみると甚だ凝つたものであつた。表には殆んど一面に紅白の蓮を描いてゐる。裏は象牙の骨が見えて——表一枚だけしか紙を貼つてゐないので、裏からは骨があらはれるやうに出来てゐたのだが、その象牙の骨の上には金泥で何か文章が書いてある。

「君」私はもう一度表を見返しながら世外民に呼びかけた。「玉秋豊といふのは名のある畫家かね」

「玉秋豊？」 さ。聞かないかね。なぜ」

私は黙つてその扇子を渡した。世外民が訝しがつたのは言ふまでもない。私もちよつと何と言つていいかわからなかつた——私は無頼兒ではあつたが、盗んで来たやうな氣がしていけないのだ。私はそのままの話をすると、世外民は案外でもないやうな顔をして、それよりも仔細にその扇をしらべながら歩いてゐた——

「玉秋豊？ 大した人の畫ではないが職人でもないな。不蔓不枝」彼はその畫賛を讀んだのだ。

「愛蓮説のうちの一句だね。不蔓不枝。——だが女の扇にしちや不吉な言葉ぢやないか。蔓せず

枝せざるほど婦女にとつて悲しい事はあるまいよ。どうしてまた富貴多子にでもしないのだらう

——平凡すぎると思つたのかな」

「一たい幸福といふのは平凡だね。で、その富貴多子とかいふのは何だい」

「牡丹が富貴、柘榴が多子さ」世外民は扇のうらを返して見て、口のなかで讀みつづけながら

「おや、これは曹大家の女誠の一節か。専心章だから、なるほど、不蔓不枝を選んだかな……」

扇は案外に世外民の興味をひいたと見える。それを吟味して彼がそんなことを言つてゐる間に、私はまた私で同じ扇に就て全く別様のことを考へてゐた。

その扇はうち見たところ、少くとも現代の製作ではない。さうしてその凝つた意匠は、その親

が、愛する娘が人妻にならうとする時に與へるものに相當してゐる。——恐らく沈家のものに相違ないであらう。昔、狂女がそれを手に持つて死んでゐなかつたとも限らない。その扇だ。更に私は假りに、禿頭港の細民區の奔放無智な娘をひとり空想する。彼女は本能の導くがままに凄惨な傳説の家をも怖れない。また昔、その上でどんな人がどんな死をしたかを忘れ果ててあの豪華な寢床の上に、その手には婦女の道徳に就て明記した暗示したこの扇を、それが何であるかを知らずに且つ弄び且つ翻して、彼女の汗にまみれた情夫に涼風を贈つてゐる……。彼女は生きた命の氾濫にまかせて一切を無視する。——私はその善惡を説くのではない。「善惡の彼岸」を言ふのだ……

六 エピロオグ

あの廢屋はさういふわけで私の感興を多少惹いた。何ごとにもさう興味を見出さなかつたその頃の私としては、ほんの當座だけにしろそんな氣持になつたのは珍しいのだが、それらすべての話をとほして、私は主として三個の人物を幻想した。市井の英雄兒ともいふべき沈の祖先、狂念によつて永遠に明日を見出してゐる女、野性によつて習俗を超えた少女、——とでもいふ、と

もかく、そんな人物が跳梁するのが私には愉快であつた。そいつを活動のシネリオにでもしてみても氣があつて、私は「死の花嫁」だとか「紅の蛾」などといふ題などを考へてみたりしたほどであつた。しかしさう思つてみるだけで、やらないと言ふかやれないと言ふか、ともかく實行力のないのが私なので、その私が前述の三人物の空想をしたのだからをかしい。意味がそこにあるかも知れない。さうして私自身はといふと、いかなる方法でも世の中を征服するどころか、世の力によつて刻々に壓しつぶされ、見放されつつあつた。尤も私は何の力もないくせに精一杯の我儘をふるまつて、それで或程度だけのことなら押し通してもゐたのだ。それでは何によつて私をやつとそれだけでも強かつたか。自暴自棄。この哀れむべき強さが、他のものと違ふところは、第一自分自身がそれによつて決して愉快ではないといふことにある。私は事實、刻刻を甚だ不愉快に送つてゐた。それといふのも私は當然、早く忘れてしまふべき或る女の面影を、私の眼底にいつまでも持つてゐすぎたからである。

私は先づ第一に酒を飲むことをやめなければならぬ。何故かといふのに私は自分に快適だから酒を飲むのではない。自分に快適でないことをしてゐるのはよくない。無論、新聞社などは酒よりもさきにやめたい程だ。で、すると結局は或は生きることが快適でなくなるかも知れない惧

れがある。だが、若しさうならば生きることそのものをも、やめるのが寧ろ正しいかも知れない。……

柄になく、と思ふかも知れないが、私は時折にそんなことをひどく考へ込む事があつた。その日もちやうどさうであつた。折から世外民が訪れた。

「君」世外民はいきなり非常な興奮を以て叫んだ。「君、知つてゐる？——禿頭港の首くくりはね……」

「え？」私はごく軽くではあるが死に就て考へてゐた折からだつたから少しへんな氣がした。

「首くくり？ 何の首くくりだ？」

「知らないのか？ 新聞にも出てゐるのに」

「僕は新聞は讀まない。それに今日で四日社を休んでゐる」

「禿頭港で首くくりがあつたのだよ。——あの我が我がいつか見た家さ。——誰も行かない家さ。

あそこで若い男が縊死してゐたのだ。新聞には尤も十行ばかりしか出ない。僕は今、用があつて行つたさきでその噂を聞いて來たのだからよく知つてゐるが、あの黒檀の寢床を足場にしてやつたらしいのだ。美しい若い男ださうだよ、それがね、口元に微笑をふくんでゐたといふので、や

つぱり佛の聲でおびき寄せられたのだ。「花嫁もたうとう婿をとつた」と言つてゐるよ——皆は。それがさ、やつぱりもう腐敗して少しくさいぐらゐになつてゐたのださうだ。僕は聞いてゐてゾクツとした。我が我が聞いたあの聲やそれに紅い蛾なぞを思ひ出してね——

私もふつと死の悪臭が鼻をかすめるやうな氣がした——あの微くさい廣間の空氣を鼻に追想したのだらう。世外民はその家の怪異を又新しく言ひ出して、私がそこで拾つた扇を氣味悪がり私にそれを捨ててしまふやうに説くのであつた。——この間はあるに興味を持つて、自分でも欲しいやうなことを言つた癖に。尤も私がやらうと言つた時にはやはり、今と同じく不氣味がつて、結局いらぬと言つたが。私としてはまた世外民にやらうと思つた程だから、捨ててしまつても惜しいと思はないが、私はその理由を認めなかつた。またいざ捨てよと言はれると、勿體ないほど珍奇な細工にも思へた。私は世外民の迷信を笑つた。

「大通りの真中で縊死人があつてそれが腐るまで氣がつかない、とでもいふのなら不思議はあるだらうが、人の行かないところで自殺したり逢曳したりするのは一向當り前ぢやないか。——ただあんな淋しいところが市街のなかにあるのは、何かとよくないね」

私はその家の内部の記憶をはつきり目前に浮べてさう言つた。

同時に私にはこの縊死の發見に就て一つの疑問が起つた。といふのは、あの部屋の中かで起つた事は誰もそこに這入つて行かない以上は、一切發見される筈がない。あそこには開いた窓が一つあるにはあつたが、そこには青い天より外には何も見えない——つまり天以外からは覗けない。もし臭氣が四邊にもれるにしては、あの家の周圍があまりに廣すぎる。さう考へてゐるうちに、私は大して興味のなかつたこの話が又面白くなつて來るのを感じながら言つた。

「出鱈目さね。いや、死人はあつたらう。若い美しい男だなんて。もう美しいか醜いか年とつたか若いかも見分けがつくものか」

「いや、でも皆さう言つてゐる」

「それぢや、誰がその死人を發見したのだ？ あそこならどこからも見えぬ、誰も偶然行つてみるわけはないがな」ふと、私は場所が同じだといふことから考へて、この縊死人——年若く美しいと傳へられる者と、いつか私が空想し獨斷したあの逢曳とがどうも關係ありさうに思へて來た。そこで私は世外民に言つた。「いつでもいいが今度序に、その死人を發見したのはどんな人だか聞いてきてもらひたいものだ。それがもし泉州生れの若い女だつたらもう何もかもわかるのだよ。——いつか我々が聞いたあの廢屋の聲の主も。それから今度の縊死人の原因も。——本當

に若い男だつたといふのなら、それや失戀の結果だらう。——幽霊の聲にまどはされて死ぬより失戀で死ぬ方がよくある事實だものね。尤も二つとも自分から生んだ幻影だといふ點は同じだが」

私は大して興味はなかつた。しかし世外民が大へん面白がつた。罪を人に着せるのではない。これは本當だ。事實、世外民は先づ興味をもちすぎた。さうしてそれが私に傳染したのだ。世外民は私の觀察に同感すると早速、その場を立つて發見者を調べるために出かけた程なのだ。近所へ行つて聞けばわかるだらうといふので。

間もなく、世外民は歸つて來たが、その答を聞いて私は、臺灣人といふものの無邪氣なのに、今更ながら驚いたのである。彼等の噂するところによると、それは黄といふ姓の穀物問屋の娘が、一家は禿頭港から少し遠いところにあるさうだが——彼女が偶然に夢で見たといふその男がどうやら死んだ若者だし、それが這入つて行つた大きな不思議な家といふのが、どうも禿頭港のあの廢屋らしい。その暗示によつて、なくなつた男の行方を捜してゐた人人はやつと發見することが出來たといふのである。靈感を持つた女だといふ風に人人が傳へてゐると言ふ。

私は無智な人人が他を信ずることの篤いのに一驚すると同時に、そんな事を言つてうまうまと

人をたぶらかすやうな少女ならば、いづれは圖圖しい奴だらうと思ふと、何もかもあばいてやれといふ氣になつた。私はまだ年が若かつたから人情を知らずに、思へば、若い女が智慧に餘つて吐いた馬鹿馬鹿しい嘘を、同情をもつて見てやれなかつたのだ。

「世外民君。来て一役持つてくれ給へ」

私は例の扇をポケットに入れ、それから新聞記者の肩書のある名刺がまだ残つてゐるかどうかを確かめた上で外へ出た。無論、その穀物問屋へ行かうと思ひ立つたからである。さうして娘に逢へば扇を突きつけて詰問しさへすれば判るが、ただその親が新聞記者などに娘を會はせるかどうかはむづかしい。逢はせるにしてもその對話を監視するかもしれない。世外民がうまくその間で計らつてくれる手筈ではあるが、それにしてもその娘が泉州の言葉しか知らなかつたらそれつきりだがなどと思つてゐるうちに、私はもうさつき勢ひ込んだことなどはどうでもなくなつた。自分に何の役にも立たない事に興味を持つた自分を、私は自分でをかしくなつた。

「つまらない。もうよさう」

世外民はしかし折角來たのだからといふ。それに穀物問屋はすぐ二三軒さきの家だつた。それから後の出來事はすべて私の考へどほりと言ひたい所だが、事實は私の空想より少しは思ひがけ

ない。

まづ第一にその穀屋といふのは思つたより大問屋であつた。又、主人といふのは寧ろ私の訪問を歓迎した位だ。この男は臺灣人の相當な商人によくある奴で内地人につきあふことが好きらしく、ことに今日は娘がそんな靈感を持つてゐる噂が高まつて、新聞記者の來るのがうれしいと言ふのであつた。さうして店からずつと奥の方へ通してくれた。

「汝來仔請坐」

と叫んだのは娘ではなく、そこに、籠の中ではなくて裸の留木にゐた白い鸚鵡である。

娘は、しかし、我我の訪れを見てびつくりしたらしく、私の名刺を受取つた手がふるへ、顔は蒼白になつた。それをつつみ匿すのは空しい努力であつた。彼女は年は十八ぐらゐで、美しい事はない。私はまづ彼女の態度を黙つて見てゐた。

「あ、よくいらつしやいました」

思ひがけなくも娘は日本語で、それも流麗な口調であつた。椅子にかけながら私は言つた――

「お嬢さん。あなたは泉州語をごぞんじですか？」

「いいえ！」

娘は不意に奇妙なことを問はれたのを疑ふやうに、私を見上げたが、その好もしい瞳のなかに嘘はなかつた。私はポケットから扇をとり出した。それを半ばひろげて卓子の上に置きながら私はまた言つた――

「この扇を御存じでせう」

「まあ」娘は手にとつてみて「美しい扇ですこと」物珍らしさうに扇の面を見つめてゐた。

「あなたはその扇を御存じない筈はないのです」私は試みに少しおこつたやうに言つてみた。

「ケ、ケ、ケツ、ケ、ケ」

鸚鵡が私の言葉に反抗して一度に冠を立てた。

みんな黙つてゐるなかに、不意に激しく啜泣く聲がして、それは鸚鵡の背景をなす帳の陰から聞えて來たのだ。涙をすすり上げる聲とともに言葉が聞えてきた――

「みんなおつしやつて下さいまし、お嬢さま。もう構ひませんわ。その代りにその扇は私にいただかして下さい」

「……………」

誰も何と答へていいかわからなかつた。世外民と私とは目を見合した。

姿の見えない女はむせび泣きながら更に言つた。「誰がだか存じませんが、お嬢さまは少しも知らない事なのです。わたしの苦しみを見兼ねて下さつただけなのです。ただあなたが拾つておいでになつたその扇――蓮の花の扇を私に下さい。その代りには何でもみんな申します」

「いいえ。それには及びません」私はその聲に向つて答へた。「私はもう何も聞きたくない。扇もお返ししますよ」

「私のもありませんが」推測しがたい女は口ごもりながら「ただ私の思ひ出ではあります」

「さよなら」私たちは立ちあがつた。私は卓上の扇を一度とり上げてから、置き直した。「この扇はあの奥にゐる人にあげて下さい。どういふ人かは知らないが、あなたからよく慰めておあげなさい。私は新聞などへは書きも何もしやしないのです」

「有難うございます。有難うございます」黄嬢の目には涙があふれ出た。

*

*

*

*

*

幾日目か社へ出てみると、同僚の一人が警察から探つて來た種のなかに、穀商黄氏の下婢十七になる女が主人の世話した内地人に嫁することを嫌つて、罌粟の實を多量に食つて死んだとい

ふのがあつた。彼女は幼くて孤兒になり、この隣人に拾はれて養育されてゐたのだといふ。この記事を書く男は、臺灣人が内地人に嫁することを嫌つたといふところに焦點を置いて、それが都合であるかの如き口吻の記事を作つてゐた。——あの廢屋の逢曳の女、——不思議な因縁によつて、私かその聲だけは二度も聞きながら、姿は終に一瞥することも出来なかつたあの少女は、事實に於ては、自分の幻想の人物と大變違つたもののやうに私は今は感ずる。

アダム・ルックスが遺書

……さて、本日、マインツよりの通信なりとて、一新聞紙に掲載されたる左の記事は、いかにもロマンチックにて或は獵奇館先生たる大兄の趣味に合ふかと思ひ、試みにその大意を抄譯してお目にかけ申し候。これを材料にして一篇の大作が出来ぬものか——

アダム・ルックスが遺書

革命史に通ずる讀者は多分知るなるべし。當時、この地マインツの人、アダム・ルックスといふ一青年が、國會に向ひて併合の事を嘆願すべくパリに在りて、愆々、斷頭臺に向つて急げるシヤロット・コルデイの檻車を群集の中より望み觀、甚だしく彼女の態度に感歎してやまず、宜しくこの烈女のために記念像を建てて、ブルウタスよりも偉なる者と銘すべしと論じ、爲めに、その後、彼も亦忌まれて斷頭臺に送られたり。この事實は既に諸史書に明かなるが、頃日、當地の好事家アンリー・レベルレー氏の手によつて偶然、彼アダム・ルックスの遺書なるものを發見せらるるに及びて、この事實の始終は一層明瞭となれり。しかもその遺書に依れば事實は甚だ奇にして、彼が刑死も亦、多彩なる革命史話中の一語概たるを備す。蓋し新史料としてはさまで貴重なるものに非ざるべけれど、人の運命の數奇なるを示してこの點興味あるものと言ふべきか。尙、發見者レベルレー氏はその發見顛末とともに近く之を學界に發表する筈なるも、但、この手書は封筒散失し、本文また宛名の明記なく、目下レベルレー氏はその受取人に相當すべき人物を明確にすべく諸方面を穿鑿中なりといふ。ルックスが遺書の内容は次の如し（新聞記事はその散文的なる程度、小生のこの惡譯と大差なし。然し、以下、ルックスの遺書はちよつとした美文なり。或はその當時の文體なるか。何しろ小生の譯文では駄目也。そのお積にて讀まるべし）

獄中 一七九三年十一月七日。

貴君よ——かつて親愛なりし友、然して今また再び親愛なると呼ぶことを許すなる可し。——親愛なる友よ。

貴君は予が書翰に對して、恐らくは萬感あらん。就中、その最たるものは、予が再び貴君を吾が友と呼ぶことの不審なるか。然し、この時代に於て、予が今これを認めつつあるはかかる場所なるを知つて、貴君が直ちに予が運命に想到し、不審は一轉して別様の感慨を生むなるべし。然

り。この書は予が絶筆ならん。明日——恐らくは然らん——予はルイ王と同一なる運命を見るべし。予は王者とその最後の運命を一つにす！ 地上敷尺の高きところに、巾狭き板の上に予は俯臥し、予はきつく縛し結ばれ幾百人の流血によりて汚點多き版の上に餘儀なく接吻する時、瞬間に予が頭は予が胴體より離るるなるべし。然して巧みに捲かれたる予が頭部は、予自身が兩脚の間に挟まれて、かかる異形の子が屍の上には生石灰を撒布せらるるなる可し。徒らにかかる記述を費して予は、必ずしも貴君に予に對する憐憫を哀願せんとする者に非ず。貴君もし予が爲めに自ら涙を惜まざれば、予もとよりこれを拒まじ。予は敢てこれを求めざるのみ。ただ最も望むところは貴君が予に對する舊時の友情を回顧するのあまり、予に對して過分なる同情を濺ぎ、予のかかる死を哭すること莫からむこと之なり。生來予は他人の憫れみを受くることを好まざるに似たり。且つ予は既に予自ら己が死を悼まざる也。乞ふ安んぜよ——寧ろ、喜んでこれに就かむとす。同囚の傳ふるところを聞くに、先日刑死せるジロンド黨の二十一名士は、その前夜、獄外なる諸友が贈るところの食物と果實と美酒とを以て盛大なる最後の晩餐を行ひ、時と所とを超脱忘却せる大宴遊の間、自由自在にその機智と洒落とを交換し、共和政治の未來を論じ又人生の歸趨を談じ、死の問題を究めて、相互に談笑し悠然として皆ソクラテスの臨終を學ばんと志すものの如くなりしと言ふ。貴君も知らるる如くかの二十一名士のなかにはポアイユ・フォンフレド氏ツェンシャテル氏のごとき貴君及び予等と同年輩なる年少の士ありて、然も平然自若この事あるを知りて、予は善哉と叫ばざるを得ざりき。彼等死刑の宣告を受くるやボアイユ・フォンフレド氏は、法廷に於て、同じく年少の友ジュース氏は又その友を抱きて「我が友よ、自ら慰めよ、汝とめたるは我なり」と言ひしに、デューコス氏は又その友を抱きて「我が友よ、自ら慰めよ、汝と我とは死を偕にするに非ずや」と答へたりといふ。しかしてこの二人の友は斷頭臺下に到るや互に強く相抱きぬとなり。この徒が美しき友愛を聞きて予は眼底のそぞろに熱くなるを覺えぬ。貴君よ、予は何をか言はんとしたる。我等が昔日の友情なるか。否、非ざるなり。予は唯、予も亦彼等を學びて從容として死に行くことを得べしと言はんと欲せしのみ。予を徒に傲語するものと思ひ給ふ勿れ。何となれば、もし予にして死を怖れて生を望む者ならば必ずしもその道なかりしに非ざる也。予は寧ろ、その一半は好んで死地に入れる者といふを得べし、その故はいかにぞや。幸に予が語るを聴き給へ。予が言の眞意と又、予が何が故に最後のこの一書を敢て貴君に呈するかは自づと明白となりぬべし。

貴君よ。予は名士に非ず。その雄辯なく、その機智なく、その哲學なく、また彼等のごとく談

笑すべき友もなし。又、美酒なく良果なし。ただ纔に紙を展べてその面にむかひても言ふ。しかして恥づらくは言や最も癡愚なるべし。

貴君よ。貴君と予との言ふことなくなり、書を交換することなくなりてより已に四年とたりぬ。予はその間の貴君の生活を熟知せり。敢て貴君を知らんと欲せしに非ず、ただ貴君と起居する一婦人の常に予が念頭を去來して去らざるが故なるは改めて告白するの要なからんかし。然り、然して自づと貴君が満足の境涯を知る。羨望の思ひは今予が述べんとするところに非ず。貴君が予に與へたる痛痕は亦ここに喋々せんとするところに非ず。但願はくば、予がその後予の快快たる心事を忘却せむとして好んで社會的生涯の渦中に身を投じたるの一事を知られんことを乞ふ。この事は恐らく貴君或は既に知るなるべし。然もこは予が本來の性格と相背馳せるものなることは、蓋し何人よりも多く貴君之を解するなるべし。然も怪しむ勿れ。然らば平靜なる境涯の幸福を斷念せる予は、社會的名譽を求めたるか。非ず。はた社會人としての已に覺醒してその福祉を増進せむとするか。非ず非ず。唯その遅々として且つ重苦しき歲月を忘れんがための一段に過ぎずして、また 偶かかかる運動に投じたるは、蓋ただ時の勢なるのみ。こは予にとりて單に自暴自棄の一様式なりと告白すべきに至當なりと思ふなり。夜半靜に予は己がこの日頃を思ひみて、心中の空虚を凝視しつつ自ら疑ふの念切なるものありき。公衆の譽の爲めに盡せりと信じていつつ何の満足をも幸福をも見出すこと無きは何の故ぞ。自ら欺けるに非ざるなきか。予が社會に奉仕すといふは蕩兒の攀花折柳と何の撰ぶところぞや。否、非ず。蕩兒は酒色を愛して爲めに身命を厭はず。思ふに彼等は幸福と満足とを知るなるべし。しかして熟ら思ふに予が本性を公衆の善の爲めに盡さんよりは、自棄して却つて市井の逸樂兒に近きが様につくられたるに非ざるか。然も、予は今、自暴自棄しながら、終に漁色瀟酒の徒たらざるは果して予の理性なるか。否、否、否。予は試みに紅燈に親しむこと必らずしも無かりしにはあらず。而してその時、予は予が胸中なる聖き幻影はために冒瀆せらるるを覺えて予は更に甚だしき悲涼を知るのみなりき。予は胸中に己を悲傷せしむるところの一幻影を藏し、これによつて苦しみつつもしかもこれを惜しむその影去らんとするを懼るるが如き矛盾を呈しぬ。予が酒色に沈溺せざりしはただこの殉情のみ理性に非ざるなり。それほどの理性もし予にありたりしならむには、予は先づ敢然として予が胸中の幻影を速に驅逐せんとすべきには非ずや——今更、かかる事ども論ひて何の用かあらむ。時は——吾が最も僅少なる時は今や燭の油とともに刻々に消えさりつつあるものを。さらば慌しき記述を急がばや。

七月十七日、予は巴里に在りき。騒々しき首都の見聞によりてせめても憂さ紛らさんとの意もありて身は、心になき公用を自ら進んで引受けて、この地に在りしなり。この日は十三日にマラー氏を刺せるシャロット・コルデー女が處刑の日にて、市中は異常にざわめけり。大膽小心、かほどの業を織手もて成し遂げたるこの妙齡の女性を目睹せむとてなり。予も亦群集のなかにありき。想起す、この時、予は堵の如き群集のなかにて、多數の若き婦女がびつたりと密着してその肉體の線を殆んど露はに示せるキトンめきたる衣服を纏ひ、又結ばざる髪を長く垂れたる目新しき風俗にて、彼女らは口々に喋々と罵れりしが、その耳には鐵もて作られたる形奇異なる耳輪を飾れるを見て、後にこれを人に質せしに、これ斬新の意匠にして現時の流行なる斷頭臺形なりと聞き、また小兒の玩具、菓子類などにもこの形を模したるものあるを知るに及びて、予は巴里人士の好尚に對して轉た呆然たりき。愕き、憤り、又憂へぬ。——思へば、この日その小さき雛形を見て異しとせし當のものを、予は明日まのあたりに且つあまりに近く最もつぶさに見るなる可し。又、得忘れず、この日、天は雲多く烈日は時に耀き時に翳りたり。コルデー女が傷むべき馬車は容易に来るべくもなかりき。既にして雲は密雲となりて大粒の驟雨到りぬ。群集は爲めに散じぬ。予も亦、もと一片の好奇心なれば雨を避けてまでこれを見むとしも思はず。立止らんとして、とみれば近きあたりに一旗亭あり。旗からの空腹と兼ねては、しばし雨をここに避けばやと扉を排して入りぬ。満堂に客の溢るるけはひなりしが、予を迎へたる少年はいとも鄭重に予に接して、最も窓に近き一卓子に招じぬ。今にして思へば。予は近きころの首府の風習に疎くて、いと多額なる纏頭を彼に與へたるが如し。予は往年の都を知りて最も普通なる額のつもりなりしが、この頃纏頭を與ふること既にすたりたるが上に、若しこの習あるともそは往年に比して少額にて事足れり、多きは反つて貴族めきたりとして人々憤しみとなり。しかもギャルソン達はその多きを敢て厭はぬげなりき——かかる一些事一つとして、予が今日の命數に關係なきものは無きなり。殊に予は之を思つて宿命なるものの奇異を痛感するを禁じ得ざる也。蓋し、予の多額なる纏頭に謝せんとするギャルソンは、やがてその下をコルデー女の檻車が通過する可き窓の傍に予を招じたるなるべし。亭は通に面し、その通は即ち彼女の車の行くべき所なりければなり。

窓外は折しも雷鳴さへ加はり雨一しほ激しく降りまさりたれど、雨具用意せる群集りて、その傘或は外套より流るる雨は瀧の如し。と、見れば何やら群集のざわめくけしきして、間もなく行人絶えたるこの雨中の街衢を一臺の馬車隊伍せる少數の軍卒たちの看視のもとに進み來りぬ。間はずしてコルデー女がものなることを知る。慘雨その車輪を没して街上の水は輒の内外に飛散

し、車は甚だ遅々たりしが、突然あまりにも烈しき雨聲と雷鳴のためや、この一行は終に進ま
ずなりぬ。偶々、予が倚れる窓の殆ど前面にして、しかも眼下程近きあたりなりしは今にして思
へば、いや更に異様の感を増すなり。その車中には仄に白き顔あり。しかも密雲のために天は暗
く、激雨は濃霧となりてあたりを閉せり。されば僅々十米突を距てたる車中の人をも之をさだか
に見るを得ざりしなり。時に一大雷鳴とともに一瞬間四邊は閃き渡りて、消えぬ。嗟、電光影
裡にわが見たるは何人ぞや。予は思はず人の名を呼ばんとせり。何人の名ぞや。おお、餘人に非
ず、貴君よ、そは貴君夫人の名なりしなり。吾が幻影の名なりしなり。數年前その人に對ひて幾
度か予が呼びし、かの親愛の名なり。その後ひとり屢々私に呼びなれし悲傷の名なり。——予は
一たび自らの妄想を笑ひぬ。しかも、一瞬間前十米突のかなたに廓然と浮び出でて電光閃裡に
わが捉へ得たるその面差は、かの人のものに非ずしてそもそも何人ぞや。いかなる容貌ぞと問ふ
の要はなし。貴君、ただ試みに貴君が夫人を呼びて彼女にも言はしめよ。予が見たる車中の彼
女も亦唇動かしていと靜かに、隣座せる警吏にも言へる者の如くなりき。愕然たる予は更に
そを見究めんとする時、四邊はもとの薄明に閉されつ、ただ仄かなる輪廓のみぞ彼處にはあり
ぬ。電光時に復閃けりといふ、此に前回の如き警吏を捕まへ出す。

予は甚だしく自らを怪しみぬ。若しシヤロト・コルデー女を坊間カン市の人と傳へずしてマ
インツの出身なりと聞きたりしとせば、予は正しくシヤロト・コルデーとは貴君が夫人の變名
なりと信じたるなるべし。實にさばかり相似たりしなり、貴君の夫人とかの一瞬時に予が認め
得るコルデー女とは。世にかくも相似たる二人あるべしやは。竟に予の信じたきところなり。
然るに予は己の眼を信ぜざるを得ず。予はかくて考へ得たり。曰くその相似たるものは單にその
相貌の外形にはあらで、その精神なりしに非ざるか。思決して凜然としてまた欣然として死に就
かんとする時、靈高く天に沖して世上一介の少女子皆かくの如く同一様に美しきには非ざるか。
予はすでに一度かかる一女子を見たる事ありき。貴君よ。貴君も亦この人を見たるならん。彼女
は心ざま悪しき夫に見捨てられしを悲しみて、毒盃を仰がんとしてその夫の友に救はれて彼と相
思の人となりしも、悔悟せる夫とその愛兒とを捨つるに忍びず、彼女は義理を思つて決然として
戀を抛ちぬ。彼女がその苦境のただ中にありて或る時その戀人に示したるその表情を、予は生涯
決して忘却せざる也。宜なる哉、彼女のコルデー女と相似たるや、その相通するものは蓋し、決
してそが鼻目の外貌に非ざらん。恐らくは然らん。然もその鼻目も亦何すれぞ太く相似たる。予
は自らの眼を怪しむに堪へざらんとす。

折しも豪雨は雷電とともに一過し去つて、コルデー女の馬車は徐ろに進み初めぬ。予は惶惶として卓を捨てて街に出でぬ。滴々たる残雨の中を、予はコルデー女が車を追へるなりき。今一度その人を見究めばやとの思ひに予は半ばは自覺なかりしもの如し。思ふに予がその折りの足どりは傍人の目に甚だしく異様なりしなるべし。予は唐突にも背後より呼びとめられたるを知りぬ。かへり見すればそこには兩個の壯漢ありき。頭には赤色の尖帽をいただけ腰間に佩びたるは巾廣くて反りかへりたる劍なり。問はずしてジャコビン黨員なるを知る。「汝、何處にか往く。かかる間に接して予は彼方、コルデー女が馬車を指しぬ「見んとす、彼女を。——かの烈女を。」

「かの烈女」かく反問せらるるに及びて、予は始めてわが發したる無用の一語に氣附きぬ。しかもこれ予が本心なりしを將た如何にかすべき。二壯漢は暫し互に相見交しむたりしが、さて徐ろに視線を予に投じつつ、命じぬ「來れ」と。かくの如くして予は彼等の集屯所に伴はれたり。

一團の武装せるジャコビン黨員等は、喋々として辯じつつありき。彼等は予に一瞥を與へたるのみにて傍に予のあるを忘れ去りたるが如くなりき。彼等の饒舌は多くコルデー女が身の上のことに係る。一人あり、そのさま微醺を帯びたるが如くなりしが、彼はコルデー女に呎尺して親しく彼女を見たる由を衆に誇りコルデー女を評して甚だ美なりとなしぬ。二十五歳と聞けども、未

だ二十にも足らぬ少女の如し。蓋し處女なればなり。惜しむべし。かの美女。聖女斷頭臺の洗禮に先だちて、我等男子が争うて施すべき洗禮ありしものを。呵々。この卑猥なる一語と衆人の哄笑とは予が心頭に憤を呼び、予をして思はずも一隻語を發せしめぬ「嗤、痴漢」と。實にも予は予の聖き幻影の瀆さるるを感じたるなり。衆人の予が方を注視したる時、予は言葉を和けて改めて云ひぬ「卿等。卿等は予を拉してここに來る。抑も又、何をか予に求むる。やうやくにして彼等は予を認めたるが如し。彼等の態度はさほど傲慢なるものには非ざりき。また彼等の發したる質問は簡單なるものなりき。彼等は予にカン市の出身者に非ずやと問ひ予は然らざる旨を言ひ更に彼等の尋問に應じて予が郷里と姓名とまた出京の日とその目的と、在京豫定と在京中の宿所とを答へしに、彼等のうち一人はその手帳のなかに録したりしが、最後に唯一言、然らば好しとのみ言ひて予を歸らしめたり。恐らくは予が舉動を怪しとして、予をコルデー女が共謀者なるかの如く思惟したるなるやも知れず。當時、コルデー女のこの舉は到底一女子の獨立的行動なりと信ぜられ難かりし折からなればなり。

首都に於けるこの滞在一週間のうち一日、偶々人の紹介する者ありて、予はカン出身の代議士ツールセー氏を訪ひぬ。彼は法廷に於てコルデー女の辯護を快諾せる好漢なり。予は必ずしも彼

に所用ありしにはあらねど、多少の用件を兼ねてコルデー女に就て知らむことを欲したるなり。予自らも亦この故を明かにせずと雖も、かの一瞥の後、予は彼女の爲人を知らんと念を生じたるに似たり。ツールセー氏は彼女を賞讃してやまざりき。彼の傳ふる所に依れば、彼女は死刑宣告後彼に對ひて曰く「わらはは貴下が、貴下自らと及びわらはとの品格を愧ぢしめざる如き立派なる態度にて辯護せられたる勇氣を深く感謝す」と述べ、さて裁判官たちの方をふり向きて「かの紳士達はわらはの所持品を残らず没收し去りたり。謝して貴下に贈呈せんに何物もなし。されどわらははこの身の貴下に對する感謝のよりよき憑證をなさばやと願ふ、即ちわらはの牢獄中に於ての諸入費の支拂ひは、甘えて貴下の仁恵に期待せんと欲す」と。予思ふにこの一語は尋常以上に高貴なる品性を閃かすものに非ずや。ツールセー氏また傳へ言ふ、斷頭臺に向はんとして雷雨のために車進まずなりし時、護送の役吏が彼女を憫みて、この道中は御身には長く感ぜらるるならんと言ひしに、彼女は從容として「わらはには遅くとも早くとも同じことなり」と答へたりとなり。予が車中に唇動す彼女を見たりしは、この一語を述べたる時非ざりしや、否や。郷里に歸りて後、予は直ちに秘藏せる一胸像を光あかるきところにとり出でて、久しくこれを凝視したりき、わが幻影の人なるこの像とコルデー女と果して然く相似たりやいかにと。予が餘

技として好みて像づくりしことは貴君の知るが如し。貴君は予が多くの製作を見ることを好み、また適切なる評言を惜まざりき。されどこの一胸像に就ては貴君も知り給はぬなり。こはわが生涯の一傑作なりかし。空に浮び出づるがままをよく捕捉し得てかの人の神を髣髴せしめたりと信ず。技はもとより拙しと雖もわがかの日ごろの哀切は凝りてわが心血の跡こそいとはだらなれ。今、わが片身として貴君に贈らむにはこよなくふさはしき品なるべきものを、こは既に官憲のために没收せられたり。恐らくは粉碎せらるるならむ。予は些かこれを惜み悲しむの念あり。九月二十四日の事にてありき。予は思ひがけなくも官憲の召喚するところとなりぬ。恐らくは政敵の予を牽れしならむ。その故をもその人をも予は今だに思ひ合し得ざるなり。予は即日、首都に護送せられたり。わが居宅は隈なく搜索せられしと見ゆ。計らざりき、吾が愛するかの塑像も亦巴里に運ばれ、革命裁判所の卓上に於て予が面前にあらんとは。諸人はこの像を指してコルデー女が胸像ならむと言ひぬ。予はその然らざるを力説せむと努めしも敢てその効なかるべしと思ひぬ。何となれば、コルデー女を斷頭臺上に導きてかの女に目隠したりといふ一處刑助手の到るありて、この像を一見し、こはコルデー女以外の何人にも非ずと斷言し去りぬ。もし予にして車中のコルデー女を一瞥せしこと無かりしならば、予は彼等が予を無實に罪せんとしてかかる

証言をなす者と信ぜしならむ。然もこの處刑助手が証言はわが眼の疑ひによき證を與へたるが如くに覺えて、予は何となく心落居たるを感じたるは訝しき事なり。——彼が証言こそは予にとりて甚だしく不利なるものなりけるを。吾が巴里滞在中の手記は同じく没收せられて法官の手にありき。法官は手記中の一節を示して予に詰問せり。予の文に曰く「吁、烈女なる哉。その志や悲し。古のブルウタスよりも偉なるものとして後世に傳へられむ」と。法官はまた予が代議士ジュールセイ氏との會見を追及し、更に予が歸郷の後好んで郷黨の人士に對してコルデー女に就て語りし事を難じぬ。彼等は予を目して人心を攪亂する者と做し、更に自らコルデー女の像を作りてこれを記念するならむと斷じぬ。同手記中にはジャコピン黨員が集屯所の様を寫したる箇所ありて文中に彼等を罵れり。蓋し、最も官憲の忌むところなるが如し。

予はかくて獄に下されたり。獄中、予は屢々思ふらく、貴君と貴君が夫人の名とを明示しなば、かの胸像の疑ひは直ちに氷解すべし——敢て貴君予が爲めに辯ぜらるるに吝かならざらむかと。然も予が永き静思は終にこの事を願はずなりぬ。貴君。具に思ひ見よ、予は既に心中わが生の空虚を満すべき何物をも有せざる也。予は公衆の善のために奔走すと自ら欺きつつ、事實はただ刻々の忘我を企てて、僅なる刺戟を弄べるなりき。予は疲れたる馬なり、同時にまたその迷へる

騎手なり。拍車を蹴て纒に空裏の生を行けども遂にその歸趨を知らず。今にして悟りぬ、ああ我々倦みぬ、疲れぬ。傳へ聞く、予等と同じこのルクサンブルの囚人のうちに伯爵夫人ベレーメーといふ貴女あり。囹圄のうちに五人の貴婦人と同室せるが、この貴女たち毎夜つねに、籤を引きてそのうちの一人は罪人となり他は法官に擬して革命裁判の眞似ごとをなし、最後には寢臺のほとりに枕もてギョツチンにかかる様を演じて打興ずとなり。翌日はわが身に落ちかかるやも得測らぬ一大災禍をかを貴女たちは一場の嬉戯として弄べるなり。彼女等の心理は萬人にとりて一見不可思議にして驚く可きものの如し。然れども、貴君よ、予は彼女らを能く知る者なり。狂氣の時代には又狂氣の遊戯あるもの也。また無爲と鬱屈とは屢々人を駆けつてかかる異常の刺戟を追はしむるもの也。かくて辛うじて時を忘る。彼等この時生けるには非ざる也。但、時を殺せるのみ。かくの如くして人は生を浪費せり。浪費すとも樂しみを得る者は則ち好し。しかも遂に安堵と快樂と無くんば如何。ひとりこの貴女達のみならず、すべての憑りどころなき生に居る者は、尊き刻々を持て餘すのあまり皆、愚なる企てを弄ぶものなり。唯、信念と恍惚とはた無自覺とある人のみよく生に熱中す。生とは要するにこの熱中の流そのものなるを。しかも予は今、軸木挫けたる水車にさも似たり。生の流れは徒らにわれを軋ましめ歎かしむ。倦怠の一日はかの異なる遊

びもてよく慰まむも、倦怠の一生は何によつてか慰むべき。實に倦怠の生は死よりも悪しきなり。寧ろわれをして死を擇ばしめよ。よしやまた我、生を求めて我が冤を明さむと試むとも、彼等の故もなく予が處刑を望める以上、一切は空しき努力なるべし。予は敢て奇しく苦しき運命に逆ふことなからんとす。況んや、事實を明白ならしめて理非曲直を決せむとするはわが法官たちの願ひに非ざるが如し。ただ威嚇し去つて自家の權力を樂しまんとす。ジロンド黨二十一名士の處刑を聞き予はこの感を更に深くし、同時に既に予が明日——否、既に夜は明けんとす、——今日の判決を豫知せり。而して判決の後には、慌しくも直ちに處刑臺に赴く可きが近頃の習ひなりと聞く、予が餘命は數刻となりぬるが如し。

予が二十七年の生涯、事々に一として今日のわが宿命に繋がらぬものかきが如くに觀ぜらるるも、就中、わが幻影の人とコルデー女との奇異なる相似は予の奇禍を生むに尤なる近因たりき。しかもこの一事たるや熟ら思ふに、運命一變すれば予が爲めにこよなき幸福ともなり得たるなるべし。假想せよ、今日もし世は斯くの如き狂亂時代にはあらで平和なる古の日なりしならば、しかして予はわが幻影と全く相同じきコルデー女を平和のうちに見出でしならば、予はかの胸像をつくりなどして最も寂寞なりし日、かつて伊太利への旅を思ひしかもそは人を離

ることあまりに遠くして悲しと感ぜぬ。せめては國內の彼方此方見も知らぬところ經めぐりて愁を忘るるよすがもがたと企てしも、國內の擾騒を思ふて果さざりしなり。若し國平靜にして予は國內諸地方の巡歴に在り、偶々カン市の近郊に到りて一農家の紫丁香花の樹かげにふと見でたる一女子のわが幻影にさながらなる者を見出でしとせよ。懐しきことに思ふあまり言葉交して、かの女の氣稟と才情とはつひに新らしくわが心に沁みて予が舊恨を醫し、或は予つひに彼女を娶りて心足らひ、日ごろを森羅萬象——目に見ゆるもの見えぬもの將た滅ぶべきもの滅びざるものに就て相語り草葺ける家を遶らすに百花ありて、靜かに牧歌の如く惠まれてわが髪は白くなりしやも知るべからず。斷頭臺上に果てんよりかかる生涯の方、予が本來の性にはふさはしきことは貴君これをよく知り給へり。——ああ、愚なる哉、晒ふべし、予は夢のなかに夢を語りつつありき。何ぞ今にして運命の三女神を恨みんや。

殘燈は將に暗くならんとす。檻窓の外は既に白みたり。予は紙を通して貴君に語り明しつ。今や予が神疲勞し文の條理も亦いとあやしくなりぬ。ただ記憶したまへ。予を死なしむるものは他の何者にもなし、但、予自らが描ける幻影のみ。しかも之を憫れむの要はなきが如し。人誰かは幻影の爲めに生き、幻影によりて死なざらむ。甲斐ある人はその幻影を明日に繋げり。予はす

べての痴人とともに之を昨日に繋ぎぬ。さればこそ予が路は自づと死に通へりしならん。——このもと末、貴君の夫人に傳へ給ふもよし。はた傳へたまはぬもよし。貴君の心に任す。畫を能くするソフイー・ド・コンドルセーといふ人、獄囚の肖像を寫さんとて日ごろここに來る。予と相識るに及んで常に言葉を交せり。この人に依頼してわが像を簡單に素描させて君に呈せむ。たゞ惧る、その時間ある可きか否か。またこの書は同じコンドルセー君の手を通じて貴君の手に入るならむ。予が心身甚だしく疲勞せり。されど早や就床すべき時を持たじ。好し、今は眠るにも及ぶまじ。數刻の後には予は人の世の最も永き眠を眠ることを得べければ。

この際、予が望むところのことは今日の晴天なり。予は青き空を見むことを欲す。未だ曉にして好晴のほどは知られねどこの願ひは多分協ふならん。ただ一つ物足らぬことは香高き珈琲を得られぬ事なり。ここにて得らるべき最良のものも予が舌には好適ならず。

最後に言ふ、親愛の友よ。予が貴君に對する悪しき記憶の今一掃し盡したるは改めて説くの要なからん。友よ、我等相宥さむ。

A . L .

家常茶飯

朝田が或日訪ねて来た。

書齋へ通すとイキナリ「理想的マツチ」を君は持つてゐないか」と言ふ。
「何、(理想的マツチ)て何だい」と、僕は聞いた。

「お伽話なんだが、僕は其のテキストを無くして弱つてゐるんだ。
年越しの金を工面する爲に受け合つた例の拙速な翻譯仕事の一つなんだが、本屋が出版を馬鹿に急いでゐるのでね。外國に注文して取り寄せるにしても、時日がもう間に合はないのだ。
クリスマス贈答用をアテコミなんだからね。」

君のところには色んな本が澤山あるから、ヒヨットしたら持つてゐないかと思つて来たんだが、珍しい本でもないのにあまり見かけない——アツサージの初期の作なんだ——

「うん、聞いた事は有る様にもあるが、あひにくと僕は持つてゐないよ。何うして又無くしたんだい」

「それがね、翻譯はもう出来上つてゐるんだ。原稿は印刷所に廻してあるんだがね。」

只大人に讀ませるんならあのまままで好いが、子供の爲には、挿繪を入れないと解りが悪るいだらうと本屋が言ふのだ。全く、そのテキストには古拙な初版の木版をうつした挿繪があつて、文字に書けないやうな點までちゃんと説明してゐる。一度それを見たものにとつては、この挿繪なしには、この話は成り立たないと思へる程なのだ。だから、そいつをそつくり挿入する考へで、本屋が僕の家へ原本を取りに来たんだ。その日、本屋は店員と二人連れでやつて来たんだが、僕はたしかに本屋に渡した積りなんだよ。

所が翌日使ひをよこして、その渡した筈の本をとりに来たのだ。

そんな筈はない。たしかに君のうちの主人が持つて歸つたよと僕が言ふとね。使は歸つて行つたが、二三日して今度は主人自身がやつて来て、

「イエ、お宅を出てから、あなたが出して下さつた本を、編み上げの紐を結んでゐる間、上りかまちへ置いたきり、つひ、オーバのポケットに入れる事を忘れて来た事に気が付いて、引き返して取りに来ようと思つたんですけれど、餘程歩いて来てゐたものですから面倒臭くなつちまつて、』

と言ふんだ。

本屋の主人は酒を飲むのでね。其の日も僕は晩めしでも食つて歸るやうにすすめた時刻だつた。だから、歸り途に一杯やつてゐる間に、酔拂つて原本を遺失したんぢやないかと思ふんだ。それでさう言ふと、決して其んな事はありませんと本屋は言ひ張るのだ。

實はカフエーに寄つて、一杯飲んだには飲んだんですが、そこであの連れて來てゐた店員が私に、「本を上りかまちへ忘れて來ましたね」と言つたので思ひ出したやうな譯なんできて、きつとあなたの家にありますから、探して下さいと言ふのでね。

僕も本屋の主人一人がさう言ふのでなく、連れの男もさう言つたと言ふなら、二人を否認する事は出来ないと思つたので家の者を督勵して、家中探してみたんだ。所が無い。どうしても見付からないんだ。

竊に觸つてね、畫家に頼んで別に挿繪を描かせてもいいんだけど、それも氣が利かない事だし。困つたよ。

と朝田が言つた。

僕は朝田に少しばかり同情したけれど、どうしようもなかつた。それで次のやうな話を僕は朝田にしたのだ。

僕は或一人の男を知つてゐる。それは僕の友人なんだが君は知るまい。——少し變人で世間の

狭い男だから。書生を一人置いて、今でも獨身で暮らしてゐるんだが、妙な奴だ。

茶本といふのだが、あの男に探偵をさせて見たいと僕は時々思ふのだ。探しものなどもきつとらまいよ。

それでね。書生を置き初めて、間もない頃の話なんだが、偶然彼のところへ遊びに行くと、彼は、

「うちの書生はどうも男色漢のやうだ」

と言ふのでね。「どうしてそんな事が君にわかるのだ」と尋ねると、

「此の間、夕方、書生と一緒に省線の目黒驛から電車に乗つた。切符を二枚買つて書生に渡し、恰度込む時刻だつたので一列にならんで立つてゐるんだ。僕は浴衣一枚で羽織を着てゐなかつた、僕の肩にそをつと觸るものがあるのね。ふり返つて見るとそれがうちの書生なんだ。

改札口の前で押し合つてる折だし、僕の背後にゐた書生が、僕の肩に手をのせたところで、そ

れは何かの拍子に好くある事で、不思議でも何でもないが、其の觸感がだ。我々ならば若い女にでもさはるときのやうな仕方なんだ。決して同性同士にはああは觸れない。前にのめりさうになつたとしても、それなら尙の事、どんともすこし元氣好く突き當りさうなものなんだ。蓋し異様な、正しく性慾的なものだつたので、僕も少々薄氣味悪くなつて、擦つたく思つて辟易したんだよ。

それから家に歸つてから、二三日注意して好く觀察すると、怪しい點がどうもあるんだ。だからね、僕は一見して男色家だとは見抜いたものの、一度直接書生の口から白状させて見ようと思ふんだ」

斯う言つて彼は書生を呼びつけたものなのだ。書生を僕の前に坐らせて、僕を指しながら彼は言ふのだ。

「此の先生は名高い人相見で、その方の隠れた學者なんだ。君の人相骨格を一見して、君は衆道を嗜んでゐると言はれるんだが、どうだい——」

すると書生が眞赤な顔をして、うつむいて了つたんだよ。

如何にもそれまでは、豪快なタイプの青年だつたんだが、流石に耻しくなつたんだらう。氣の

毒だつたよ。

それからずつと此の書生が、僕に親しみを持つやうになつてね。段々近しくなり、ちよいちよ

い僕の家へも遊びに来るやうになつたんだ。來ては主人の噂をコボシて行くんだよ。

それで僕も、あとになつて書生に打ち開けてやつた。

「實は君の衆道一件を見破つたのも、僕ではない。茶本だよ、君のうちの主人なんだよ。

やう言ふと、「道理で。全くうちの先生にはかなはない。恐ろしく直感的で、緻密で、推理力が強いんですからね」と書生が崇拜するやうな口調で言ふのだ。

これも書生の話なのだが、茶本は、百五十位に小さく裂いた葉書でも讀む。そんな手つだひま

でさされるのぢや書生が困るとコボスのも無理はない——
何でも近所に親切なおかみさんがゐて、洗濯物や炊事の手傳ひなども時々してくれる。そのお

かみさんが來て、或時茶本に頼んだのだ。

「やどは此の頃變なんです。夜遅く出歩いてばかりゐて、其の癖朝など郵便屋が來ると、あわてて二階から降りて來て、郵便物をヒツタくるやうにして、又二階へ上つて了ふんです。

をととのひの晩も此んな事があつたんですよ。それは葉書だつたんですが。葉書なものですから妾もそんなに氣を付けて讀まないで、只郵便屋が渡してくれたのを手に持つてゐたんです。差出人はたしかに同じ社の人なのです。近頃の遊び仲間なのですよ。所が主人が二階から降りて来て、葉書を私の手から奪ひとるやうにして二階へ駆け上つたかと思ふと、ぢきに主人は外出しました。あとでわたしが二階へ行つて見ると、其の葉書を粉々に引き裂いて、反古籠に放つたらしいんです。私も口惜しくてたまらないものですから、主人が居ない留守にと思つて、其の裂かれたはがきを拾ひ集めて見たんですよ。でも百にも二百にも小さく千斷られてあるので、どうしてもよめないんです。どうかして讀みたいんですが。」

それで茶本が答へた。

「奥さん。そんな事位、わけはありませんよ。工夫も何にも要らない。持つて来て御覽なさい。」するとおかみさんが、其の千斷られたはがきを持つて来た。書生こそ好い災難さ。半日それに掛かつてしまつたと言ふのだ。

茶本が何うしたかと言ふと、先づ本の包装に使つたあの薄い蠟紙を一枚書生に擴げて敷かせたんだ。そこで別にはがきを一枚持つてこさせて、蠟紙の上へ、はがき大の輪廓を描かせたのだ。

而してその蠟紙の上へ、百片にも二百片にも細く千斷られたはがきを、一個々々並べると言ふんだ。

それには順序があるんだ。

その順序が茶本の即案の工夫なのだ。まづ原則として、はがきの表ばかりを見るんだ。うらはは決して見ない。さうして第一に、一錢五厘の切手の青いところを拾ふ。それから、郵—便—

—は—が—き、の印刷文字の付いてゐるのを探す、それから消印のスタンプのついてゐる破片をさがす。

それらの破片を蠟紙の上の輪廓線に沿うて、新らしいはがきを参考しながら、一つづつの順序にならべて貼りつけるんだ。

それから所書の部分を、次には宛名の部分を、次には日づけの部分を、探し出しては貼る。あとに残つたのは白い部分ばかりになる。そのなかから又、はがきの四邊をなす直線をふくんでゐる部分を探つてはつなく。もつとも、この部分はさう大切な事ではなかつた。何故かといふのに端に近いぐりにはあまり文字は書いこないらしい。そこで始めて、蠟紙を一々裏返しにして見こは、残つた紙片を字のつながりやら、破片の形やらに従つて貼つてゆく。蠟紙の面の輪廓線は

茶本が夢でも見たのだらうぐらゐに思つてゐた書生は、實際びつくりしたさうだ。しかし、書生はいつもやかましく言はれる事ではあり、自分で玄關をあけて置いた覚えはないのだから、朝めしの時になつて茶本に言つた。

「先生、私は玄關を開けて置いた覚えはないのです。ドンは自分で這入り込んだらしいのです。五寸ほど戸が開いてゐました」

茶本はその朝はひどく不機嫌だつた。朝早く起きると彼はいつもさうなのだが。それで書生の言葉に對して茶本は言つた。

「ドンが自分で開けた！ 馬鹿を言ひたまへ、靴を叩へ上げることも出来ないほどの小犬に、自分で格子戸を開けるほどの智慧も力もあるものか。いいかげんな事を言つてはいけないよ」

「でも私はいつも先生がさう仰言るから、びしやつと閉めて置いたのです」

「君はあそこから井戸端へ出たのか」

「へ？ さうです」

「それなら君は、なるほどピシヤリと閉めたらしい。あまりピシヤリとやり過ぎたのだ。ゆるい格子戸はその拍子にはね返つて四五寸も開くし、僕はまた、その物音で目が覺めたのだ」

書生は私に白狀して、「さう言はれて見ると、全くさうらしいのだ」と言つた。そこで書生は、茶本に、

「先生は、寢呆けてゐながら、よくもそんな音まで聞えますね。驚いた耳ですわね」

「何をいふのだ。驚くことはない。耳を疊へつけてゐるのだ。起きてゐて聞くよりはつきりわかるさ。寢呆けてゐて、誰だつて眼が覺めた時ほど頭のはつきりしてゐる時はない。俺は昔から寢呆けたなんて事はないよ」

書生は私に向つていふのだ「全く、あの日にはさんさんやられましたよ。——先生に女房の居つかないのは無理がないや」

「全く、人間はもつと間が抜けた方がいいね」私はさう答へた。

「朝田君。私が君に行つて相談してみたまへといふのは、かういふ男のだが、茶本は多分（理想的マツチ）を探し出してくれるだらう——君の家にありさへするならね」

私は紹介に茶本の所番地を書いて、簡単な地圖もつけて朝田にやつた。

それから四五日経つた。茶本がヒヨツクリ僕を訪ねて来たのだ。

「やあ珍らしい。この間、朝田といふ男は行かない」

「あ、實は今朝田氏からのかへり路だ。久しぶりだからちよつと寄つてみたよ」

「で（理想的マッチ）は見付かつたのかね」

「有つたよ」

「どうして発見されたんだ」

「わけもなかつた。家中隅なく探したと言ふ。あとは探さないところだけ探せばいい。だからまだ探してないところを探したんだよ。だから譯は無いんだ」

「やつぱり家の中にあつたんだね」

「どんな本だときくと、青白いやうなクロスの薄い大型の本だと言ふんだらう。大型の薄いものなら平面的に置かれてるれば直ぐ目につく。立體的に置かれると場所を取らないで目につきにくい。——さう思ひながら朝田氏の家へ行つて見ると、壁がみんな青白いんだよ。」

この壁と何か關係があるな、と僕は思つたんだ。
だからね、壁に沿つた光線の當らないやうな薄暗いところを、二三ヶ所探したんだ。」

「で、どんなところを」

「先づ便所だね。ところが其處にはないんだ。」

それから二階があつて、段梯子があるね。君、朝田氏の家を知つてるだらう。あの段梯子を三段ばかり上つてから、ふりかへると手のとぐところに鴨居があるね。段梯子の上り口の眞上さ。あそこの梯子はまあ、何とうす暗い事だ。本は壁にびたりとくつついて鴨居の上に乗つてゐたよ。うす暗いところへ持つて来て、壁の色と本の色とが殆んど同じなのだ。ちよつと目にはつかない。でも手をのばしてさぐるとすぐ落ちて来た。——バサツと音を立ててね。——地震でも一度あつてくれたらわざしく僕などが出張する必要はなかつたのだ」

「だ」

「其處は薄暗いんだよ。今もいふとほり。だから何がのつかつてゐてもわからないんだよ」

「だつて、何故、本がそんなところに在つたのだ」

「本がひとりで二階へ上つたのならロマンチックなのだが。僕の解釋によるとだね。言ふまでもなくやつぱし朝田氏自身がやつた事なんだよ。」

朝田氏が最初僕を訪ねて来た時に一時間ばかりの對談中、二三回も便所に立つたので、僕は何かその方の病氣ではないかと思つた程だよ。少くとも小便の近い人だと言ふ事だけはわかつんだ。」

「初對面で君が、其の頻繁なのに氣付いたのは感服の外ない。實は先生以前から糖尿病だよ。」

「そこで肝腎な事は、僕が思ふのにね。朝田氏が本屋を送り出す時に、小便がつまりつてみたんだらうと言ふ事なんだ。」

本屋は二人連れで歸つて行つたんだ。

玄關口を見るとね。(理想的マツチ)の原本が置き忘れてあるんだよ。

それで朝田氏は、忘れて行つたな、仕方がない、二階の書齋へ持つて行つて置かうと思つてね。階段を二三段上りかけたんだ。

ところが、今まで我慢してゐた小便なのだ。性急に放尿を要求して來るので、階段の途中で我慢しきれなくなつて、其の(理想的マツチ)を、何げなく手のとぐくところの先刻言つた鴨居の空間へのつけたんだね。

そして便所へ駆け込んだんだ。

よくある事だよ。とにかく小便のつまりた時は物事を胸忘れするものさ。

それで朝田氏は、(理想的マツチ)をそんなところへのつけた事も、本屋が置き忘れて行つた事すらも思ひ出せない程、一切を放尿と共に忘却の壺のなかへ流し込んでしまつたんだよ。いやいや、便所の扉から出た時には或は、まだ念頭にその影ぐらゐはとどめてゐたかも知れない。しかし夕餉の時間だつたといふから、きつと二階へ上る前に細君に呼ばれて茶の間で食事をしたね。乃ち鴨居の大切な(理想的マツチ)はここに到つて完全に、朝田氏の頭からは消失したのだ。——さうだと思ふ。一たん忘却したとなると、置いた場所が場所なところへ、本も壁も同じやうな色だし、わけても、あそこは晝間でも電燈か瓦斯か、それこそ(理想的マツチ)でも灯さなきや目がとどかないと來てるんだ。階段の上り降りにも決して氣が付かない。梯子を下りる時には、いつも目の前に現はれる場所なのだから、つひ却つて誰も特別の注意をおこたる。——ちつとも見てゐないくせに、いつも見てゐるやうな氣持がする場所なのだ。そこがうす暗い事さへ家人は忘れてしまつてゐて、氣が付くのも來客だけぐらゐなものだらう……」

「ふむ。君の想像通りかも知れないね。恐らくさうだらう。なる程。」

ところでだ。それはまあそれでよかつたが。僕も一つ序に君にお願ひしたい事があるんだ。

……(前略)私ハ日頃カラアノ女——赤澤婦長トハ不仲デアリマシタ。四年前、學校ヲ卒業シテ醫局ヘ入ツタ最初ノ日カラ、何ノ理由モナク私ハアノ女ニハ好感ガ持テマセンデシタ。蟲ガ好カヌトイフノデセウカ。太ツテズングリトシタアノ女ヲ見ルト妙ニ腹立タシイ氣持ニナル事サヘアリマシタ、然シ、ソナ心持ハアノ女ノ外形カラ與ヘラレルモノデハ決シテナイノデス。アノ女ハ勿論美人デハアリマセンガ、何人ニモ不快ヲ與ヘル程ノ醜貌ヲ具ヘテ居ルワケデハ決シテアリマセン。寧ロ丈コソ低ケレ肥エ太ツタトコロガ堂堂トシテ婦長タル風格ハ立派ニ具ハツテ居タ位デス。病院ノ外デチヤントシタ外出姿ヲ見カケタコトモ一二度アリマスガ、ドコトナク貴婦人ノヤウナ風格サヘアツタモノデス。私ト彼女トノ不和ハ、ソナ外貌ナドノ問題デハナクモツトモツト本質的ニ、ツマリハ相互ノ性格ノ中ニ永久ニ反撥シ合ハナケレバナラナイ何物カガアツタノダト云フコトハ、後ニナル程ダンドンハツキリシテ來マシタ。時折、私ハ空想ヲシテミテ、コソナ女ヲ間違ツテ女房ニ持ツタラト考ヘタダケデ、身震ヒスルヤウナ氣ガシマシタ。

アノ女ハ珍ラシク賢イ女デス。女トシテハ賢スギマシタ。私ハアノ女ノ生ヒテハ珍ラシクハリマセンガ、同ジ地方出身ノ學生ナドノ口カラ出タトカデ自然耳ニ入ツタトコロニ憑リマス、アノ女ハ信州ノ片田舎ノ農家ノ生レデ、十四ノ秋マデソノ農村ニ育ツタサウデス。中流ノ農家ダト云ヒマスガ、ソノ年ノ冬、繼母ノ虐待ニ堪ヘカネテ、自分カラ進ンデ諏訪ノ紡績工場ニ入り、二年ホド女工ヲシタ後、父ヘハ繼母ト別レナイ以上ハ斷然歸郷シナイト書キ遺シテ、當時□□□□病院ノ看護婦ヲシテ居タ同郷ノ娘ヲ手頼ツテ上京シタサウデス。都會デハ墮落スルカラ首ニ繩ヲツケテモ連レテカヘルト言ヒ張ル父親ヲドウ納得サセマシタモノカ、ソノ儘女中奉公ヲツツケテ東京ニ居殘リマシタガ、ソノ翌年ノ春ノ□□□□病院ノ看護婦試験ニ合格シマシタ。四年間ノ見習看護婦生活ヲ濟マセタ後、仲間ノ誰彼ガ市内ノ派出看護婦ニナツタリ、或ハ看護婦免狀ヲ嫁入資格ノ一ツニシテ歸國シタリ結婚シタリスルノヲ尻目ニカケテ、アノ女ハソノママ病院附キノ、ソレモ慣レルトハ言フモノノ女トシテハ矢張り決シテ氣持ノ好カラウ筈モナイ外科附キノ看護婦ヲ志願シテ留マツタノダト云ヒマス。十年程勤メタ結果ニハ到頭、外科病棟附キノ主任看護婦ニマデ經昇ツテ、ソノ後間モナク×××醫科大學ガ新シク設立サレルト同時ニ教授トシテ□□□□病院カラ赴任サレタ岡野博士ニ拔擢セラレテ、私共ノ教室ノ婦長ニ轉任シテ來タノデス。全ク適任デシタ。私ガ知ツタ後、アノ女ノ婦長トシテノ手腕ハ實ニ見上ゲタモノデシタ。入院患者ノ病室ノ

割宛、患者達ノ家族トノ種々ナ交渉、擔任醫員ノ詮衡、——患者ノ病狀ヤ社會的地位、醫師ノ
 技倆經驗性格、ソシテ小面倒ナ事ヲ即座ニ見極メテソレゾレピタリト振當テ、一度ダツテ謬ツタ
 事ハアリマセンデシタ。手術室ヤ病室デ屢々起ル危急ノ場合ニモ、曾テアノ女ガ狼狽シタ態ヲ見
 タ事ハアリマセンデシタ。先年ノ震災時ノ突嗟ノ處致等ハ今デモ時々病院ノ話題ニ上ル位デス。
 兎角若イ女同士ニ有勝ナ嫉視ヤ反目ノ起リ易イ部下ノ看護婦達ノ間ニモ氣受ケモヨク、心服サレ
 ナガラ治メテ居マシタ。尤モ、私ガ知ツテカラ只一度、チヨツト垢拔ケノシタ見習看護婦ノ一人
 ガ耳カクシニ髪ヲ結ツテ學生ノクリニツクヘ出タト云フノヲヒドク叱責シテ、勿論狂言デハアリ
 マセウガソノ女ガ昇永ヲ嚙ンダ事件ガアリマシタ。ソシテ些細ナ事ハ別トシテ、トニカク五十ニ
 近イ病室ト二十人ニ餘ル助手ト三十人以上ノ看護婦トニ纏ハル事務ト監督ト紛糾トヲ朝飯前ノ仕
 事ニ切裁イテ、ソノ上凡帳面デ有名ナ教授ノ身ノマハリノ世話一切ヲ始末シテ居マシタ。ソレデ
 居テ日曜ト祭日トニハ欠カサズ茶ノ湯ト生花トノ稽古ニ出掛ケテ、生花ノ方ハ既ニ奥許ヲ取ツテ
 居ルト云ヒマス——常ニ病院ヲ退イテ後ハオ花トオ茶ト師匠デ身ヲ立テルト言ツテ居タサウデス
 カラ、勿論、趣味ヤ閑ツブシノ稽古事デハアリマスマイ。カウ申シマスツイカニモアノ女ハ唯男
 優リノ味モ素氣モナイ女ノヤウニモ聞エマセウガ、必ズシモサウバカリデハアリマセン。サスガ
 ニ一面ニハ女ヲシイ情味モアリマスノデ、若イ獨身ノ助手達ノ溺レタ手術衣ノ心ヅカヒヤ、靴
 下ノ穴ノ注意ナドヨクシテヤツテ居タヤウデ。——イエ、私ハ一度モソシテ心配ニ預ツタ事ハア
 リマセン。手術衣ト云ヘバ、思ヒ出シマシタガ、入局當時、一緒ニ任命サレタ助手ノナカデ私一
 人ガ、ドウ云フワケカ婦長カラ新ラシイ手術衣ヲ渡シテ貰ヘマセンデシタ。私ハ自分ガ人並ミ外
 レテ丈ガ高イノデ自分ニ合フモノガ備ヘ付ケノ中ニ無イノダラウト單純ニサウ思ツテ居リマシタ
 ガ、ソノ後毎年注意シテキマスト新ラシイ助手ガ入局スル毎ニ、キツト一人誰カ手術衣ヲ渡サレ
 ナイ者ガアルノデス。ソレガイヅレモ一癖アル男ノミデシタ。ソレデ、私ハ仲間ヨリ一月モ遅レ
 テ、私ノ着テ居タ學生時代カラノモノガ餘リ見苦シイト注意セラレテヤツト、婦長カラ渡シテ貰
 ヘマシタ。

若イ助手達ハアノ女カラ、入院患者ノ取扱ヒヤ手術室デノ失敗ナドデ時々ニハ辛辣ナ皮肉ヲ浴
 ビセカケラレル事モアリマシタガ、シカシアノ女ハ平生ハヨク女ニハ珍ラシイ縦横ノ機智ヤ他愛
 ノナイ諧謔デ皆ヲ喜バセテ、殺風景ナ醫局ニ海ノ湧クヤウナ哄笑ヲ起サセテ居マシタ。ソレニア
 ノ女ハ將棋ガ好キデ——醫局デハヨクヨク閑ナ時ヤ夜分ナド助手達ガ、教授ニハ内々デ將棋ヲヤ
 リマス——手ノ空イタ時ナドハ稀ニハ婦長モ、岡目八目ノ助太刀ナドスル事モアリマシタ。何デ

モ醫局デ將棋ガ流行シ出シタ時、婦長ハ獨案内ヲ買ツテ夜分ノ閑ツブシニ眼ヲ通シテ居タサウデス。サスガニ自分デ駒ヲ持ツ事ハアリマセンデシタガ、定石ダケハ充分腹ニ入ツテ居ルト見エテ、時々我々ヲ驚カス事ガアリマシタ。コンナ事ハクドクト申上ゲル必要ハアリマセンデシタガ、要スルニアノ女ハ病院ノ各科ノ婦長ヲ通ジテ、總ユル點デ最モ才幹アル婦長デシタ。ソナ次第デモアリ、特ニ教授ガ古クカラ彼女ノ才幹ヲ認メテコノ地位ニ据エタト云フ因縁ヲ顧慮シテカ、——コレハ私ノ僻目カモ知レマセンガ、醫局ノ連中ハ隨分故參ノ先輩サヘアノ女ニハ一目モ二目モ置イテ居マシタ。否、モット積極的ニ婦長ノ意ヲ迎ヘントスル傾向サヘアツタヤウデス。若イ助手ハ無邪氣ラシク裝フテ、古イ助手ハ如才ナイ世智ヲ以テデス。私ニハソノ二ツトモアリマセン。私ハソナ場合ヲ見ル毎ニ、婦長モ遂ニハ矢張り女ダト思ヒマシタ。ソナ連中ガ何時ノ間ニカ破格ニ一等室ノ患者ヲ擔當シタリ、比較的珍ラシイ手術ヲ割當テラレタリ、或ハ素早く幸運ナ就職口ヲ見ル者モアリマシタ。ソシテ婦長ノ御氣ニ入りニナツタ者ガ何時ノ間ニカ醫局デ巾ヲ利カシテ居ルノデス。尤モ、單ニ婦長ノ勢力ダケデ、之丈ケノ事ガ出來ルノデハアリマスマイ。婦長ノ影ニハ勿論醫局長ガ居ルワケデセウ。コノ二人ノ間ニハ、何デモ特殊ナ、ト云フノハ互ニ物質的ナ相互扶助ヲ計リ合ツテ居ルトカデ——、シカシ、ソナ事ハ別ニ必要モナイ事デス

シ、ソレニ母校ノ名譽ヲ誤解サセルヤウナ事ガアツテハナリマスマイ。コレラノ世界デ私ハ實ニ慘メ極マルモノデアリマシタ。無口デ無愛想デ、西郷騷動ノ時ニ城山デ討死シタ祖父ヲ持チ、漢學デ鍛ヘ上ゲタ父ニハ幼年時代カラ一男子ニ尙ブベキ直情徑行ト沈黙敢爲ト一ヲ教ヘラレ、極端ニ男尊女卑ノ薩摩ニ生レタ私ハ、婦長ニ對スルスベテノ點デドウシタトテ、圓滿ナ同僚ノ諸君ニハ勝目ノアル筈ハナカッタノデス。何時デシタカ酒ノ席デ、ソノ人自身決シテ平凡ナ臨床家ノタイプトハ言ヘナイ或教授カラサヘ、常談ニデハアリマシタガ、何ヲ戸迷ヒシテ醫科大學ヘナドマゴツイテ來タカ、ト言ハレタ私ノ醫局ニ於ケル存在ハ、婦長ノ目ニハ鯉ノ中ノ鯉ホドニ映ジタ事デセウ。否、婦長ノ眼ニダケデハ決シテアリマスマイ。同僚達ノ間ニ於テサヘ私ハ確ニ水ノ中ノ油ダツタノデス。第一私ハ同僚ト一緒ニ醫局長ノ糖内博士ノ私宅ヘ出入シマセンデシタ。出來ルダケ學資ヲ切り詰メテ居タ私ハ、餘裕ノアル同僚達ト料理屋ノ門ヲ潜ル事ヲ常ニスル譯ニハユキマセンデシタ。觀劇ノ連中ニ加ハルノヲ拒ンダ事ガアリマシタ。猥リガマシイ常談ヲ口ニスル事ヲ憚リマシタ。ソナ閑ニハ私ハ私ノ趣味タル社會學ナリ經濟學ナリノ書物ノ一頁モ讀ミタイト思ヒマシタ。醫局ノ同僚達ハ氣ノ荒イコノ専門ノ仕事カラノ自然的ナ影響デモアルノカ皆、ブルータルナ飲酒ト漁色トノ手取早イ快樂ヲ逐フ事ニ急デ、性格ト趣味トノ

異ツタ他人ノ心持ナドヲ理解スルニハ餘リ單純ナ人達デシタ。一ノ瀬ハ社會主義者ダゼ、サウ私ハ言ハレタコトガアリマス。社會主義者——十年モ前ノ流行言葉デアツサリト片附ケテ私ヲ嘲笑スル同僚ノ單純サニ對シテハ、私モモウ苦笑スル外ニ手ハアリマセン。私ハ今ニナツテヤツト、卒業間際ニ友人ノ一人ガ與ヘテクレタ忠告ヲヨク思ヒ出シマシタ。彼ハ私ニ精神科ヘ入局スルコトヲ勸メテクレタモノデス。シカシ私トシテハ、サイエンスヲヤル以上ハ精神科ノヤウナモノヨリモ、基礎醫學デハ病理學ナリ或ハ臨床方面デハ、外科ノヤウナ、シツカリシタモルフオロギイノ上ニ基礎ヲ置クモノデナケレバ物足りナイ氣ガシタノデス。サウシテトモ基礎醫學ヲヤルダケノ資力ノナイ私ハ、家庭ノ都合モアリタウトウ外科ヲ擇ンダノデシタ。併シ今ニシテ考ヘルト私ハ友人ノ忠告ノ通りニセメテハ内科ナリ精神科ナリニ入局シテ居タナラバ、ソノ方面ナラバ、多少ハ内面的ナ人モ居テ同僚トノ間ニコシナギヤツプヲ生ゼズトモ濟ンダヤウナ氣ガスルノデス。愚痴デス。又、事實ハドノ科デモ皆似タリ寄ツタリカモ知レマセン。ソレニシテモアノ婦長ガ居ナカッタ事ダケハ確實デス。

私ハ他人ニ對スル不平バカリ言ツテ居リマスガ、然シ私自身ノ中ニモ父方ノ母系カラ受ケタ人ト和シ難イ狹介ナ性質ガ遺傳的ニ潜ンデ居テ、其ガ私ノ性格ノ上ニ或ル影ヲ投ゲテ居ナカッタト

ハ決シテ申シマセン。私ハ自分ノ性格ヲ省ミルト何時デモ自己嫌惡ニ陥入ルノデス。事實、斷ルニ斷レヌ宴會ノ席上ナドデ、同僚ノ皆ガ酔ツテ歌ツテ、中ニハ跳リ出シテ居ルモノサヘアル間ニ、私一人ガ黙トシテ醉ヘバ一層憂鬱ニナル盃ノ數ヲ重ネタ記憶モ二度ヤ三度デハアリマセンソナ時私ハイツモ同僚達ヲ羨望シ、自己ヲ嫌惡シテ居タノデス。私ハ自分カラ論争シカケル事モ理由ノナイ喧嘩ヲシタ事モ一度モ無イニモカカワラズ、私ハイツノ間ニカ醫局デハ變屈ノ旋曲リニサレテシマツテ居マシタ。結局私モ其ノ方が氣樂デシタ。義理ダケハ欠カヌ通一遍ノ交際ヲシ乍ラ、心ハ固ク彼等ニ扉ヲ閉シテ居ル方が、肌合ノ合ハナイト人間ト調和スベク重苦シイ然モ無益ナ努力ヲ續ケルヨリ増シダ、トサウ斷念スル氣持ニナリマシタ。入局後一年間程ハ婦長トモ同僚トモコシナチグハグナ心持ヲ隱シ合ツテ愉快デハナイ乍ラモ、トニカク表面ハ圓滑ニ過ギテ來マシタガ、コノ不自然ナ状態ハ或ル小サナ事件ヲシホニ、端ナクモ先ヅ婦長ト私トノ不和、其カラ私ト同僚トノ氣拙サノ順序デ露骨ニ現ハレル事ニナツタノデス。ソノ事件ト云フノハ滑稽ナシカシソノ結果ハナカナカ笑ツテハ了ヘナイ或ル出來事ナノデス。

私ヨリ二年後ノ卒業生デ栗田トイフ助手ガ居リマス。學生時代カラ評判ノ美少年デ病院中ノ看護婦ノ噂ノ種デシタガ、ソノ栗田ガ卒業後、各科ノ看護婦ヲ絶望ノ淵ニ沈メテ外科ヘ入局シマシ

タ。良家ノ生レデ都育チノ栗田ハ醫局ノ誰カラモ愛セラレマシタ。美貌ハ男ニトツテモ確ニ稀ナ天分ノ一デス。手術室デ白イ手術衣ニツツマレタ美少婦ノヤウナ栗田ガ唇ヲ引キ縮メテメスヲ操ツテ居ル姿ハ實際悪クハ無カツタデス。栗田ノ事トナルト婦長ハ可笑シイ程ヤキモキスルノデシタガ、栗田モ最初ハ婦長ニ親シンデ居リマシタ。ソレガ二月程經ツト急變シテ妙ニ餘所々々シクシ始メマシタ。婦長ガ醫局ヘ入ツテ來ルト座ヲ立ツテ逃ゲル様ニ醫局ヲ出テ行ク事サヘアリマシタ。ソノ理由ハ後ニナツテ栗田自身ノ口カラ聞カレマシタガ、ソノ頃恰度、運悪クモ醫局ノ口ノ悪イ連中ガ飛ンデモナイ馬鹿ラシイ常談ヲ言ヒ立テテ居タモノデス。ソレハ、私ガ栗田ニ何カ變態的ナ野心ヲ持ツテキルト云フノデシタ。イヅレハ私ガ彼等ノ遊蕩ノ仲間入りヲシナイ事ノ腹癒セデセウガ、栗田ノ家ト私ノ下宿トガ近所デ、自然ヨク連レ合ツテ登院スルノト、モ一ツハ私が薩南ノ生レデアアルガ爲メニコノ馬鹿々々シイ噂ニ或ル可能性ヲ與ヘテ、私ハヨク赤面スルヤウナ擲揄ヲ聞カサレル事ガアリマシタ。ツマリ醫局ノ他愛モナイ冗談デハ私ト婦長トハ美少年ノ栗田ヲ對照ニシテ滑稽ナ鞘當ヲ演ジテ居ル事ニサレテ了ツタノデシタ。眞逆、此レガ原因トモ思ヒマセシガ、トニカク婦長ノ私ニ對スル態度ハ此ノ頃ヲ境ニシテ判然ト惡化シテ來マシタ。職務上ノ些細ナ手落ヲ見付ケ出シテハ意地ノ悪イ仕打ヲサレタ事ヤ、同僚ノ面前デ私ノ日常生活ニ關スル皮

肉ヲ言ハレタ事ハアマリ度々デ、一々ノ場合ハ到底述ベ盡セマセンガ、サスガニ頭ノ冴エタ女丈ケニ辛辣ナモノデシタ、私トアノ女トハ何時トハ無シニ誰ガ見テモ、明白ニ敵同志ニナツタ觀ガアリマシタ。アレ丈ケ思慮ノ深イアノ女トシテハ如何考ヘテミテモ不合理ナ程露骨ニ、時トシテハ醫局ノ同僚デサヘ却ツテ私ノ方ニ同情ヲ示ス事ガアル程、私ニ對スル一舉一動ハ憎惡ト惡念ニ滿チタモノニ感ゼラレマシタ。ケレドモヨク考ヘレバソレモ必ずシモ理解出來ナイ事デハナカツタト思ヒマス。ソノ頃婦長ハコノ年頃ノ女トシテ必ず遭遇シナケレバナラナイ或ル時期ニアツタノデス。確ニ更年期ダツタノデス。ソレデコソ私ニ對スル時トシテハ非常識トマデ見エル惡意モ、栗田ニ對スル愚カシクモ露^{アラハ}ナ熱情モ、始メテ了解デキルノデス。何十年カ壓迫シ續ケテ、シカモ明日カラハ女デハナクナル老イタ處女ノ、恐ラクハ最初デ同時ニ最後デアアル情炎ガドンナニ怪奇ナモノデアツタカハ、五月雨ノ降ル宿直室ノ深夜只一人ノ栗田ガ、薄化粧シタ婦長ヲ妖婆ノヤウニ恐怖シタ事ガアルトイフ簡單ナ彼ノ打明話ダケデモ想像サレルノデス。栗田ガ婦長ヲ見テ逃ゲルヤウニナツタノハ勿論コノ事ガアツテカラナノデス。彼女ノコノ情熱ノ對照ハ氣ノ毒ニモ、又當然ニモ、笑ト噂ト好奇ノ種トヲ病院中ヘ蒔キ散ラシナガラ逃ゲ廻ツテ居タノデス。栗田ハソノ後間モナク地方ノ資産家ノ娘ト結婚ヲシテ、歐洲ヘ夫婦連レデ留學シマシタガ、ソレラ婦長ノスベテノ怨恨ハ何ノ

理由モナク、私ノ方へ轉嫁サレテ來タノヲ私ハ感じマシタ。

申シ忘レテ居マシタが、私ハ入局シテカラ一年半バカリ經ツタ頃、醫師トシテハ頗ル不幸ナ機會ニ遭遇シタノデス。手短カニ申シマス、私ハ私ノ手術スベキ患者ノ死ヲ手術臺上——殆ンド手術臺上デ迎ヘナケレバナラナイ場合ニ遭遇シタノデス。患者ハ肛門周圍炎ノ婦人デシタガ式ニ從ツテ先ヅ腰椎麻醉ヲ行ツテ、イザ患部ヲ切開シヨウトメスヲ取り上ゲルト同時ニ激シイ呼吸困難ト脈搏ノ不整トガ現レマシタ。手術ハ無論ソノママニ中止シテ病室ヘ還シタノデシタガ、輸送車カラ病床ヘ移サレルノモ待タズニ急死シタノデス。病院デハ勿論毎日ノ様ニ腰椎麻醉ノ一ツヤ二ツハヤツテ居乍ラ今迄ハ幸ニモ——否、私ニトツテハ不幸ニモ、曾テ一度モコンナ前例ガ無カツタ事ト、病氣ガ取ルニモ足ラヌ腎部ノ小サナ腫物ニ過ギナカツタ事ト、ソレニソノ頃未ダ決シテ熟練ノ積ム筈モナイ私ガ思掛ケヌ患者ノ急變ニ狼狽シタ態度ヲ見セタ事トハ、當然ニ醫局内デハコレハ私ノ腰椎麻醉ノ技術上ノ失策デハ無イカト云フ疑惑ヲ喚ビ起サズニハ濟ミマセンデシタ。ソノ翌日憤ル遺族ヲ百方宥メ且ツ説イテ、ヤツトノ事デ病理教室ヘ死因探究ノ目的デ屍體ヲ送ツタノデス。解剖ノ結果ハ、小サナ狭イ心臟ヤ、紙ノヤウニ薄イ大動脈ヤ、葡萄ノ房ホド——七十六瓦モアル胸腺ヤ、小腎ノ像ガ子供ノモノノヤウニ劃然ト分レタ腎臟ヤ、極度ニ發育シタ舌根部ノ淋巴

裝置ナドノ解剖所見ニ依ツテ、患者ハ所謂胸腺淋巴體質トイフ一種ノ發育不全ノ體質デアツタ事實、並ニコンナ體質ニハ技術上何ノ失策ハ無クトモ完全ナ腰椎麻醉ソノ物ダケガ死ヲ突發サセル事ハアリ得ル事實ガ、學生時代カラ私ガヒソカニ敬慕シテ居タ病理部ノ教授ニヨツテ幸ニモ説明サレマシタ。オ蔭デ私ノ立場ハ一ト先ヅ救ハレタノデス。ソレデモソノナ危険ナ體質ニ對シテ何故ニ充分、手術前ニ周到ナ注意ガ拂ハレナカツタカト言フ批難ガ、直グソノ後ニ同僚ノ一人カラ發セラレマシタ。元來、戸越——ソノ同僚ノ名デスガ——ト私ハ醫局デモトリワケ仲ガ悪カツタノデス。戸越ハ醫局長ノ腰巾着ノヤウニ附イテ廻ツテ居ル輕薄ナ才子デ、コノ男ニ對シテ私ガ最モ不愉快ナ點ハ、内心ニハ何等ソノナ熱情ナドヲ持ツテモ居ナイ癖ニ、アリ合セノ小才ヲイイ事ニシテ石川啄木マガヒノ歌ナドヲ弄ンデソレヲ鼻ニカケテ居タ點デス。彼ハ最初ニ私ノ性質ヲ了解シテ居ルヤウナ顔ヲシテ居リマシタガ、私ハ自分ノ氣持ヲ偽リタクナイノデ彼ノ理解ヲ拒絶シタ態度デ正直ニ振舞ツタノデス。彼ト私トノ不和ノ原因ハコレデシタ。ソレニシテモソノ時ノ戸越ノ言ヒ方ハ一應ハ尤モデナイ事ハナカツタノデス。相手ガ戸越デサヘナカツタラ私ハ正直ニ悄氣テ閉口シテ居タカモ知レナイノデス。シカシ私ニシテモ充分ナ言ヒ分ハアリマス。私ハ珍ラシク彼ト激論ヲシマシタ。患者ヲ初診シテ、診療簿ノ治療方針ノ欄ニ「入院、アフターメ、インテリヤン切開」ト記入シタノハ醫局

長自身デハ無カッタカ。手術前私ニ腰椎麻酔ヲ命ジ、ソノ準備ヲ指揮シタノハ醫局長ト赤澤婦長トデハナカッタカ。私ハ只彼等ノ手トナリ足トナツタノミデハナイカ。成程、ソレ以上ノ事ヲスレバ或ハ患者ノ爲メニハヨカッタカモ知レナイ。ソレヲ注意シ得ナカッタノハ或ハ私ノ落度カモ知レナイ。シカシソレハ決シテ自分一人ノ責任デハナク、アノ場合私ガソレヲ行ヘバ越權デアラウ。ソレ程ノ經驗モナク又ソレホドノ資格モナケレバコソ自分ハ助手ヲ勤メテ居ルノダ。私ハソノナ意味ノ事ヲ、相手ガ意地悪ク侮辱スルガママニ追々ト激シテ仕舞ツテ、醫局ノ前ニ人ガ立止ルホドノ大聲で嗚鳴リマシタ。ソノ事件ハカウシテ私ト醫局長糠内博士及ビ赤澤婦長トノ關係ヲ一層氣拙クシテ、私ノ心中ニ忘レ得ナイ滓ヲ殘シタノデス。イヤ、人々ガ私ニ忘レサセナイヤウニシタノダト言ヒタイモノデス。ト申シマスノハ、前刻申シマシタ栗田トノ馬鹿々々シイ噂ナドガアツテ間モナク、或ル日、醫局デ助手連ノ晝食後ノ雑談ノ間ニ、ソレハ言葉ノ行掛リ上別ニソウ不自然デモアリマセンデシタガ、傍ニ居合セタ婦長ノ口カラ「何シロ、醫局ニ二年余リモ居テ腰椎麻酔一ツ満足ニ出來ナイ人ガ居ルノデスモノネエ」ト云フ言葉ガ洩レタノデス。食堂カラ歸ツテ醫局ノ隅デ煙草ヲツケテ居タ私ニハ、前々カラノ話題ガ充分ニ判リマセンデシタダケニソノ一言ガグツト心ニ應ヘマシタ。スルト直グソノ後ニ「何ト云ツタトコロガ外科醫ナシテモノハ、頭

ヤ理屈デハナイ、腕ダヨネエ——畫家ヤ音樂家ナドト同ジ事デネ——ト云フ戸越ノ聲ガ聞エマシタ私ハ直グ立チ上ツテ廊下ヘ出マシタガ、皆ノ笑聲ガ後カラ起ツタノヲ聞イタノハ、私ノ氣ノセキデハ無カッタト思ヒマス。ソレカラ後モ屢々、ソレモ醫局ニ教授ナドガ姿ヲ見セタ場合ナドニヨク「二年經ツテモ腰椎麻酔一ツ云々」ト云フ言葉ガ、婦長ノ口カラ洩レテ、婦長ニハコノ言葉ハ何時マデモ飽キナイラシイノデシタ。ソノウチニ又、私ハモウ一ツ治療ノ上ノ大失策ヲ演ジテシヒマシタ。御聽キ下サイ。實ニ變ナ失策ナノデス。

一昨年ノ九月ノ事デシタ。地方ノ開業醫カラ陰莖癌腫ト云フ診斷ヲ付ケラレテ上京シタ入院患者ヲ、私ハ擔當スルコトニナリマシタ。乳嘴狀ニササクレテ、潰瘍ヲ作ツテ、腐レカケタ花野菜ノヤウナ龜頭ヲ持ツタ四十男デシタ。初診シタ岡野教授ノ診斷ニハ陰莖癌腫？トナツテ居リマシタシ、患者ガ何カ國元ニ打捨テ置ケナイ仕事ヲ持ツテ居ルトノ事デシタカラ、患部ヲ根元カラ切斷シテ了フ事ニナツテ居マシタ。私ハ併シ念ノ爲メ、患部カラ組織ノ一片ヲ切り取ツテ之カラ病理組織學的ノ標本ヲ作ツテミマシタ。言フマデモナク其ニヨツテ一層正確ナ診斷ヲ決定スル爲メナノデス。ソノ檢微鏡標本ヲ一應醫局長ノ糠内博士ニ見セマシタ。所ガ意外ニモ醫局長ハソレヲ決シテ癌腫デハナイト斷定シタノデス。微毒ニ原因スル單ナル上皮ノ増殖ダトイフ意見ナノデ

ス。男子ノ最モ樞要ナ機關ヲ切除シ去ラナケレバナラナイカ、或ハソノ必要ハ無イカト云フ重大ナ問題ガ、茲ニ生ジタ譯デス。申スマデモ無イ事デスガ、糠内博士ノ云フガ如ク癌腫デナク單ニ微毒性ノ炎症ニ依ル上皮ノ増殖デアル丈ケナラバ、患部ヲ保存シテ他ニイクラデモ療法ガアリ得ルノデス。私ハ迷ヒマシタ。岡野教授ハ多少ノ疑問ヲ殘シテクエツシヨシマ_レクヲ附シテ居ルトハ言ヘ癌腫ト診斷シテ居リマスシ、私ハ醫局長糠内助教授ノ診斷ニハ直グ同意シ兼ネタノデス。コレハチト申シ上ゲニクイ事デスガ、糠内博士ハ正式ニ病理學ヲ學ンダ人デハナク唯、學位論文ヲ作ルタメニ××大學ノ病理學部デ二年程研究シタ丈ケノ事ナノデ、以前ニモ一度、私以外ノ一助手ガ見セタ結核ノ病理組織標本ヲ微毒トイフ馬鹿ラシイシカシ未熟ナ目ニハ有勝ナ誤謬ヲシタ事ガアツタモノデス。ソレ以來實ハ私ハ糠内博士ノ病理組織上ノ素養ニハ深イ信賴ヲ置キ難クナツテ居マシタ。私ハ考ヘアゲネタ末ニソノ組織標本ヲ今一度隣室ノ整形外科の醫局ヘ持ツテ行ツテ、ソコノ芳川博士ニ鑑定ヲ乞フタノデス。芳川博士ハ母校ノ病理部ニ久シク助手ヲ勤メテ居ラレル人デ、學生時代カラ病理組織實習デハ親シク指導ヲ仰イダ事モアリマスシ、臨床方面デハ未ダ日ハ淺クトモ病理學ノ方面デハ充分ニ信賴スルニ足ル人デシタ。ソノ芳川博士ガ私ノ相談ニ對シテ與ヘテクレタ意見ハ、コノ標本ノ血管周圍ニ集簇シタ細胞ノ種類ヤ、浸潤性ニ増殖シテ居ル

細胞ノ無イ點ナドカラ微毒性ノモノトモ考ヘ得ルガ、正確ナ診斷ヲ付ケルタメニハ他ノ部分カラモ切片ヲ採ル必要ガアル旨ヲ述ベラレタ後、熱心ニモ私ト一緒ニ病室ヲ訪レテ親シク患部ヲ視診シタ上デ更ニ教ヘラレタ所デハ、肉眼的ニハ矢張り最初ノ診斷通り癌腫ト考ヘルノガ至當ラシイガ一應ハ驅微療法ヲ試ミテ見ルノモ無益デハアルマイ、ト云フノデシタ。私ハ糠内助教授——醫局長ニハ芳川博士ノ意見ヲモ傳ヘタ後、改メテ治療方針ノ指揮ヲ仰ギマシタ。微毒ヲ主張スル糠内助教授ノ命ニヨツテ私ハ、トニカク一度サルヴルサンヲ注射シテ見タノデス。所ガ私一個ニトツテハ何ト不運ニモ、患部ハ軟カクナリ小サクナリ始メタノデス。數週間ノ驅微療法ノ後、患者ハ喜色滿面デ私ニ幾度モ禮ヲ述ベナガラ退院シタノデス。今ハ私ニトツテモ愉快ナコノ日、私ハ岡野教授ノ室ニ呼バレタノデ、別ニ怪シミモセズ氣輕ニ行ツテ見ルト、教授ハ思ヒガケナクムツカシ氣味ナ顔デ、例ノ試験的組織切片——標本ノ件ニ就テ私ニ言フノデシタ。ソレヲ私ガ整形ノ芳川博士ニ見セタト云フコトハ、サウイフコトハ兎角圓滑ヲ缺イテ居ル整形外科トコチラ——ツマリ一般外科デス——トノ、コノ兩者ノ間ニ一層不和ノ種ヲ蒔キ易イ事、以後教室内ノコトハ可成ク教室内ダケデ處理スルコトニス可キ事等ヲ諄々ト説キ且ツ誠メラレマシタ。私ハ幾度カ私ノ輕卒ヲ詫ビテ引退リマシタガ、私ノ心中ハ重苦シイモノデシタ。私ガ患者ノ患部カラ試験的切片ヲ

探ツテ出來ルダケ慎重ニ檢索シタガ爲メニ、彼ヲ完全ニ治療シ得タコノ結果ト、ソレトモ私が素直ニ岡野教授ノ診察通り患者ノ患部ヲ切斷シタ場合ト、ソレガ患者ソノ人ニトツテノ問題ハ考ヘ無イマデモ、只醫師トシテノ私自身ダケデモ、ソノイヅレガ幸福デアツタカ。又、醫學ハ一醫局ノ或ハ一教授ノ勢力或ハ名譽ノタメニハ治療ノ可能ナ患者ヲモ不具ニスルコトモ厭ハヌ學問デアルカ。私ハ鬱シ切ツタ氣持デ教授室ヲ出テ醫局ヘ引退リマシタガ、醫局ニハ恰モ婦長ガ居合ハセテ、私ノ悄氣返ツタ顔ヲ見ルナリ、片頬ニ氷ツイタ笑ヲ浮ベテ言ヒマシタ「一ノ瀨先生、岡野先生カラ何か好イオ話ガアリマシテ？」コノ一語トソノ表情トデ、私ハハッと思ヒ當リマシタ。コノ女メ、岡野教授ニ讒訴シヤガツタナ。私ハ擱ンデキタ扉ノハンドルヲ、我知ラズ握リシメマシタ。

コレマデ申シ上ゲマシタ事トモハ、シカシ、不愉快ハ不愉快デモ、單ニ感情ノ問題ニ過ギマセシ。ソレニシテモソノ感情問題ガ時々起ルノデハナク、刻々ニ在ツタノハ實ニ忍ビ難クハアリマシタガ、デモ私ハ理性デ押ヘル事モ出來マシタ。ケレドモ、私が婦長ヤ醫局長ノ糠内博士カラコノトホリ好感ヲ持タレ無クナツテシマツタソノ結果ノ最モ打撃トスル所ハ、ソノ日常ノ醫局生活ナドノ不愉快ヤ腹立シサナドト云フヨリモ、モット重大ナ點ニ現ハレテ來タノデス。外デモ

アリマセン。ソノ事以來、私ニハモウ減多ニ手術ラシイ手術ガ割當テラレナクナツタノデス。ツマリ私ハ自分ノ生命トスル學術研究ノ好機ヲモウ一切持タセテ貰ヘナラツテ仕舞ツタノデス。コノ憤ハ理性デハ押ヘラレナイドコロデハナク、却ツテ理性ニヨツテコソ燃エ上ルモノデシタ。念ノ爲メ申シテ置キマスガ、病院デハ入院及ビ外來患者達ノ手術擔當者ノ割當テハ、一ニ醫局長ト婦長トノ權限内ニアルモノナノデス。

コノ邊デ私ハ、先刻カラ屢々申シ上ゲタク思ツテ居タ私ノ家庭ノ事情ヲ少シ語ラセテ頂キマス。郷里ニハ父ト母ト一人ノ妹トガ居リマス。十年前マデハ船着場デ榮エテ居タ九州ノ果ノ小サナ町ナノデスガ、其ガ最近ソノ地方ヘ鐵道ガ敷カレ乍ラ、線路カラ外レテ仕舞ツタガ爲メニ日ニ火ノ消エタヤウニナツテ行ク町ナノデス。コノ町ハ港デハアリ當然鐵道ノ沿線ニナル事ハ誰シモ疑ハナカッタノデスガ、隣接ノ或ル町ノ富豪ガ地方出身ノ政治家ニ猛烈ナ運動ヲ頼ンダ結果トカデ、私共ノ故郷ノ町ハ港デ海運ノ便モアルカラト云フマルデ逆ナ理由デツヒ鐵道ノ恩惠ニハ預カレナカッタノデシタ。ソノ土地ヘ私ノ父ハ、歐洲戰爭ノ好景氣ノ頃、多少ノ無理算段ヲシテ田舎町ニハ不相應ナ病院ヲ設立シテ居タノデス。停車場設置ノ期待ガアツタノト、ソノ山氣ヨリモ寧ロ當時福岡ノ醫科大學ニ學生ダツタ兄ノ成業後ヲ樂シミニシテ計畫シタノデアツタラウト

思ヒマスノニ、ソノ兄ハ卒業間際ニ腸窒扶斯デ急死シマシタ。九年前ニナリマス。サウシテ父ハ來年ハモウ六十二歳デス。私ヘノ手紙ニハ毎度、老軀ヲ提ゲテ學校出ノ新進氣鋭且ツ神經モ體力モ强健ナ同業者ト角逐スル事ノ大儀サヤ、病院設立當時ノ負債ガ未ダ抜ケ切ラナイ計算ヤラ、道路ノ往診ノ車上デハ今更、慎一——亡兄ノ名デス——ノ事ヲ思ヒ浮ベテハ涙ヲ催スナド、要スルニ人生ニ倦ミ疲レタ老人ノ愚痴ガ繰返サレテ居ルノデス。喜怒哀樂ヲ容易ニ色ニモ見セズ私ヲアソナニストイツクニ教育シタ父ガ、手紙トハ言ヘカウモ愚痴ツポクナツテ居ルノデシタ。母カラハト言ヘバ、病院ヲ建テタノハアノ人ノ業ダト噂サレタホド男優リナ母ガ、コレモ全ク父ト同ジヤウニ一家團樂ノ日ノ待遠シイ事、廿四ニモナツテハ一日モ早ク嫁ガナケレバナラヌ妹ノ事、日ニ衰ヘテ今ハ弓モ樂シメナクナツタ父ノ事、御許ガ成業ノ日ガ一家ノ話題ニナラナイ夜ノナイ事、其等ノ數々ガ女ダケニ細々ト冗々ト嘆カレテ居マシタ。ソナ故郷カラノ消息ヲ見ル度ニ、私ハ髮ノ灰色ニナツタ父ト母ト又私ノ歸國ノ日マデ老父母ノ爲メニアラユル縁談ヲ斷リツツケテ居ルト云フ健氣ナ妹トガ、波ノ音バカリ聞エル片田舎ノ、病院ト云フノモ今ハ名バカリデ唯ダダツ廣イダケノ家ノ中ニシヨンボリ、ソレゾレノ死ニカカツタ希望ヲ胸ノナカニ抱イテ、私ヒトリヲソレ程ニ待チ詫ビテ居ル事ヲ思フテハ、私ハ故郷カラノ手紙ハソノ封筒ヲ見ルノサヘ切ナイ氣

持ガシマシタ。ソノ頃ノヤウニ、パナリチユム——療疽デス——ヤ、フルンケル——癩デスカ、ソレニ痔ナドノ手術バカリサセラレテ居タノデハ、コノ先タトヒ五年經ツテモ、恐ラク私ガ一ツパシノ外科醫トシテ通用スル日ハ來ソウニ思ハレナイノデス。カウシテ元來ガ決シテ快活ナ男デナイ私ハ、日増ニ憂鬱ニナリ神經バカリガ妙ニ尖ツテ來マシタ。モトモト厭ナ同僚達トハ口ヲ利クノモ物臭クナリ、稀ニ物ヲ言ヘバ必度争ヲ起スヤウナ事ニナリマシタ。彼奴ハ變人ダト云フ定評ガ何時ノ間ニカ、何モ出來モシナイ癖ニ高慢、ト變ツテ仕舞ツタノハ仕方ガアリマセン。中ニハ陰險呼ハリヲスル奴マデ出テ來タノデスカラ。何ヲ、酒ヲ食フノト女ヲ買フノト外ハ、醫局長ニ追從スルヨリ能ノナイ奴等ニ俺ノ性格ト氣持トガ解ツテタマルモノカト云フ私ノ心持ガ、サゾ自然ト表面ニ現レタ事デモアリマセウ。婦長ト醫局長トヲ精一杯デ取卷イテキル同僚ト私トノ間ニ既ニアツタ溝ハ、カウシテ日ニ日ニ深ク堀ラレツツアツタノデス。

コノ最中ニ、一方ニハ又私ノ心持ヲ今一層無慘ニシテ居ル事件ガ、モウ一ツ附隨シテ居マシタ。ドウニモナラナイ一種ノ感情デ——マア戀愛問題ノヤウナモノデス。丸ノ内ノ會社ニ勤メテ居ル同郷ノ先輩ノ義妹デ、芝ノ某學校ヲ出テカラ音樂ノ稽古ヲシテ居タ女デス。華美デ陽氣ナ都會ノ女デシタ。先方カラ好意ヲ寄セテクレテ、一年程ノ交際デ私ト彼女トノ感情ハ友情カラ一歩

ヲ出テ可ナリ深イ處マデ一致シテ居タト思ヒマスガ、結婚トイフ最後ノ一點デハドウシテモ駄目
 ナノデシタ。彼女——名前ヲ申シ上ゲル必要モ御座イマスマイカラ假ニA子ト申シマスガ、A子
 ニハ九州ノ果迄私ニ從イテ來ルダケノ氣特ガナイノデシタ。又私ニハ既ニ申シ上ゲタ通りノ家庭
 ノ事情ガアツテ、女ノ希望通り東京デ就職スルトカ開業スルトカハ絶體ニ不可能ナノデス。兩方
 トモ讓歩スル事ノ出來ナイ二人ノ關係ハ前途ノ暗礁ヲ知り乍ラ未解決ノママデ漂フテ居マシタ。
 日毎ニチグハグニ離レテ行ク心持ヲハツキリト認メナガラ、斷然ト別レル事モ出來ナイ二人デシ
 タ。思ヒ切ツテ彼女ノ義兄ニ打明ケテ力添ヘヲ仰ゲバ、或ハ何トカ方法モアツタ事デセウガ、私
 ノ心中ニハ假令肉體的ニハ潔白デアラウトモ省ミテ先輩ノ信賴ヲ今迄裏切ツタトイフ感ガ深イノ
 ト、タカガ女一人トノ關係ヲ自分ノ手一ツデ處理シ得ナイト云フ事トガ何トナクウラ恥シイ氣持
 ガシテ、ソレモ出來マセンデシタ。若シ又、私ガ一切ヲ投ゲ出シテA子ニ歎願シテ見サヘシタラA
 子モ或ハ心ヲ動カシテクレタカモ知レマセンガ、コノ私ニハソレモ出來マセンデシタ。晝ハ病院
 ニアツテ、只單ニ彼等ガ世俗的ナ性格デアルガ爲メニ上長ニ氣受ヨク、ソノ才蔭デ興味アル患者
 ニ接シ手術ニ從事シテ經驗ヲ豊富ニシ乍ラ、片手間ニハ醫局長ノ盡力ニ縋ツテ臨床部ノ研究室ニ
 出入シテハ、徐々ニデハアツテモ學位論文ノ製作ニ勵ンデ居ル同僚達ヲ輕蔑シツツモ、シカモ矢

張リ否定シ切レナイ羨望ト寂寥トヲ胸ニ包ンデ私ハ、何ノ興味モナイ三等ノ入院患者二人——一
 人ハ結核性ノ痔瘻ノ女デ、一人ハ象皮病ノ男デス——ソレヲ何ケ月モ持テ餘シテ居マシタ。二人
 トモ手術ヲ受ケル決心モツカズソレカト云ツテ退院スル事ヲ拒ンデ居テ、醫局ノ皆ガ手ヲ焼イタ
 末ニ私ニ渡サレタ患者デス。外來ノ再來ト、小手術室ト、三等室トノミヲ毎日往來シテ、醫局ノ
 片隅デ助教教授ヲ圍シテ起ル哄笑ヲ、旅人ノヤウナ心持デ聞キナガラ私ハタダ日ノ暮レルノバカリ
 ガ待チ遠シイ思ヒデシタ。ソノ癖、夜ハ夜デ、モウ以前ノヤウニ専門ノ勉強ヲスルノデハナク、
 又道樂ノ經濟ヤ社會學ノ書物ヲ繙クデモナク、寧ロ一切ノ學問ナドハ呪ヒナガラ薄暗イ下宿ノ電
 燈ノ下デ、故郷ノ事、醫局ノ事、A子ノ事、新婚ノ友人達ノ事、就中圓滿ナ性格トソノ上美貌ト
 ヲ持ツテ妻ヲ携ヘテ歐洲へ留學中ノ栗田ノ事、サテハ又婦長ノ事、スベテハ三十近イヒトリ者ノ
 佗シサト、人ニ對スル憤リト運命ニ對スル怨ミトデ、私ノ心ハチヤウド燻リナガラ消エテ行ク火
 ノヤウデシタ。私ノ人生ニハモウ何ノ光明モ希望モナイ氣持バカリガシマシタ。イツノ間ニカ神
 經衰弱ガ昂ジテ居タノデス。

ソノウチ、去年ノ四月ノ事デシタ。私ト婦長トノ間ニハ、又シテモ重ネ重ネノ不愉快ガ起ツタ
 ノデシタ。考ヘテ見マスト、アノ女ト私トノ間ニハ奇妙ニ一定ノ間隔ヲ置イテ周期的ニ、一ヶ月

カニケ月目ニ事件ガ起ツテ居リマス。ドウモ閉止シツツアル月經ノ來潮時ガ、更年期ノ女ニ特有
 ナ精神上ノ不調和ヲ齎ス時期デハナイカト云フ氣ガシマス。サウ思ヒヤリヲシテ私ハ大抵ノ事ハ
 我慢シタノデスガ、コノ事件ト申シマスノハ、私ノ下宿ノ内儀ノ遠縁ノ娘デ病院ノ見習看護婦ヲ
 シテ居ル女ニ關スルコトデス。コノ女ハ私トハ下宿デ一二度出會ツタ事ガアツテ顔見知りノ間柄
 デシタ。ソノ看護婦ガ或ル朝、前日シ殘シタ仕事ノタメニ珍ラシク早ク出勤シタ私一人ガ居ルノ
 ヲ見計ラツテ、入ツテ來タノデス。私ニ少々聞キ度イ事ガアルト申スノデス。イヅレハ近頃下宿
 人ノ私立大學生ト妙ナ噂ノアル内儀ノ事デデモアラウカト思ツテ、私ハ手近ナ椅子ヲススメテ坐
 ラセタノデスガ、意外ニモ暫クノ沈黙ノ後ニ彼女ハ思ヒツメタ表情デ「先生、何デモナクトモメ
 ンゼスガ止ル事ガアルモノデセウカ」ト聞イタモノデス。私ハ、妊娠デハナクトモ何カ精神上ニ
 激シイ打撃ガアツタトカ或ハ潜伏シタ肺結核ガアツタ場合ニハ、二三ヶ月位ハ無イ事ガアリ得ル
 事實ヲ話シ、實際瘦セギスナ女ノ事デシタカラ、兎ニ角一應内科デ診察ヲ受ケル事ヲ勸メマシ
 タ。看護婦ハ顔ヲ眞赤ニシテ立上リマシタガ、ソノ時扉ガ靜カニ開イテ、早起ノ婦長ガ入ツテ來
 タノデス。若イ看護婦ガ他科ノ醫局ヘ、シカモ若イ助手ガ一人キリデ居ル所ヘ入ツテ居ル事ハ確
 ニ穩當デハアリマセン。看護婦ハ眞赤ニナツタママ、狼狽シテ立上ルト、私ニトモ婦長ニトモツ

カヌ一禮ヲ殘シテ逃ケルヤウニ立去リマシタ。ソノ時婦長ハ別ニ私ニ對シテハ何モ申シマセンデ
 シタ。不幸ニモソノ看護婦ハ本當ニ妊娠シテ居タノデシタ。病氣ノ態ニシテ辭職シマシタガ、ア
 ノ女ニソナ場面ヲ見ラレテ居ル私ハ、到底冤罪ヲ免レル事ガ出來マセンデシタ。「遊ビモセズ、
 オ酒モ呑マネバ自然トオ手近ノモノヲ撮^ツミタクモナリマセウカラネ」當テツケガマシイコノ言葉
 ヲ私ハ何度カ醫局ノ中デ聞カサレマシタコトカ。「オ目出度フ、第二世ガ出來タサウデ露骨ニ厭
 ガラセヲ言フ同僚モアリマシタ。ソレカラ二月程タツテ病院ヲヤメタ看護婦ガ婦人科ヘ出入リノ
 機械屋ノ若イ手代ト一緒ニナル迄、私ハ何度カ腹立シイ情ナイ氣持ヲ忍バネバナリマセシデシ
 タ。イツソノ事何モカモ打棄テテ、故郷ヘ歸ラウカト思フ事モアリマシタ。——亡兄サヘ生キテ
 居テクレタナラバ、——自我ヲ押通シテ法科ヘ入ツテ居サヘシタナラバ、——私ヲ理解シテクレ
 ル同僚ガ一人デモ居タナラバ、——彼女、A子サヘ私ノ傍ニ居テクレタナラバ。十年ノ返ラヌ過
 去カラ今日ノ日マデ、運命ハ何處マデ私ニダケ意地悪イノカト感ジラレマシタ。トツクノ昔ニ棄
 テタ筈ノ感傷癖ヲ自嘲シツツモ、ソノ感傷ダケガ唯一ノ逃ゲ場タル自分自身ガ、愛^イシクモアリ不
 憫デモアリマシタ。私ハ亡兄ト一緒ニ遊ンデ居ル少年時代ノ夢ヲ見テ、醒メテカラ涙ガ出タコト
 ガアリマス。周圍ノ眼カラ見テモ、ソナ私ガキツト影ノウスイ慘メナ者ニ見エタニ相違アリマ

セン。婦長モ、暫クシテ今度ハ極メテ婉曲ニ私ニ對シテ好意ヲ示シ始メタノデス。ケレドモソノ時ニハ私自身ガ、アノ女カラ憐レマレテ居ル自分ヲ腹立シク感ズルバカリデシタ。アノ女ノ好意ハ片端カラ斷然ト撥ネツケマシタ。「疾シイ點ガアルノナラ、俺ト醫局員全體トノ前ニ匍ヒ突クバツテ謝罪スルガ好イ」私ハ心ノ奥デ頑ナ自分自身ノ聲ヲ聞キマシタ。婦長トノ關係ガコノ爲メニ一層惡化シタノハ申スマデモアリマセン。コノ責メノ大部分ハ或ハ私ニアルノカモ知レマセン。私ハ赤裸々ニアノ女ニ對スル敵意ヲ露出シマシタ。アノ女ノ卑怯ト自分自身ノ弱サトガ憎カツタカラデス。今デハ朝夕ノ挨拶サヘ碌ニシナイ一部ノ同僚ニモ、モウ何ノ參酌モシマセンデシタ。遠慮ナク彼等ノ愚ニモツカヌ皮肉ニ手強ク應酬シ、——揶揄ニ對シテハ皮肉ヲ、皮肉ニ對シテハ冷嘲ヲ、冷嘲ニ對シテハ熱罵ヲ與ヘル事モ辭シマセノデシタ、彼等ノ職務上ノ失策ヲ指摘シ揶揄シ、他等ノ研究業績中ニ見出セル限りノ誤謬ト缺點トヲ議論シ哄笑スル事ガ私ノ快事ニナリマシタ。私ノ批難ニヨツテソノ杜撰ナ業績ノ半以上ヲ改竄シタ同僚モ、確ニ二人ヤ三人ハ居ル筈デス。私ハ決心ヲシタノデス。郷里ヘハ斷然歸ルマイ。家庭ノ事情ガ如何ニ逼迫シヨウトモココデ何年デモ、如何ニ困窮シヨウトモコノ醫局長ト婦長ト同僚トノ居ルトコロニ踏ミ止マツテヤラウ。今迄ハ彼等ニトツテ單ニ目障リナ人間ニシカ過ギナカツタ俺ハ、今カラ一轉シテ更ニ憎々シ

イ存在ニナラズニハ措クマイ。私ハ事實ソノ決心ヲ着々ト實現シ出シマシタ。婦長ト醫局長トニ強要シテ同僚ノ手カラ奪フヤウニシテサヘ、種々ノ手術ヲ私ニ渡サセマシタ。モウドノ先輩ノ教モ必要デハナイ。教科書ト解剖書トヲ首引シテ深夜迄、明日ノ手術ノ研究ト準備トヲ樂シミマシタ。小サナ失敗ヤ結果ノ良不良ナドハ一切抱泥シナイ事ニ腹ヲ据エマシタ。信ズルトコロニ從ツテ好キナ方法ヲドシドシ實行シテ見タダケナノデス。私ハ脹レキツタ膿瘍デシタ。ヤリサヘスレバ、大抵ノ事ハ自分一人ノ力ドドウニデモ仕遂ゲ得ルモノダトイフ自信ヲ贏チ得マシタ。同僚トハ相變ラズ絶エズ反目シ唾ミ合ヒ罵リ合ヒマシタ。私ハ又聲ヲ上げて笑ヒマシタ。マルデ快活ナ人ノヤウニデス。一時ニ急變シタ私ノ態度ニ呆氣ニ取ラレタ婦長モ醫局ノ連中モ、シカシ決シテ沈黙ハシマセンデシタ。ソレハ先ヅ糠内助教授ノ好意ニヨツテ現ハサレマシタ。助教授ハ或ル日三階ノ賣店ノ一室ニ私ヲ呼ンデ、思ヒガケナクモ一枚ノ寫眞ヲ見セタモノデス。私ニ女房ノ世話シヨウト云フノデス。地方ノ資産家ノ長女ダガ、有爲ノ青年學者ヲ婿ニシテ大成サセタイトノ先方ノ希望ニハ、君ヨリ適當ナ人ハ無イト助教授ハ云ツタノデス。淺マシイ話デスガ、ソノ寫眞ノ丸ボチヤナ單純サウニ美シイソノ娘ヨリモ、學資ヲ援助シテ貰ヘサウナソノ話ニ、私ハウツカリ心ヲ引カレテ居タヤウデシタガ、心ヅイテ私ハソノ場デ丁寧ニ然シ稍皮肉ニ辭退シマシタ。コノ助教

授ニ毎日仲人面ヲサレテ堪ルモノカ。コノ男ナド何ヲ擱マスカワカツタモノカ。私ノ腹ヲ割ツテ言ヘバ、實際、ソノナ氣持ガシタノデシタ——人ノ親切ヲサヘソノ通りニ受ケ入レラレナクナツタ私ヲ憫レンデ下サイ。尤モ私自身ハモウソノナ餘裕ハアリマセンデシタ。コノ親切ヲ素直ニ受ケラレナクナツタばかりニ、私ハ今度ハ擱目手カラ攻メカケラレル事ニナツタメデス。ツマリ私ヲ地方ノ病院へ赴任サセヨウト云フノデス。北海道、或ル炭山ノ病院。東北ノ小サナ町ノ病院ノ外科部長。私ハ親切ゴカシニ醫局長、糠内博士ガ持チカケルソノナ就職口ヲ片端カラ斷リマシタ。到頭最後ニ直接、岡野教授自身ノ口カラ地方赴任ノ勸告ヲ受ケマシタ。教授直接ノ勸告ハ半バ命令トモ見ルベキモノデス。樺太ノ或ル町ノ病院ノ外科部長トシテ就任シテハドウカ、條件モ好シ二年モ辛棒スレバ後任ヲ送ツテ再ビ醫局へ呼ビ返ス——ト云フ話ナノデス。私ハ郷里ノ事情ヲモ一通リ述べタ上、一應熟考サセテ欲シイト答ヘテ引退リマシタ。其時ニハ實ノ所、醫局生活ニモ厭氣ガサシテ居ル折カラデモアリ、又恐シク蒸シ暑イ夏ノ午後ノ事デモアリ、教授カラ話ガアツタ一瞬間、フトソノ北方ノ見知ラヌ町へ行ツテ了ツテモ好イトイフ氣持モシナイデハアリマセンデシタ。ソノ翌日ハ私自身モ忙シク教授モ手術ノアル日デ顔ヲ合ス機會ガ無カツタモノデスガ翌々日ノ朝、登院スルト「イヨウ、オ芽出度ワ、御榮轉ダサウダネ——トイフ奴ガ居ルノデス。私

ハ狼狽シテ、大急ギデ教授室ニ行ツテ、改メテ斷ツタノデシタガ、教授ノ言フトコロデハ、私ガ前々日ノ夕方、醫局長ニ承諾ノ返事ヲシタトノ事ダカラ、タツタ今先方ノ病院へ私ヲ推薦スル手紙ヲ出シタばかりダト云フノデス。サウ云ハレテ見レバ私モ、教授カラ話ノアツタ夜、病院ノ浴場デ「カウ暑イト、樺太行ナドモチヨット悪クナイナア——ト誰ニトモナク言ツタ覺エハアリマス。ソノ時タシカ糠内博士モ入浴シテ居マシタ。シカシ、ソノナ獨語ガ何デ返事ニナリマセウカ。デモ、私ハ教授ノ前デ今度ハ詳シク家庭ノ内幕マデ打明ケテ百方陳謝シマシタ。サウシテ教授カラハ、新シク設立シタ學校デアツテ出來ルダケ學校出身者ノ勢力ヲ地方へ扶殖シテ置く必要ノアルコノ際ニ生返事ヲシテ迷惑ヲ學校ニ及ボサレテハ困ル事ヲクドクドト訓誡セラレテ、私ハ面目ナク教授室カラ引退リマシタガ、樺太へ放逐サレルノダケハ辛ウジテ免カレマシタ——昨年ノ七月末ノ話デアリマス。此ノ事モマダシモ忍ベマス。如何ニモ無念ナ事ガマダアルノデス。事ハ少シク前後致シマシタガ、昨年ノ五月中、父ハ夜間ノ往診中——父ハ元來外科醫デスガ、田舎ノ事テハアリ、ソレニ病院モ今ハ名ばかりデ醫員ニ不足シテ居リマスノデ、場合ニヨツテハ内科ノ患者テモ婦人科デモ扱ヒマス——ソレデ、胃痙攣ノ患者ヲ見舞ツタ歸途、車夫ノ不注意カラ車ガ顛覆シ、ソノ際父ハ右肩ニ打撲傷ヲ負ツタノデス。ソレ以來右手ガ不自由デ、細カイ手術ナドニハ一

層ノ困難ト不自由トヲ感ジルニ就テハ、今度こそ是非トモ私ニ、セメテハ適當ナ代理者ガ見ツカ
ル迄ノ間ダケデモ歸省シテ欲シイト再三申越シテ來タノデシタ。私ハソレデ、或ハ少々荷ガ勝チ
過ギルカトモ案ジマシタガ、一人私ヨリ一年後輩デ當時就職口ヲ探シテ居タ同僚ニ頼ンデ、父ノ
病院へ行ツテ貰ツタノデス。私ハ父ノ助手ト云フ意味デ同僚ヲ周旋シタノデシタガ、父ノ方デハ
病院ノ全部ヲ任切ルツモリダツタト見エテ、赴任シテ暫クシテカラ、ドウモ少シク間ニ合ヒ兼ネ
ルカラ矢張り私自身ニ歸國シテ欲シイ、モシソレガドウシテモ都合悪イナラバ代リノ人ヲ改メテ
周旋シテクレナイカト言ツテ寄越シマシタ。友人ノ方カラモ手紙ガアツテ、稀ニデハアルガ意外
ニモ大キナ手術ナドアツテ少シク不安ヲ感ジルナドト言ツテ來タノデス。私ハ直ニ醫局長ニ頼ン
デ希望者ガアラバ知ラセテ欲シイト言ツタモノデシタ。君ノオヤヂサンノ病院カネト言ツタキ
リ一向取合ツテモクレマセンデシタガ、ソノ内暫クシテ父カラ一通ノ葉書ヲ同封シテヒドイ立腹
ノ手紙ガ來タノデス。葉書ニハ「貴院ニ赴任シタ××君ハ未熟カモ知レヌガ、御令息達ニ君ヨリ
ハ腕ハ確ダ。本教室ニハ目下希望者ガナイ上、御令息ニハ何故カ東京ヲ離レ難イ事情ガアル様子
ダカラ、暫ク××君デ辛棒サレテハ如何」ト云フ意味ノ事ガタダ學校教室ノ名デ書カレテ居マシ
タ。私ノ面目ハ丸潰レデシタ。同ジ事ヲ言ハレタニシテモ、セメテ封書デ教授ナリ助教ナリノ

名デ云ハレテ居ルノナラ未ダシモデスガ、コンナ曖昧ナタダ教室トダケデ、同僚カラカ或ハ看護
婦カラカ——事實、葉書ノ文字ハ肩上リノイカツイ字デシタガ、ドウモ女ノ手蹟ラシク思ヘマシ
タ——得體モ知レナイ葉書ナドデ言ハレタトナルト、私ハソノ人達ニサヘ輕ンゼラレテ居ル事
ニナルワケデス。ソノ葉書ハソノ場デ寸斷々々ニ引裂イテ了ヒマシタガ、私ニハソレガ段々ニ婦
長ノ手蹟ニ似テ居タヤウニ思ハレテ來タノデス。コレハシカシ恐ラク私ノ邪推デアリマセワ。コ
レハ婦長ヨリ寧口外ノ誰カガヤリサウナ事デ、婦長トシテアマリニ大人氣ナイノデス。ソウ氣ガ
附イテ、モ一度葉書ノ手蹟ヲ見タイト思フタ時ニハモウソノ葉書ハ破イテ仕舞ツタ後デシタ。私
ニハ今ダニコノ葉書ノ發信人ガ判ラズニ居マス。但、私ガソノ葉書ヲ見テ居ルウチニ直グ先ヅ第
一ニ婦長ヲ聯想シタ事ハ事實デシタ。成程、私ノ腕ハ未熟カモ知レマセン。ソノ未熟ナ腕シカ
ナイ私ナラバ、何故、假令僻陬ノ地デアラウトモ、トニカク一病院ノ一部長トシテ私ヲ樺太ヘ赴
任サセヨウトシタノカ。ソノ理窟ガアラウカ。一切ノ不合理ハ生來私ニハ我慢出來ナイノデス
私ハ彼等カラコンナ不合理ナ壓迫ヲ何故ニ受ケナケレバナラナイノカ。コンナ人間達ノ仲間ニ居
テソノ支配ノ下ニ何故ニ留マラナケレバナラナイカ。面白クモナイ學問。一人前ノ外科醫。假令
有名ナ大家ニナツテ見タトコロデソレガ何ダ。私ハソノ夜、暑苦シイ下宿ノ二階ノ色ノ襪メタ蚊

帳ノ中デ何時マデモ眠レマセンデシタ。他人ノ壓迫ハ私ノ多少ノ才能ノ證據デアルトシテ見テモ人ニカウマデ憎マレナケルベナラナイ自分ガ淋シクモアリマシタ。私ガソノ夜流シタ冷タイ涙ハコノ感情デス。

シカモ出來事ハコレダケデアリマセン。引續イテ起ツタノハ十月ノ初メデアリマシタ。同期ノ卒業生デ同ジグループノ一人ダツタ高梨——私ニ卒業ノ時、精神科へ入局スルヤウニ忠告シテクレタノハ彼デスガ——ソレガ教授ノ推薦ニ依ツテ獨乙へ留學スル事ニナツテ居マシタ。ソノ出發ノ當日、私ハ再來ノ外來患者ヲ比較的仲ノ良イ同僚ノ内山ニ頼ンデ、高梨ヲ横濱マデ見送りマシタ。××研究所ニ居ル淀井、○○醫專ノ講師ヲシテ居ル生駒ソノ他二三ノ友人達ハ前夜カラ送別ノ宴ヲ張ツテ終夜、別離ヲ惜ミ、私ヲソノ仲間ニ誘フテクレタノデシタガ、私ハソレニ加ハル事ガ出來マセンデシタ。セメテ埠頭ニハ見送りタカツタノデス。ソノ見送りガ濟ンデ一同ハ南京街ノ支那料理デ晝食ヲシ、ソレカラ久シ振リニ皆デ當モナク散歩ヲシマシタ。私ハ夕方迄ニハ是非トモ入院患者ヲ診ナケレバナラナイノデスシ、ソレニ酒ハ飲メマセンカラ、モウ一度飲ミ直スト云フ仲間ヲ無理ニ振切ツテ一人海岸通りヲ電車路ニ沿フテ歩イテ歸リマシタ。テープノ虹ノ上カラ帽子ヲ振ツタ高梨ノ泣キ笑ヒノ様ナ顔ヤ、彼ノ前ニ展ケテ居ル洋洋タル前途ヤ、又今頃ハ打解

ケテ樂シゲニ再ビ盃ヲ交シテ居ル淀井ヤ有田ヤ、ソノ彼等ニモ亦約束サレテ居ル未來ヤ、サテ歸ツテ私自身ノ落莫ヲ顧ミタ時、私ハ明ルイ秋ノ日ノ港町ノ雜沓デ、危ク涙ガ落ちルヤウナ氣ガシマシタ。フト頭ヲ擧ゲタ時、私ハ季節ノ帽子ヲ並ベタ唐物屋ノ飾窓ノ前ヲ歩イテ居タイノデス。私ハフラフラトソノ店へ入り、値段モ碌々聞カズニ紺ノベルベツトノ帽子ヲ買ツテ了ツタノデス。其日落合ツタ友人ノ中デ私ノ帽子ガ無論一番貧弱デ、買ツテ三四年ニモナル私ノモノハ煤ケ切ツテ居タシ、實際コノ秋ニハ新調スルモリデ、夏ノボーナスヲ其ニ宛テテ貯ヘテ居タノデス——臨床部ノ醫局デハ二年モ居レバ大抵ノ助手ハ有給ニナレルノデスガ、私ハ後輩ニ追ヒ抜カレテ未ダニ無給デス。タダ益暮位ニ教授ノポケットカラ出ル少々ノ賞與ヲ貰ツタダケデシタ。學生時代カラ私ハセメテ帽子ナリステツキナリ、何か一ツ丈ハ贅澤ナモノヲ持ツテ、ソレヲ出來ルダケ永ク用キル習慣ガアリマシタ。毛ノフカフカシタ兎ノ皮ノ様ナベルベツトノ帽子ハ學生ノ頃カラ欲シカッタノデス。私ハ京濱電車ノ中デ新シイ帽子ヲ膝ニ乗セテ撫デ廻シテ居ル間ニ、ヤツト私ノ先刻迄ノ憂鬱ガ少シヅツ薄ライデユクノヲ覺エマシタ。ケレドモ今度ハタカガ帽子一ツデ慰メラレル自分自身ガ腹立タシクモイトシイ氣持ガシテ來テ、直グニ再ビ氣ガ減入ツテ來タノデシタ。病院へ歸ツタ私ハ大急ギデ擔任入院患者ヲ廻診シ終ツテ陰氣ニ疲レテ醫局へ戻リマシタ。夕刻ダノ

ニ何時ニナク醫局ニ八十人ばかりモ助手ガマダ歸ラズニ集ツテ居マシタガ、私ガ室ニ入ルト彼等ハ一齊ニハタト口ヲ噤ンデ私ノ上ニ眼ヲ注イダモノデス。彼等ノ傍ニハ婦長ガ居テ、婦長ノ手ニハ私ノ新シイ帽子ガ撮ミ上ゲラレテ居ルトコロダツタノデス。イヅレハ聞カサレル厭味ダト覺悟シテ居リマシタガ、婦長ノ口カラ出タノハ「一ノ瀬先生、之ハ隨分高イオ帽子ダサウデスネエ」トイフ案外何ノ奇モナイ言葉デシタ。ケレドモコノ平凡ナ一語ニドンナ毒素ガ含マレテ居タカハ、一時間後ニハ厭應ナシニ知ラネバナリマセンデシタ。見習看護婦ノ一人ガ私ニ、コレハ何氣ナク話シタトコロニ依ルトソノ前日同僚ノ一人ガ郷里カラ來タ十圓ノ小爲替ヲ二枚紛失シタノダサウデス。醫局長ニハ何ノ理由モ語ラズニ前日ノ夕方カラ豫メ外來ヲ人ニ頼ンデソノ日一日ヲ休ンデ居タ私ハ、コノ際ト云ヒ、日頃ノ立場トイヒ、忌シイ嫌疑ヲ受ケルニ充分ダツタノデセウ。身分不相應ナ買物ヲシテ居タ事モ一層不利デシタ、コレハ決シテ私ノ邪推デハアリマセン。婦長ガ私ノ帽子ニ與ヘタ批評ノ日頃ニモ似ヌ尋常サガコレノ確證デス。ソノ夕方、私ハ疾走スル滿員電車ノ窓カラ、買ツテ半日トハ經タヌ氣ニ入りノ帽子ヲ外濠ノ水ノ中ヘタタキ込ンデ了ヒマシタ。人ノ出盛ル宵ノ町ヲ帽子モ無イ大男ヲ怪シム行人ヲ意識シツツ私ハ、恥ト怒ト悲トガ眞黒ニ陰險ナ奴ニナリ、今度ハ盜癖マデアル私。私ハ私ダケガ秋風ノ中ニタダ一人取殘サレタ氣持ガシマシタ。夜廻リノ柏子木ニ氣ガ付イテヤット洋服ヲ脱ギカヘマシタ。枕ノ下ノ蟲ノ聲ヲ聞キツツケテ私ハ、歸去來ヲ感ジマシタ。何モカモ棄テテ故郷ヘ歸ラウト思ヒマシタ。然ウデシタ。アノ時、故郷ヘ歸ツテ居タナラバ、コンナ事ニダケハナラズニ濟ンダノカモ知レマセン、デモ、翌日ノ朝ニナルト、私ハ自分ノ昨夜ノ感傷ヲ自嘲シテ、ドンナ事ガアツテモアノ醫局ヲ出ルモノカト思ヒマシタ。醫局ハモウ私ニハスツカリ戰場ダツタノデス。

——ソノ紛失シタ小爲替デスカ。私ガ盜ンダ筈ノ小爲替ハ、盜マレタ筈ノ常人ノ書物ノ間カラソノ翌日出テ來タサウデス。

此ノ事ガアツテ暫ク後ノ事テアリマス。私ガ業ヲ煮ヤス程持チアグネテ居タ例ノ象皮病ノ患者ガ到頭決心ガツイテ手術ヲ受ケルト言ヒ出シタノデス。一體、象皮病ノ手術ニハ幾通りモ方法ガアルノデスガ、一トシテ著シク効果ノ上ルモノハ無イノデス。唯一ツ私ノ學校ノ整形外科ノ教授ガ考案シタ手術法ダケガ多少ノ効果ヲ收メル事ガアルノデ、私ハ度々ソノ手術ヲソノ患者ニ勸メテ居タノデス。手術法ハ患部ノ皮膚ニ患者ノ健康ナ他ノ部分ノ皮膚ヲ縫合セテ鬱滯シタ淋巴ノ還

流ヲ計ルノデ、ソノ患者ノ場合デ申シマス、患者ノ下腹部ノ健全ナ皮膚ト皮下組織トヲ辨狀ニ切取ツテ、患部タル一升樽ホドノ墨丸ノ皮膚ニ縫合スルノデス。コノ方法ノ創始者デアル整形外科ノ河内教授ハ、研究ノ必要上當然ヒドク興味ヲ持ツテ居ル手術デスカラ、私ノ患者モ教授ニ手術ヲ依頼シテ了ヘバ喜ンデ引受ケテクレル筈デスガ、私ハ自分ノ郷里ガ比較的象皮病ノ多イ九州ノ東海岸デハアリ、又此ノ前ノ龜頭癌ノ場合ニ岡野教授カラ受ケタ叱責的注意モ身ニ沁ミテ居ル事デハアリ、何ヨリモ第一ニハ私自身ノ學術的興味カラ自分自身ノ手デコノ手術ヲ遂行シテ見タイト思ツタノデス。ソコデ、ソノ日ノ午後、整形外科ノ醫局ニ河内教授ヲ訪ネテ、手術法ニ關シテ約一時間ホド教ヲ乞フタ後、整形外科ノ醫局ヲ出マシタ。ソノ出會頭ニドアノ把手カラマダ手ヲ離サナイ私ト病棟カラ廊下ヲ曲ツテ來タ赤澤婦長トガ、パツタリト目ヲ見合セタノデス。今ニナツテ思ヘバ、ドウヤラアノ女ヲ刺シタ事ハ、前世カラノ約束事デアツタカノヤウニ思ハレテナリマセン。コノ時私ガ整形ノ醫局カラ出ル姿ヲ婦長ニ見ラレタノハ、外科ノ醫局ニ於ケル私ノ立場ヲ一層、モウ殆ンド回復シ難イホド不愉快ナモノニシテ了ツタノデス。一體、一般外科ニ整形外科トハソノ境界ノ至ツテ漠然トシタモノデ、近頃ニナツテ漸ク整形外科ガ獨立シタ迄ノ以前ハ同一ノ科デ取扱ハレテ居タノデス。今日デモ市井ノ小サナ病院デハ區別シテ居ナイ位ノモノデスガ、各大學病院デハ講座ヤ教室ハ勿論、醫局モソレゾレ獨立シテ居リマス。私ノ席ヲ置イタ一般外科ノ教授ハ整形外科ノ教授トハ性格モ異リ、年齢モ違ヒ、以前カラ、表面ハトモカクモ、内幕ハ決シテ圓滑デハナカツタサウデスガ、當時ハ特ニ事々ニ、例ヘバ學年始メノ豫算デノ教室費ト入院患者收容病棟ノ爭奪、部下ノ就職口ノ爭奪、或ハ前年度ノ外科學會デ擔當シタ宿題報告ノ研究業績ニ對スル兩科ノ教授ノ學術上ノ意見ノ相違、其他醫局員ニサヘ窺ヒ知レナイ種々ナデリケトトナ、性格的相違カラ生ズル感情ノ纏レ等デ一シホ不和ガ昂ジテ居タ折カラデシタ。教授ノ不和ハ次次ニ教授ニ阿諛スル一部ノ醫局員ノ不和ヲ誘引シ、ソノ一週間ホド前ノ或晚ノ如キハ、私ノ醫局デハ教授ヲ擁シテ行キツケノ待合デ騒イダ上、酒ノ醉ニ任セテ教授ノ鼻息ヲ窺フ二三ノ助手達ハ可或リ激烈ナ言葉ヲ整形外科教授ニ對シテ吐イタモノダト云フ事デシタ。醫局デ孤立シテ居ル私ハ、幸ハ不幸カソナ會合ノアツタ事スラモ後々マデ知ラサレズ從ツテ勿論出席ハシマセンデシタ。所ガ偶然ニモ同ジ待合ノ隣室ニ、曾テ一年程整形外科ニ籍ヲ置イテ後内科ヘ轉ジタ一助手ガ馴染ノ藝者ト來合セテ居タトカデ、襖越シニ聞キ込シ隣室ノ席上ノ話ヲ、一人一人ノ言葉ドホリ洩ラサズ聞キ書キシテ置イテ、翌朝早速整形ノ方ヘ報告シタモノダサウデス。筒拔ケニ知レテ了ツタ私ノ醫局デハ、裏切ガ居ルト血眼デ騒イデ居マシタガ、結局何處カラ洩レタカハ分ラナ

カツタサウデス。ソレデ整形ノ方デ何モカモ知ツテ居ルヤウナ顔ヲスルノハ或ハ嘘ダラウト云フ事ニナリカカツテ居タトコロダツタノデス。折モ折、患者ノ事デ整形ノ醫局ヲ訪ネタ私ハ、ソレ等ノ事情ハ勿論ソノ會合ノ話モ前述ノ通り一向知ラナカツタノデスガ、婦長カラ整形ノ醫局デコソコソ話ヲシテコソコソト出テ來タト醫局長ニ告ゲラレテハ、到底免レヌ汚名ヲ背負ハネバナリマセンデシタ。コノ評判ガ立ツテ後、コレハ何モ知ラナイ私ノ冤罪ヲ氣ノ毒ガツテ整形ノ一助手ガ私ニ事情ヲ明シタノデシタ。裏切ルベキ材料ヲスラ與ヘテ貰ヘナイ私ガ、裏切者ニサレテ了ツテ居タノデス。私ハモウ腹ヲ立テルノモ馬鹿ラシイ氣持デシタ。タカガ一大學ノ一分科ノ一教室ノマルデ芥子粒ホドノ事ヲ、大ノ男ガ眼ノ色ヲ變ヘテ騒イデ居ルノガ寧口笑止トモ思ハレテ來々ノデス。シカシ哲人デナイ私ハ、實際ノ生活デハソノ吞氣デハ決シテ居ラレマセンデシタ。私ノ職務上ノ壓迫ト不便トハ醫局長カラ婦長カラ、最近デハ教授カラサヘ加ヘラレテ居タノデス。冗々シク申シ述ベマシタガ、私トアノ女トノ間ニハコレダケ入組ンダイキサツガアリ、私ハアノ女カラ、引イテハ同僚、更ニハ上長カラコレ丈ケノ苦痛ヲ嘗メサセラレテ來タノデス。

アノ女ヲ刺シタ當日ハ、私ハ朝カラ頭ノ重イ苛立シイ氣持ガシテ居マシタ。前晚殆ンド一睡モシテ居ナカツタカラデス。父カラトニ子トソレソレノ手紙ガソレソレニ私ニ送ラレテ居マシタ。前日ノ夕方届イタノデス。父カラノ手紙ニハ、コノ年末ニハドウシテモ病院ヲ銀行ニ渡サナケレバナルマイ、萬一コノ十日ホドノ運動ガ効ヲ奏シテ銀行ノ問題ハ一時免レ得タニシテモ、來年カラハドウシテモ歸郷シテ貰ハネバナラナイ——實ハモウオ前ノ學資ヲ送ル事スラ重荷デアアル、ト云フ意味ガ半バ哀願的ニ半バ命令的ニ冗々ト一丈モアル卷紙ニ腦出血後ノ震ヘル手蹟デ書カレテアリマシタ。A子カラハ又A子カラデ、コレハ至極簡短ニ、兼々兩親カラ勸メノアツタ縁談ガ纏マリ、來春三月ニハ式ヲ擧ゲルコトニ決定シタ故、アナタモワタクシナドヨリモツト適當ナ人ト早ク結婚シテクレル事ヲ望ム。今返ノ手紙ヤ思ヒ出トナルモノハ一切焼キステテ欲シイ。トノ意味ガ書カレテアリマシタ。

アノ日ハ十時過ギニナツテ出勤シマシタ。簡短ニ義務ダケヲ濟マセテ、私ハ晝間ハ無人ノ宿直室ノベッドノ中デ放心シタ何時間カラ頭カラ蒲團ヲ引被ツテ身動キモセズニ過シマシタ。日ノ暮レルノヲ待チ兼ネテ醫局ヘ立寄ツテ歸仕度ヲ始メマシタ。靴ヲ抱ヘテ椅子カラ立上ツタ時、ドヤドヤトオ湯カラ歸ツタ同僚ガ雪崩レ込ミマシタ。皆ノ中ニ雜ツテ居タ醫局長——糠内助教教授ガ私ヲ呼び留メ、皆シテコレカラホテルノクリスマス・イブヘ行ク筈ダカラ私ニ今夜ノ宿直ヲシテ欲シイト云ハレマシタ。斷ハルヒマモナク傍カラ婦長ガ口ヲ出シマシタ「一ノ瀬先生ハ學者肌ノ方

ダカラ、ソナナ子供ダマシノ場所ナド行キタクハアリマセンワネ。コレ位ノ事ニハモウ慣レ切ツテ居ル私デスシ、ソナナ連中ト一緒ニクリスマスノ馬鹿騒ギヲ見タイトモ思ヒマセンシ、火ノ氣ノナイ下宿へ歸ルノモ、宿直室ニ泊ルノモ何レハ大シタ變リモアリマセンガ、今夜ダケハトニカク靜カニ自分ノ室デ考ヘタイ氣持ガシテ居タノデスガ、結局無理押シツケニ私ハ當夜ノ宿直ニナツテシマヒマシタ。

夕食後、後頭ノ心ガ痛ムノヲ我慢シナガラ病棟ヲ廻診シテ、ソレカラ醫局ノ瓦斯ストオブノ前デ煙草ヲ喫シ乍ラ昨夜カラノ續キニ思ヒ沈ンデ居マシタ。六時頃デシタ。ノックスル音ガシテ病棟附ノ看護婦ガ入ツテ來マシタ。ろ號病棟ノ蟲様突起炎ノ患者ガ腹痛ヲ訴ヘルカラ今一度廻診ヲシテ欲シイト云フノデス。患者トイフノハ其ノ日ノ午後内科カラ廻サレテ來タノデ、明日、蟲様突起切除手術ヲ行フコトニナツテ居ル少年デス。一應診察ノ上別ニ激變ノナイノヲ確メタノデ、餘リ度々鎮痛劑ヲ注射シテハ腸ノ麻痺ヲ促シテ、手術後ノ經過ガ不良デアル事ヲ説キ聞カセマシタガ、眠ル事モ出來ナイヤウデハ手術ニモ差支ヘルト思ヒ直シテ、パントポン半筒ダケヲ注射シマシタ。室ヲ出ヨウトスルト附添ノ看護婦ガ廊下マデ追ヒ掛ケテ來タノデス。先刻迄居タ患者ノ母ガ明日ノ準備ノタメニチヨット歸宅シテ、患者ハ看護婦一人キリデハ不安ガルノデ、若シ私が暇ナ

ラハ暫ク病室ニ居テヤツテクレナイカ、附添看護婦自身ノ願デモアリ患者ノ希望デモアルト云フノデス。私ハ引返シテ患者ノ枕モトノ椅子ニ腰ヲ下シマシタ。先刻ニ比ベルト少シク落チツイタ患者ハ、我儘ヲ謝スルカノヤウニニツト白イ齒ヲ見セテ默禮シマシタ。私ハ手持無沙汰ニ新聞ヲ擴ゲ乍ラ、電燈ノ青イシエードノ下ノ患者ノ顔ヲ、今一度倫ミ視マシタ。腺病質ノ色ノ蒼白イ靜脈ノ透イテ見エルイカニモ都會ニノミ見ル型ノ少年デアリマシタ。發熱ノタメニ頬ガ少シク紅潮シテ、長イ睫毛ノ下ニ薄青イ影ガ出來、呼吸ノ度毎ニ端正ナ鼻翼ト唇トガ微カニ動クノヲ見テ居ルト、氷枕ノ上ノ五分刈ノ頭サヘナクバ寧ロ少女ト云ツタ方ガ適切ナ形デアリマシタ。注射ノ効果デウトウトシ乍ラ、廊下ヲ通ル人ノ氣配ヤ遠ク電車ノカーブスル音ニ折々目ヲ明ケテ、ソノ都度私ノ方ヲチラト見テハ又眼ヲ閉ヂルノガ可憐デシタ。無口デ無愛想ナ私ハコンナ親愛ト信賴トヲ患者カラ示サレタ事ハ未ダ曾テ無カツタノデス。私ハ思ヒ掛ケナイ當直ガ必ズシモ不愉快ノミデハナカツタヤウナ氣ガシマシタ。少年ノ面影ガドコカ私ヲ棄テテ嫁グトイフA子ニ似テ居ル氣持モシマシタ。馬鹿ナ話デス。前夜カラノ不眠ノタメニ私ノ體ハ疲レ切ツテ、私ノ心ハヤツトA子ヘノ憎ミニ倦ミ初メテ、ソノ代リニ甘イ哀愁ガ襲ヒカカラウトシテ居ルノデス。私ハ立上ツテ患者ノ眠ヲ妨ゲヌヤウニ足音ヲ忍バセテ病室ヲ出マシタ。

アダリンヲ二服吞ンデヤツト私ハ、宿直室ノバネノ弛ミ切ツタ寢台ノ上デ眠ニ就キマシタ。

二時間モ眠ツタノデセウカ。私ハ再ビ病棟看護婦ニヨツテ起サレマシタ。例ノ患者ガ激シイ腹痛ヲ訴エテ吃吐シヤックヲ始メタトイフノデス。私ハ飛び起キマシタ。シマツタト思ヒマシタ。病室へ驅ケツケテ見ルト、患者ハ黙ツテ腕ヲ伸シテ私ノ手ニ縋リツキマシタ。額ニハ玉ノヤウナ汗ガヂツトリト湧イテ居マシタ。脈搏ハ百三十モアリ、吃吐シテ居マシタ、激シイ腹痛ヲ訴へ、帶ヲ解カス事モヤツトデシタ。腹壁ハ板ノヤウニ固クナリ指一本觸レテモ悲鳴ヲ擧ゲルノデス。大キナ眼ヲ睜イテ私ヲ見ツメル患者カラ顔ヲ反ケテ私ハ憐憫トモ同情トモツカナイ混亂ト、思掛ケヌ急變ニ呆然トシタ狼狽トヲ、トニカク一瞬間ニ冷靜ナ醫師トシテノ自分自身ニ迄取戻シタノデシタ。私ハ蒼褪メタ患者ノ母ヲ廊トヘ呼び出シテ、怖シイ穿孔性腹膜炎ヲ發シタ事、即座ニモ開腹手術ノ必要ナ事ヲ告ゲル一方、看護婦ニハ婦長ヲ迎ヘニ行カセマシタ。炎症ノアル蟲様突起ヲ持ツテ居ルノハ腹中ニ爆裂彈ヲ藏シテ居ルモ同然ダト云ツタ老大家ガアリマスガ、コノ患者ハ正シクソノ爆裂彈ガ破裂シタノデス。發病以來、町醫者ノ診斷ガ區區デ入院ノ期ヲ遅ラセタノト、入院ノ爲メニ自動車ニ揺ラレタノト、入院直後ニ行フベキ手術ヲ患者ノ都合デ一日延バサネバナラナカツタノトガ、失敗ノ原因ダツタノデス。驚イテ驅ケツケタ患者ノ父ニ私ハ寸時ヲモ争フコノ場合ノ病症

ヲ手短カニ説明シテ、直チニ開腹手術ヲシナケレバ百中ノ百迄生命ハ覺束ナイ事、手術サヘ行ヘバ猶一縷ダケノ希望ハ殘サレテ居ル事ヲ説キ聞カセマシタ。勝手ノ違フ醫局ノ椅子ノ上デ震ヘテ居タ父親ハ眉宇ノ間ニ決心ノ色ヲ浮ベテ目ヲシバタタキ乍ラ「ヨウガス、ヤツテ頂キマセウ。ドウゾ」ト言ツタモノデス。私ハ案外ノ氣持ガシマシタ。今迄ニモ病院デハコレト同ジ場合ガ無論幾度トナクアルノデスガ、コノ一カ八カノ手術ヲコンナニ易々ト承諾シタ例ハ未ダ曾テ無イカト思ヒマス。ドンナ知識階級ノ家族デモ開腹手術ト言ヘバ先ヅ家族ノ方デ二ノ足ヲ踏ミ、ソノ爲メ永久ニ機會ヲ逃シテシマフノガ常ナノデス。私ハ、眼前ノ胡麻鹽ノ髮ヲシタ前垂掛ノ、日本橋ノ商人デアルトイフコノ父親カラコンナ返事ヲ聞カウトハ、實ニ夢ニモ思掛ケナカツタノデシタ。私ハ胸ノ透ク思ヒガシマシタ。ナホ手術者ガ私デハ不安ナラバ、教授ナリ助教授ナリヲ迎ヘテモ好イト私ハ言ヒ添ヘタノデスガ、之モ實ニ氣持ノ好イ返事デシタ。「イヤ、先生ニオ願ヒ申シマセウ。何モカモ因縁デス。コノ上ハ神頼ミダケデス」——私ハ自分ノ眼頭ニ溜ル涙ヲ意識シマシタ。私ノ四年間ノ醫局生活ノ間ニ、今夜ホド、患者ト患者ノ家族カラ、否、スベテノ人間カラコレホドノ信賴ヲ受ケタ覺エハ、一度ダツテアツタカ、昨夜來ノ心痛ト疲勞トノ結果、明ニ私ハ感傷的ニナツテ居タノデス。ソレニシテモ私ハコノ事ヲ一應ハ醫局長ニ傳ヘテ指揮ヲ仰グノガ穩當

ダト思ヒ、早速ホテルへ電話ヲ掛ケマシタガ、年末ノ事デハアリ、殊ニクリスマスノ夜トテ電話ハ仲々通ジマセンデシタ。ヤツト通ジタカト思フト其ト覺シイ一團ハ一時間以上前ニ引揚ゲタト云フノデス。一時間モ前ニホテルヲ出タトスレバイヅレハ何處カヘシケ込ンダモノト考ヘテ、平常ソノ交際ノナイ私ニハ行先ヲ探スニモ一層手間取ルノデス。私ハ耳鼻科ノ宿直員ニ麻醉ヲ引受ケテ貰ツテ私自身ノ手デ手術ヲヤツテ見ヨウトキメマシタ。昨夜カラノ不眠ト煩悶トニ疲レタ身ヲ危ミナガラモ、コノ患者ダケハドウシテモ助ケルト決心ヲシマシタ。婦長モ事情ガ事情ダケニ今夜ハ流石ニ私ノ執刀ニ異議ハ申シ立テマセンデシタ。私ハ醫局デウキスキーヲ一杯傾ケテ「コレハ私ダケデハアリマセン大手術ノ前ニハ誰モガヤル事デス——私ハ手術場へ出掛ケマシタ。私ハ明ニ亢奮シテ居マシタ。醫師トシテノ大キナ信頼ヲ示サレタ喜び。久振りデ手術ラシイ手術ガ出來ル緊張。私ハ亢奮シ切ツテ居マシタ。酒ノ廻ルニツレテ、頭ヲチヨクチヨク掠メテ居タ昨夜來ノ煩悶モ、手術ニ對スル不安モスツカリ消散シテ了ヒマシタ。私ハ自信ニ輝イテ冴々トシタ氣分デシタ。所ガソノ氣持ハ手術室ニ入ルト直グサマ婦長ノ一言デ無慘ニモ眞向カラ粉碎サレタノデス。アノ女ノ只ノ一言ニデス。アノ女ハカウ申シマシタノデス——「瀨先生、シツカリヤツテ下サイヨ。コノ間ノ婦人科デノ事モアリマスカラネエ。私ハ眞實ノヤウナ電燈ノ下デ、脂

ギツタアノ女ヲ一瞬間睨ミツケマシタ。婦人科ノ話ト申シマスノハ、地方ノ某大學病院デアツタ出來事デスガ、新參ノ助手ガ腎臓炎ノ妊婦ヲ人工流産ヲ行フニ就テ、抓把術ノ間ニ妊婦ノ子宮ヲ突キ破ツテ了ツテ居ルノニ氣ツカズニ、母體ノ輸尿管ヲ胎兒ノ臍帶ト誤認シテ切斷シ、母體ノ卵巢ヲ胎兒ト誤認シテ摘出シソノ爲メニ死ニ致ラシメタ事件ナノデス。理由アツテ之ガ私達ノ醫局ヘモ聞エテ來テ先日來大分話題ニナツテ居ツタモノデス。コノ事實ヲ知ツテ下サルナラ婦長ノ一言ガ私ニ與ヘタ影響ノ力ハ自然ニオ判リ願ヘマセウ。コノ際ノ婦長ノコノ一言ハ、私ノ手腕ヲ危ンデノ注意カ、モツト積極的ナ惡意ノ言葉カ、ソレハ何レニモ取レマスガ、トニカクソノ一言デ、今ノ今マデ天上ニ居タ私ハ一瞬間ニ谷底へ蹴リ込マレタノデス。同時ニフト忘レテ居タ昨夜來ノ憂悶ガ一時ニ堰ヲ切ツテ襲ヒカカツタノデシタ。白壁ノアル故郷ノ家、母、父、妹、A子、ソレニコレハマダ見タ事モナイ誰トモ知レナイ人間ノ顔。ソレガ私ノ瞬間ノ幻ニ見エ、私ハフト惡寒ニ似タ氣持ガ身内ヲ通り抜ケタ後ニハ、頭ノ心ガ痛ム感ジガノコリマシタ。頭ヲ輕ク振ツテ見タトタンニ私ハ自分ノ頸骨ガ軌ム音ヲ聞キマシタ。手術ヲ危惧スル厭ナ豫感ガ頭ヲ掠メマシタ。患者ハモウ輸送車デ運バレテ來テ婦長ハ熱心ニ看護婦ヲ指揮シテ帶ヲ解カセタリ着物ヲ脱ガセダリシテ居リマシタ。若イ看護婦ハ患者ノ腹部ヲ眞黒ニ沃度丁幾デ塗り潰シ。麻醉掛ヲ引受ケテク

レタ耳鼻ノ内藤君ハ、患者ノ鼻ト口トヲ覆フタマスクノ上へ看護婦ガ點下スル麻醉藥ノ滴數ヲ數ヘテ居マシタ。沈黙ト緊張トガ手術室一杯ニ漲ツテ、スチームノラヂエーターガディーント鳴ルノヲ私ハ感じテ居マシタ。蒼イ電燈ノ光ノ中デ黙リコクツテ動イテ居ル私達ヲ私ハスクリーンノ人物ノヤウナ氣ガシマシタ。私ハ患者ノ右側ノ腰ノアタリヘ立ちマシタ。婦長ガガーゼヲ取ツテ私ノ額ヲ拭ツテクレマシタ。「ヒドイ油汗デスコトネエ」ト言ツタヤウニ覺エテ居マス。私ハドウモ内藤君ノ麻醉掛ガ氣ニナツタノデス。一體コノ全身麻醉ト申シマス、大脳ノ皮質ニアル知覺帶トカ運動帶トカヲ完全ニ麻痺シ切ラセテ、然モ延髓ニアル内臟諸血管ヤ呼吸等ノ中樞ガ麻痺サレナイ間一髮ヲ利用スルノガ理想デス。淺ケレバ目的ハ達セラレズ深ケレバ死ニ到ラセマス。ヒト——ツ。フター——ツ。……。

私ハ患者ガ少年ダカラ念ノタメニ數ヲカゾヘサセタノデス。患者ノ聲ハ一段ヅツ不明瞭ニナリ低音ニナリ、霧ノ中カラ來ル聲ノヤウニナリマシタ。内藤君ハ麻醉ノ深度ヲ測ル爲メニ瞳孔ト角膜ノ反射ヲ検査シテ居マシタ。私ニハドウモ内藤君ノ麻醉掛ガ不安ノデシタ。イエ、内藤君ヲ信用シナイノデハナク、タダ今迄共力シテ貰ツタ事ノナイ他科ノ人ナノガ不安ノデス。一旦執リ上ゲタ腹壁切開用ノ圓刃刀ヲ機械卓子ノ上ヘ置キ直シ

テ、患者ノ頭ノ方ヘ廻ツテ視マシタ。瞳孔ハマダ比較的敏速ニ光ヲ反射シマス、少シ麻痺ガ後イハテ、看護婦ハ又麻酔機ヲ傾ケマシタ。ヨシ！、内藤君ノ低イ聲ガスルト、私ハ反射的ニ今一度麻醉掛ヘ目ヲソラシマシタ。同時ニ半意識ノ間ニ右手ガ機械卓子ノ上ニ伸ビテ、私ハヒヤリト冷イ金屬ノ肌觸リダケヲ指尖ニ感じマシタ。突然、アノ女ノ鋭イ叱聲ガ私ノ耳許デシテ、私ノ左腕ハ、シツカリトアノ女ノ手ニ擱マレタノデス。——「オ止メナサイ。貴方デハ駄目デス。直尖缺デドウスルノデス、腹壁切開ニ！ 貴方ニハコノ手術ハ出來マセン。糠内先生ヲ呼ビマス！」過失デス。私ノ過失デス。麻醉ニ氣ヲ奪ハレタ私ノ握ツタノハ、腹壁切開用ノ圓刃刀デハナクテ、蟲様突起切除ニ使用スル直尖缺ダツタノデス。ハツト思ツテアノ女ヲ見下シタ刹那、アノ女ノ瞳ハ惡意ト嘲笑トニギラギラト燃エテ居マシタ。熱イ鐵ノ球ガ舌ノ根元ヘ突キ上ゲテ來ル氣持ガシテ、ソノ次ノ瞬間、クラクラト目マヒガシマシタ。私ハヨロメク足ヲ踏ミシメルト婦長ノ心臓ヲ目ガケテ……（八十六字抹殺）……。

メストコツヘルノ落チル音。先ヅ機械卓子ノ上ヘ突伏シ、ソレカラコンクリートノ床ヘ崩レ倒レタアノ女ノ白イ看護服ノ胸ニハ血ガ段々ト沁ミ擴ガツテ行クノヲ見ツツ私ハ放心シマシタ。若イ看護婦ノ魂切ル聲、墜ノ破レル響ヲ聞イタ時、私ハモウ内藤君ノ腕ニシツカリト抱キ止メラレテ居マシタ。ドヤドヤト人々ノ雪崩レ込ム足音ヲ聞キ乍ラ、私ノ頭ハ却ツテシートシテ目ノ奥ガ

ヅキン^ト痛ム氣持デシタ。クロルホルムノ甘イ香ガ重クアタリヲ閉シタノハ、ソノ壘ガ破レタノ
 ダナト私ハソシナ些細ナ事ヲ先ヅ氣ニシテ居マシタ。廊下カラ闖入シタノハ患者ニ急變ガアツタ
 ト思ツタソノ家族ノ人々デシタ。私ハコノ時始メテ自分ガ果スベキデアツタ重大ナ責任ヲ思ヒ出
 シタノデス。——イエ、イエ、アノ女ハ死ヌ筈ハアリマセン！ 決シテ死ニハシマセン。内藤君ノ
 腕ノ中デ藻掻キ乍ラ私ハ、内藤君ガモギ取ツタメスノ双ヲ、——私ハ何時ノ間ニカ無意識ニ直尖鋏
 ヲ圓双刀ニ握リカヘテ居マシタガ、血ノ附イタ部分ダケ指先デ計ツテ見タノデス。三纏トハナカ
 ツタ筈デス。アノ女ハ助カル、ト、ハツキリソノ時思ツタノニハ間違ハアリマセン、アンナ肥
 ツタ皮下脂肪ノ厚イ女ノ胸ガ、三纏ノ深サデハ心臟ニマデ届ク筈ハナイカラデス。アノ女ガ死
 ンダトハ思ヘマセン。嘘デセウ。尤モタトヒ死ンダニシテモ私ハ別ニ心ヲ動カシマセン。少量ナ
 ガラ酒ヲ飲ンデ居リ、又私ハサマザマナ混亂シタ状態ニ居リマシタカラ、コノ點デ私ハ多少ノ弱
 點ハ持ツテ居マスガ、私ノ殺意ヲ私ハ自分デハ正當化シテ居マス。既ニ殺意ガアツタ以上ソノ人
 ノ死ヲ弔フ氣ニモ、自分ヲ後悔スル氣ニモナラナイノデス。ソシナ事ヨリモ私ハ故郷ノ父母ヤ妹
 ガ、コノ事ヲ知ツタ時ドンナダラウカトイフ事ヲ先ヅ考ヘマス。シカシ、私達ノ家族ハ前述ノト
 ホリノ事ヲスツカリ知ツタラ、私ヲ許サナイマデモ了解ハスルト思ツテ自分デ慰メテ居マス。精

神的血統？ 私ノ血族ニハ母方ノ曾祖父ニ一人ソシナ人ガアツタトカ聞キマシタガ、外ニハ精神
 病者ハ居マセン。——有難ウゴザイマス。ソシナ御質問ヲ下サル意味ハヨクワカリマスガ、精神病
 者ハ自分デソノ徵候ヲ自覺シナイモノデス。私ガドコカ精神的ニ變調ガアルカ否カハ前述ノ陳述
 ヲヨク御聞キ願ツタ上デ、御判斷ニ任セル外ハアリマスマイ。私ニハ折角ナガラ何ノエキスキユ
 1. | スモ無ササウデアリマス。只一ツ事件ノ御理解ヲ願フタメニ申シ添ヘサセテ頂キマスレバ、手
 術場ノ外科醫ニハ一般ニ——デセウト思ヒマスガ、ソレトモ私ダケデセウカ、大手術デモアル場
 合ニハ何時モ一種血ニ饑エタトモ云フベキ特有ノ亢奮ガアルノデス。コノ激流ガアノ場合一時ニ
 堰キ止メラレ、ソノ瞬間ニ溢レタ亢奮ガ、私ノ活人ノ刀ヲ、殺人ノ刀ニ變化サセタカト思ヒマス。
 ソシナ何事ヨリモ今、私ニ一番切ナイノハ、アノ瀕死ノ患者ノ手術場デ、我ヲ忘レタ不謹慎ソノ
 モノデス。私ハ醫者トシテ又人トシテソレヲ恥ヂテ居マス。アノ患者ハドウシタラウカ。アノ手
 術ハタトヒ無効ダツテモ成功シタカツタノデス。呆然トシテ居ル人々ヲ私自身ガ促シテ、自首ス
 ル爲メニ手術室ヲ出タ後、私ハ廊下デ麻醉ノマダ淺カツタラシイ患者ノ嚙言ヲ聞キマシタ——ド
 ウスルノ。オカアサン、オカアサン——ト言ツテ居タヤウニ思ヒマス。ソノ聲ガ今デモ耳ニ殘ツ
 テ消エ去ラナイノニハ困リマス……。

芥川龍之介集

開化の良人

茶川藩之介

何時ぞや上野の博物館で、明治初期の文明に關する展覽會が開かれてゐた時の事である。或曇つた日の午後、私はその展覽會の各室を一一丁寧に歩いて、漸く當時の版畫が陳列されてゐる、最後の一室へはいつた時、その硝子戸棚の前に立つて、古ぼけた何枚かの銅版畫を眺めてゐる一人の紳士が眼にはいつた。紳士は背のすらりとした、どこか花車な所のある老人で、折目の正しい黒ずくめの洋服に、上品な山高帽をかぶつてゐた。私はこの姿を一目見ると、すぐにそれが四五日前に、或會合の席上で紹介された本多子爵だと云ふ事に氣がついた。が、近づきになつて間もない私も、子爵の交際嫌ひな性質は、以前からよく承知してゐたから、咄嗟の間、側へ行つて挨拶したものでかどうかを決しかねた。すると本多子爵は、私の足音が耳にはいつたものと見えて、徐にこちらを振り返つたが、やがてその半白な髪に掩はれた唇に、ちらりと微笑の影が動くと、心もち山高帽を持ち上げながら、「やあ」と柔しい聲で會釋をした。私はかすかな心の寛ぎを感じて、無言の儘、丁寧にその會釋を返しながら、そつと子爵の側へ歩を移した。本多子爵は壯年時代の美貌が、まだ暮方の光の如く肉の落ちた顔のどこかに、漂つてゐる種類

の人であつた。が、同時に又その顔には、貴族階級には珍らしい、心の底にある苦勞の反映が、もの思はしげな陰影を落してゐた。私は先達でも今日の通り、唯一色の黒の中に懶い光を放つてゐる、大きな眞珠のネクタイピンを、子爵その人の心のやうに眺めたと云ふ記憶があつた。……「どうです、この銅版畫は。築地居留地の圖——ですか。圖どりが中中巧妙ぢやありませんか。その上明暗も相當に面白く出来てゐるやうです。」子爵は小聲でかう云ひながら、細い杖の銀の握りで、硝子戸棚の中の繪をさし示した。私は頷いた。雲母のやうな波を刻んでゐる東京灣、いろいろな旗を翻した蒸汽船、往來を歩いて行く西洋の男女の姿、それから洋館の空に枝をのばしてゐる、廣重めいた松の立木——そこには取材と手法とに共通した、一種の和洋折衷が、明治初期の藝術に特有な、美しい調和を示してゐた。この調和はそれ以來、永久に我々の藝術から失はれた。いや、我がが生活する東京からも失はれた。私が再び領きながら、この築地居留地の圖は、獨り銅版畫として興味があるばかりでなく、牡丹に唐獅子の繪を描いた相乗の人力車や、硝子取りの藝者の寫眞が開化を誇り合つた時代を思ひ出させるので、一層懐しみがあると云つた。子爵はやはり微笑を浮かべながら、私の言を聞いてゐたが、靜にその硝子戸棚の前を去つて、隣のそれに並べてある大蘇芳年の浮世繪の方へ、ゆつ

くりした歩調で歩みよると、

「ぢやこの芳年をござらんない。洋服を着た菊五郎と銀杏返し半四郎とが、火入りの月の下で愁嘆場を出してゐる所です。これを見ると一層あの時代が、——あの江戸とも東京ともつかない夜と晝とを一つにしたやうな時代が、ありありと眼の前に浮んで来るやうぢやありませんか。」

私は本多子爵が、今でこそ交際嫌ひで通つてゐるが、その頃は洋行歸りの才子として官界のみならず民間にも、屢々聲名を謳はれたといふ噂の端も聞いてゐた。だから今、この人氣の少い陳列室で、硝子戸棚の中にある當時の版畫に囲まれながら、かう云ふ子爵の言を耳にするのは、元より當然すぎる程、ふさはしく思はれる事であつた。が、一方では又その當然すぎる事が、多少の反撥を私の心に與へたので、私は子爵の言が終ると共に、話題を當時から引き離して、一般的な浮世繪の發達へ運ばうと思つてゐた。しかし本多子爵は更に杖の銀の握りで、芳年の浮世繪を一つ一つさし示しながら、不相變低い聲で、

「殊に私などはかう云ふ版畫を眺めてゐると、三四十年前のあの時代が、まだ昨日のやうな心もちがして、今でも新聞をひろげて見たら、鹿鳴館の舞會の記事が出てゐるさうな氣がするのです。實を云ふとさつきこの陳列室へはいつた時から、もう私はあの時代の人間がみんな又生返つて、

我々の眼にこそ見えないが、そこにもこゝにも歩いてゐる。——さうしてその幽霊が時時我々の耳へ口をつけて、そつと昔の話を囁いてくれる。——そんな怪しげな考がどうしても念頭を離れないのです。殊に今の洋服を着た菊五郎などは、餘りよく私の友だちに似てゐるので、あの似顔畫の前に立つた時には、殆ど久瀧を叙したい位、半ば氣味の悪い懐しささへ感じました。どうです。御嫌でなかつたら、その友だちの話でも聞いて頂くとしませうか。」

本多子爵はわざと眼を外らせながら、私の氣をかねるやうに、落ち着かない調子でかう云つた。私は先達子爵と會つた時に、紹介の勞を執つた私の友人が、「この男は小説家ですから、何か面白い話があつた時には、聞かせてやつて下さい」と頼んだのを思ひ出した。又、それが無いにしても、その時にはもう私も、何時か子爵の懐古的な詠歎に釣りこまれて、出来るなら今にも子爵と二人で、過去の霧の中に隠れてゐる「一等煉瓦」の繁華な市街へ、馬車を驅りたいとさへ思つてゐた。そこで私は頭を下げながら、喜んで「どうぞ」と相手を促した。

「ぢやあすこへ行きますせう。」

子爵の言につれて我々は、陳列室のまん中に据ゑてあるベンチへ行つて、一しよに腰を下ろした。室内にはもう一人も人影は見えなかつた。唯、周圍には多くの硝子戸棚が、曇天の冷たい光の

中に、古色を帯びた銅版畫や浮世繪を寂然と懸け並べてゐた。本多子爵は杖の銀の握りに頤をのせて、暫くはぢつとこの子爵自身の「記憶」のやうな陳列室を見渡してゐたが、やがて眼を私の方に轉じると、沈んだ聲でかう語り出した。その友たちと云ふのは、三浦直紀と云ふ男で、私が佛蘭西から歸つて來る船の中で、偶然近づきになつたのです。年は私と同じ二十五でしたが、あの芳年の菊五郎のやうに、色の白い、細面の、長い髪をまん中から割つた、如何にも明治初期の文明が人間になつたやうな紳士でした。それが長い航海の間に、何時となく私と懇意になつて、歸朝後も互に一週間とは訪問を絶やした事がない位、親しい仲になつたのです。

「三浦の親は何でも下谷あたりの大地主で、彼が佛蘭西へ渡ると同時に、二人とも前後して致くなつたとか云ふ事でしたから、その一人息子だつた彼は、當時もう相當な資産家になつてゐたのでせう。私が知つてからの彼の生活は、ほんの御役目だけに第×銀行へ出る外は、何時も懐手をして遊んでゐられると云ふ、至極結構な身分だつたのです。ですから彼は歸朝すると間もなく親の代から住んでゐる兩國百本杭の近くの邸宅に、氣の利いた西洋風の書齋を新築して、可也贅澤な暮しをしてゐました。

「私はかう云つてゐる中にも、向うの銅版畫の一枚を見るやうに、その部屋の有様が驚きと眼の前へ浮んで來ます。大川に臨んだ佛蘭西窓、縁に金を入れた白い天井、赤いモロツコ皮の椅子や長椅子、壁に懸かつてゐるナポレオン一世の肖像畫、彫刻のある黒檀の大きな書棚、鏡のついた大理石の煖爐、それからその上に載つてゐる父親の遺愛の松の盆栽——すべてが或古い新しさを感ぜさせる、陰氣な位けばくしい、もう一つ形容すれば、どこか調子の狂つた樂器の音を思ひ出させる、やはりあの時代らしい書齋でした。しかもさう云ふ周圍の中に、三浦は何時もナポレオン一世の下に陣取りながら、結城揃ひか何かの襟を重ねて、ユウゴオのオリアンタルでも讀んで居ようと云ふのですから、愈々あそこに並べてある銅版畫にでもありさうな光景です。さう云へばあの佛蘭西窓の外を塞いで時時大きな白帆が通りすぎるのも、何となくもの珍しい心もちで眺めた覚えがありましたつけ。

「三浦は贅澤な暮しをしてゐると云つても、同年輩の青年のやうに、新橋とか柳橋とか云ふ遊里に足を踏み入れる氣色もなく、唯、毎日この新築の書齋に閉ぢこもつて、銀行家と云ふよりは若隠居にでもふさわしさうな讀書三昧に耽つてゐたのです。これは勿論一つには、彼の蒲柳の體質が一切の不攝生を許さなかつたからもありませうが、又一つには彼の性情が、どちらかと云ふと唯物的な當時の風潮とは正反對に、人一倍純粹な理想的傾向を帯びてゐたので、自然と孤獨に甘

んじるやうな境涯に置かれてしまつたのでせう。實際模範的な開化の紳士だつた三浦が、多少彼の時代と色彩を異にしてゐたのは、この理想的な性情だけで、ここへ来ると彼は寧ろ、もう一時代前の政治的夢想家に似通つてゐる所があつたやうです。

「その證據は彼が私と二人で、或日どこかの芝居でやつてゐる神風連の狂言を見に行つた時の話です。たしか大野鐵平の自害の場の幕がしまつた後だつたと思ひますが、彼は突然私の方をふり向くと『君は彼等に同情が出来るか』と、眞面目な顔をして問ひかけました。私は元より洋行歸りの一人として、すべて舊弊じみたものが大嫌ひだつた頃ですから、『いや一向同情は出来ない。廢刀令が出たからと云つて、一揆を起すやうな連中は、自滅する方が當然だと思つてゐる』と、

至極冷淡な返事をしますと、彼は不服さうに首を振つて、『それは彼等の主張は間違つてゐるかも知れない。しかし彼等がその主張に殉じた態度は、同情以上に價すると思ふ』と、云ふのです。

そこで私がもう一度、『ちや君は彼等のやうに、明治の世の中を神代の昔に返さうと云ふ子供じみた夢の爲に、二つとない命を捨てても惜しくないと思ふのか』と、笑ひながら反問しましたが、彼はやはり眞面目な調子で、『たとひ子供じみた夢にしても、信ずる所に殉ずるのだから、僕はそれで本望だ』と思ひ切つたやうに答へました。その時はかう云ふ彼の言も、單に一場の口頭語

として、深く氣にも止めませんでした。今になつて思ひ合はすと、實はもうその言の中に傷しい後年の運命の影が、煙のやうに這ひまつはつてゐたのです。が、それは追ひ追ひ話が進むに従つて、自然と御會得が參るでせう。

「何しろ三浦は何によらず、かう云ふ態度で押し通してゐましたから、結婚問題に關しても、『僕は愛のない結婚はしたくはない』と云ふ調子で、どんな好い縁談が湧いて來ても、惜しげもなく斷つてしまふのです。しかもその又彼の愛なるものが、一通りの戀愛とは事變つて、随分彼の氣に入つてゐるやうな令嬢が現れても、『どうもまだ僕の心もちには、不純な所があるやうだから』などと云つて、慈結婚と云ふ處までは中話が運びません。それが側で見ても、餘り齒痒い氣がするので、時には私も横合ひから、『それは何でも君のやうに、隅から隅まで自分の心もちを點檢してかゝると云ふ事になると、行住坐臥さへ容易には出來はしない。だからどうせ世の中は理想通りに行かないものだときらめて、好い加減な候補者で満足するさ』と、世話を焼いた事があるのですが、三浦は反つてその度に、隣むやうな眼で私を眺めながら、『その位なら何もこの年まで、僕は獨身で通しはしない』と、まるで相手にならないのです。が、友だちはそれで黙つてゐても、親戚の身になつて見ると、元來病弱な彼ではあるし、萬一血統を絶やしてはと

云ふ心配もなくはないので、せめて權妻でも置いたらどうだと勧めた向きもあつたさうですが、元よりそんな忠告などに耳を假すやうな三浦ではありません。いや、耳を假さない所か、彼はその權妻と云ふ言が大嫌ひで、日頃から私をつかまへては、「何しろいくら開化したと云つた所で、まだ日本では妾と云ふものが公然と幅を利かせてゐるのだから」と、よく嗤つてはゐたものなのです。ですから歸朝後二三年の間、彼は毎日あのナポレオン一世を相手に、根氣よく讀書してゐるばかりで、何時になつたら彼の所謂「愛のある結婚」をするのだから、とんと私たち友人にも見當のつけやうがありませんでした。

「處がその中に私は或官邊の用向きで、暫く韓國京城へ赴任する事になりました。すると向ふへ落ち着いてから、まだ一月と経たない中に、思ひもよらず三浦から結婚の通知が届いたぢやありませんか。その時の私の驚きは、大抵御想像がつきませう。が、驚いたと同時に私は、愈彼にもその愛の相手が出來たのだなと思ふと、流石に微笑せずにはゐられませんでした。通知の文面は極簡單なもので、唯、藤井勝美と云ふ御用商人の娘と縁談が整つたと云ふだけでしたが、その後引き續いて受取つた手紙によると、彼は或日散步の序にふと柳島の萩寺へ寄つた處が、そこへ丁度彼の屋敷へ出入りする骨董屋が藤井の父子と一しよに語り合せてたので、つれづれつて變内を歩いてゐる中に、何時かお顔に見染められもしたと云ふ次第なのです。何しろ萩寺と云へば、その頃はまだ仁王門も葦葺屋根で、「ぬれて行く人もをかしや雨の萩」と云ふ芭蕉翁の名高い句碑が萩の中に残つてゐる、如何にも風雅な處でしたから、實際才子佳人の奇遇には誂へ向きの舞臺だつたのに違ひありません。しかしあの外出する時は、必巴里仕立ての洋服を着用した、どこまでも開化の紳士を以て任じてゐる三浦にしては、餘り見染め方が紋切形なので、既に結婚の通知を讀んでさへ微笑した私などは、愈慥られるやうな心もちを禁ずる事が出來ませんでした。かう云へば勿論縁談の橋渡しには、その骨董屋のなつたと云ふ事も、すぐに御推察が參るでせう。又それが又幸と、即座に話がまとまつて、表向きの仲人を拵へるが早いから、その秋の中に婚禮も滞りなくすんでしまつたのです。ですから夫婦仲の好かつた事は、元より云ふまでもないでせうが、殊に私が可笑しいと同時に妬ましいやうな氣がしたのは、あれ程冷靜な學者肌の三浦が、結婚後は近狀を報知する手紙の中でも、殆ど別人のやうな快活さを示すやうになつた事でした。

「その頃の彼の手紙は、今でも私の手もとに保存してあります。それを一一讀み返すと、當時の彼の笑ひ顔が眼に見えるやうな心もちがします。三浦は子供のやうな喜ばしさで、彼の日常生活

活の細目を根氣よく書いてよこしました。今年には朝顔の培養に失敗した事、上野の養育院の寄附を依頼された事、入梅で書物が大半徴びてしまった事、抱への車夫が破傷風になつた事、都座の西洋手品を見に行つた事、藏前に火事があつた事——一數へ立ててみたのでは、とても際限がありませんが、中でも一番嬉しさうだつたのは、彼が五姓田芳梅畫伯に依頼して、細君の肖像畫を描いて貰つたと云ふ一條です。その肖像畫は彼が例のナポレオン一世の代りに、書齋の壁へ懸けて置きましたから、私も後に見ましたが、何でも束髪に結つた勝美夫人が毛金の繡のある黒の模様で、薔薇の花束を手にしながら、姿見の前に立つてゐる所を、横顔に描いたものでした。が、それは見る事が出来ても、當時の快活な三浦自身は、たうとう永久に見る事が出来なかつたのです。……」

本多子爵はかう云つて、かすかな吐息を洩しながら、暫くの間口を噤んだ。ちつとその話に聞き入つてゐた私は、子爵が韓國京城から歸つた時、萬一三浦はもう物故してゐたのではないかと思つて、我知らず不安の眼を相手の顔に注がずにはゐられなかつた。すると子爵は早くもその不安を覺つたと見えて、徐に頭を振りながら、

「しかし何れもかう云つたからと云つて、彼が私の留守中に故人になつたと云ふ事は断言出来ませ

ん。唯、彼是一年ばかり經つて、私が再内地へ歸つて見ると、三浦はやはり落ち着き拂つた、寧以前よりは幽鬱らしい人間になつてゐたと云ふだけです。これは私があの新橋停車場でわざわざ迎へに來た彼と久瀧の手を握り合つた時、既に私には氣がついてゐた事でした。いや恐らくは氣がついたと云ふよりも、その冷靜すぎるのが氣になつたといふべきでせう。實際その時私は彼の顔を見るが早いか、何よりも先に『どうした。體でも悪いのぢやないか』と尋ねた程、意外な感じに打たれました。が、彼は反つて私の怪しむのを不審がりながら、彼ばかりでなく彼の細君も至極健康だと答へるのです。さう云はれて見れば、成程一年ばかりの間にくら「愛のある結婚」をしたからと云つて、急に彼の性情が變化する筈もないと思ひましたから、それぎり私も別段氣にとめないで、『ぢや光線のせるで顔色がよくないやうに見えたのだらう』と笑つて済ませてしまひました。それが追追笑つて済ませなくなるまでには、——この幽鬱な假面に隠れてゐる彼の煩悶に感づくまでには、まだ凡そ二三箇月の時間が必要だつたのです。が、話の順序として、その前に一通り、彼の細君の人物を御話して置く必要があります。

「私が始めて三浦の細君に會つたのは、京城から歸つて間もなく、彼の大川端の屋敷に招かれて一夕の饗應に預つた時の事です。聞けば細君は彼是三浦と同年配だつたさうですが、小柄でも

あつたせるか、誰の眼にも二つ三つ若く見えたのに相違ありません。それが眉の濃い、血色の鮮な丸顔で、その晩は古代蝶鳥の模様か何かに襦珍の帯をしめたのが、當時の言を使つて形容すれば、如何にも高等の感じを與へてみました。が、三浦の愛の相手として、私が想像に描いてゐた新夫人に比べると、どこかその感じにそぐはない所があるのです。尤もこれほどかといふ位な事で、私自身にもその理由がはつきりとわかつてゐた譯ぢやありません。殊に私の豫想が狂ふのは、今度三浦に始めて會つた時を始めてとして、一度経験した事ですから、勿論その時も唯ふとさう思つただけで、別段それだから彼の結婚を祝する心が冷却したと云ふ譯でもなかつたのです。それ所か、明い空氣洋燈の光を圍んで、暫く膳に向つてゐる間に、彼の細君の潑刺たる才氣は、すつかり私を敬服させてしまひました。俗に打てば響くと云ふのは、恐らくあんな應對の仕振りの事を指すのでせう。『奥さん。あなたのやうな方は實際日本より、佛蘭西にでも御生れになればよかつたのです。』——たうとう私は眞面目な顔をして、こんな事を云ふ氣にさへなりました。すると三浦も盃を含みながら、『それ見るが好い。己が何時も云ふ通りぢやないか』と、からかふやうに横槍を入れましたが、そのからかふやうな彼の言が、刹那の間私の耳に面白く響を傳へたのは、果して私の氣のせるばかりだつたのでせうか。いや、この時半は怨ずる如く、縁に餘

を見た勝美夫人の眼が、餘りに露骨な艶かしさを裏切つてゐるやうに思はれたのは、果して私の邪推ばかりだつたのでせうか。兎に角私はこの短い應答の間に、彼等二人の平生が稻妻のやうに閃くのを、感じない譯には行かなかつたのです。今思へばあれは私にとつて、三浦の生涯の悲劇に立ち合つた最初の幕開きだつたのですが、當時は勿論私にしても、ほんの不安の影ばかりが際どく頭を掠めただけで、後は又元の如く、三浦を相手に賑な盃のやりとりを始めました。ですからその夜は文字通り一夕の歡を盡した後で、彼の屋敷を辭した時も、大川端の川風に俥上の微醺を吹かせながらやはり私は彼の爲に、所謂「愛のある結婚」に成功した事を何度もひそかに祝したのです。

「處がそれから一月ばかり經つて（元より私はその間も、度度彼等夫婦とは往來し合つてゐたのです。）或日私が友人の或ドクトルに誘はれて、丁度於傳假名書をやつてゐた新富座を見物に行きますと、丁度向ふの棧敷の中ほどに、三浦の細君が來てゐるのを見つけました。その頃私は芝居へ行く時は、必眼鏡を持つて行つたので、勝美夫人もその圓い硝子の中に、燃え立つやうな掛手氈を前にして、始めて姿を見せたのです。それが薔薇かと思はれる花を束髪にさして、地味な色の半襟の上に、白い二重頰を休めてゐましたが、私はその顔に氣がつくと同時に、向ふも例

の艶かしい眼をあげて、軽く目禮を送りました。そこで私も眼鏡を下しながら、その目禮に答へますと、三浦の細君はどうしたのか、又慌てて私の方へ會釋を返すぢやありませんか。しかもその會釋が前のそれに比べると、遙に恭しいものなのです。私はやつと最初の目禮が私に送られたのではなかつたと云ふ事に気がつきましたから、思はず周囲の高士間を見まはして、その挨拶の相手を物色しました。するとすぐ隣の柵に派手な縞の背廣を着た若い男がゐて、これも勝美夫人の會釋の相手をさがす心算だつたのでせう。匂の高い巻煙草を啣へながら、じろく／＼私たちの方を窺つてゐたのと、ぴつたり視線が合ひました。私はその浅黒い顔に何か不快な特色を見てとつたので、咄嗟に眼を反らせながら、又眼鏡をとり上げて、見るともなく向ふの棧敷を見ますと、三浦の細君のゐる柵には、もう一人女が坐つてゐるのです。檜山の女權論者——と云つたら、或は御聞き及びになつた事がないものでもありません。當時相當な名聲のあつた檜山と云ふ代言人の細君で、盛に男女同權を主張した。兎角如何はしい風評が絶えた事のない女です。私はその檜山夫人が、黒の紋付の肩を張つて、金縁の眼鏡をかけながら、まるで後見と云ふ形で、三浦の細君と並んでゐるのを眺めると、何と云ふ事もなく不吉な豫感に脅かされずにはゐられませんでした。しかもあの女權論者は、骨立つた體に薄化粧をして、絶えず襟を氣にしながら、私たちのゐる方へ——と云ふよりは恐らく隣の縞の背廣の方へ、意味ありげな眼を使つてゐるのです。私はこの芝居見物の一日が、舞臺の上の菊五郎や左團次より、三浦の細君と縞の背廣と檜山の細君とを注意するのに、より多く費されたと云つたにしても、決して過言ぢやありません。それ程私は賑な下座の噺しと櫻の釣枝との世界にゐながら、心は全然さう云ふものと没交渉な、忌はしい色彩を帯びた想像に苦しめられてゐたのです。ですから中幕がすむと間もなく、あの二人の女連れが向ふの棧敷にゐなくなつた時、私は實際肩が抜けたやうなほつとした心もちを味はひました。勿論女の方はゐなくなつても、縞の背廣はやはり隣の柵で、しつきりなく巻煙草をふかしながら、時々私の方へ眼をやつてゐましたが、三の巴の二つがなくなつた今になつては、前ほど私もその浅黒い顔が、氣にならないやうになつてゐたのです。

「と云ふと私がひどく邪推深いやうに聞えますが、これはその若い男の浅黒い顔だが、妙に私の反感を買つたからで、どうも私とその男との間には、——或は私たちとその男との間には、始から或敵意が纏綿してゐるやうな氣がしたのです。ですからその後一月とたたない中に、あの大川へ臨んだ三浦の書齋で、彼自身その男を私に紹介してくれた時には、まるで謎でもかけられたやうな、當惑に近い感情を味はずにはゐられませんでした。何でも三浦の話によると、これは彼

の細君の従弟ださうで、當時××紡績會社でも歳の割には重用されてゐる、敏腕の社員だと云ふ事です。成程さう云へば一つ卓子の紅茶を飲んで、多腰もない雑談を交換しながら、巻煙草をふかせてゐる間でさへ、彼が相當な才物だと云ふ事はすぐに私にもわかりました。が、何も才物だからと云つて、その人間に對する好悪は、勿論變る譯もありません。いや、私は何度となく、既に細君の従弟だと云ふ以上、芝居で挨拶を交す位な事は、更に不思議でも何でも無いぢやないかと、かう理性に訴へて、出来る丈その男に接近しようときへ努力して見ました。しかし私がその努力にやつと成功しさうになると、彼は必ず音を立てて紅茶を啜つたり、巻煙草の灰を無造作に卓子の上へ落したり、或は又自分の洒落を自分で聲高に笑つたり、何かしら不快な事をしでかして、再私の反感を呼び起してしまふのです。ですから彼が三十分ばかり経つて、會社の宴會とかへ出る爲に、暇を告げて歸つた時には、私は思はず立ち上つて、部屋の中の俗悪な空氣を新にしたい一心から、川に向つた佛蘭西窓を一ぱいに大きく開きました。すると三浦は例の通り、薔薇の花束を持つた勝美夫人の額の下に坐りながら、「ひどく君はあの男が嫌ひぢやないか」と、たしなめるやうな聲で云ふのです。私「どうも蟲が好かないのだから仕方がない。あれが又君の細君の従弟だとは思議だな」三浦「不思議——だと云ふと？」私「何。あんまり人間の種が選ひ

すぎるからさ」三浦は暫くの間黙つて、もう夕暮の光が漂つてゐる大川の水面をちつと眺めてゐましたが、やがて「どうだらう。その中に一つ釣にでも出かけて見ては」と何の取つきもない事を云ひ出しました。が、私は何よりもあの細君の従弟から、話題の離れるのが嬉しかつたので、「よからう。釣なら僕は外交より自信がある。」と、急に元氣よく答へますと、三浦も始めて微笑しながら、「外交よりか、ぢや僕は——さうさな、先づ愛よりは自信があるかも知れない」私「すると君の細君以上の獲物がありさうだと云ふ事になるが」三浦「さうしたら又君に羨んで貰ふから好いぢやないか」私はかう云ふ三浦の言の底に、何か針の如く私の耳を刺すものがあるのに氣がつきました。が、夕暗の中に透して見ると、彼は不相變冷な表情を浮べた儘、佛蘭西窓の外の水の光を根氣よく眺めてゐるのです。私「處で釣には何時出かけよう」三浦「何時でも君の都合の好い時にしてくれ給へ」私「ぢや僕の方から手紙を出す事にしよう」そこで私は徐に赤いモロツコ皮の椅子を離れながら、無言の儘、彼と握手を交して、それからこの秘密臭い薄暮の書齋を更にうす暗い外の廊下へ、そつと獨りで退きました。すると思ひがけなくその戸口には、誰やら黒い人影が、まるで中の様子でも偷み聽いてゐたらしく、靜に佇んでゐたのです。しかもその人影は、私の姿が見えるや否や、咄嗟に間近く進み寄つて、「あら、もう御歸りになるのでございま

すか」と、艶かしい聲をかけるぢやありませんか。私は息苦しい一瞬の後、今日も薔薇を髪にさした勝美夫人を冷に眺めながら、やはり無言の儘會釋をして、匆匆俾の待たせてある玄關の方へ急ぎました。この時の私の心もちは、私自身さへ意識出来なかつた程、混亂を極めてゐたでせう。私は唯、私の俾が兩國橋の上を通る時も、絶えず口の中で呟いてゐたのは、「ダリラ」と云ふ名だつた事を記憶してゐるばかりなのです。

「これ以來私は明に三浦の幽鬱な様子が藏してゐる祕密の匂を感じ出しました。勿論その祕密の匂が、すぐ思むべき姦通の二字を私の心に烙きつけたのは、御断りするまでもありますまい。が、もしさうだとすれば、何故又あの理想家の三浦ともあるものが、離婚を断行しないのでせう。姦通の疑惑は抱いてゐても、その證據がないからでせうか。それとも或は證據があつても、猶離婚を躊躇する程、勝美夫人を愛してゐるからでせうか。私はこんな臆測を代り代り逞くしながら、彼と釣りに行く約束があつた事さへ忘れ果てて、彼は半月ばかりの間といふものは、手紙こそ時には書きましたが、あれ程屢訪問した彼の大川端の邸宅にも、足踏さへしなくなつてしまひました。處がその半月ばかりが過ぎてから、私は又偶然にも或豫想外な事件に出合つたので、たうとう前約を果し、旁、彼と差向ひになる機會を利用して、直接彼に私の心算を打ち明け

ようと思ひ立つたのです。一と云ふのは或日の事、私はやはり友人のドクトルと中村座を見物した歸り途に、たしか珍竹林主人とか號してゐた曙新聞でも古顔の記者と一しよになつて、日の暮から降り出した雨の中を、當時柳橋にあつた生稻へ一蓋を傾けに行つたのです。處がその二階座敷で、江戸の昔を偲ばせるやうな遠三味線の音を聞きながら、暫く淺酌の趣を樂んでゐると、その中に開化の戯作者のやうな珍竹林主人が、ふと興に乗つて、折折輕妙な洒落を交へながら、あの楯山夫人の醜聞を面白く話して聞かせ始めました。何でも夫人の前身は神戸あたりの洋妾だと云ふ事、一時は三遊亭圓曉を男妾にしてゐたと云ふ事、その頃は夫人の全盛時代で金の指環ばかり六つも嵌めてゐたと云ふ事、それが二三年前から不義理な借金で殆首もまはらないと云ふ事——珍竹林主人はまだこの外にも、いろいろ内幕の不品行を素つばぬいて聞かせましたが、中でも私の心の上には一番不愉快な影を落したのは、近來はどこかの若い御新造が楯山夫人の腰巾着になつて、歩いてゐると云ふ風評でした。しかもこの若い御新造は、時時女權論者と一しよに、水神あたりへ男連れで泊りこむらしいと云ふぢやありませんか。私はこれを聞いた時には、陽氣なるべき獻酬の間でさへ、もの思はしげな三浦の姿が執念深く眼の前へちらついて、義理にも賑な笑ひ聲は立て

られなくなつてしまひました。が、幸とドクトルは、早くも私のふさいであるのに氣がついたものと見えて、巧に相手を操りながら、何時か話題を檜山夫人とは全く縁のない方面へ持つて行つてくれましたから、私はやつと息をついて、兎も角一座の興を殺がない程度に、應對を續ける事が出来たのです。しかしその晩は私にとつて、どこまでも運悪く出来上つてゐたのでせう。女權論者の噂に氣を腐らした私が、やがて二人と一しよに席を立つて、生稻の玄關から歸りの俵へ乗らうとしてゐると、急に一臺の相乗俵が幌を雨に光らせながら、勢よくそこへ曳きこまれた。しかも私が俵の上へ靴の片足を踏みかけたのと、向ふの俵が桐油を下して、中の一人が沓脱ぎへ勢よく飛んで下りたのが、殆同時だつたのです。私はその姿を見るが早いか、素早く幌の下へ身を投じて、車夫が梶棒を上げる刹那の間も、異様な興奮に動かされながら、『あいつだ』と呟かすにはゐられませんでした。あいつと云ふのは別人でもない。三浦の細君の従弟と稱する、あの色の浅黒い縞の背廣だつたのです。ですから私は雨の脚を俵の幌に弾きながら、燈火の多い廣小路の往來を飛ぶやうに走つて行く間も、あの相乗俵の中に乗つてゐた、もう一人の人物を想像して、何度となく恐しい不安の念に脅されました。あれは一體檜山夫人でしたらうか。或は又東雲に善敷の襟をさした勝美夫人だつたでせうか。兎も角、此の間に、

に惱まされながら、寧ろその疑惑の晴れる事を恐れて、倉皇と俵に身を隠した私自身の臆病な心もちが、腹立たしく思はれてなりません。このもう一人の人物が果して三浦の細君だつたかそれとも女權論者だつたかは、今になつても猶私には解く事の出来ない謎なのです。本多子爵はどこからか、大きな絹の手巾を出して、つつましく鼻をかみながら、もう暮色を帯び出した陳列室の中を見渡して、靜に又話を續け始めた。

「尤もこの問題はいづれにせよ、兎に角珍竹林主人から聞いた話だけは、三浦の身にとつて三考にも四考にも價する事ですから、私はその翌日すぐに手紙をやつて、保養かてら約束の釣に出たいと思ふ日を知らせました。するとすぐに折り返して、三浦から返事が届きましたが、見るとその日は丁度十六夜だから、釣よりも月見旁、日の暮から大川へ舟を出さうと云ふのです。勿論私にしても格別釣に執着があつた譯でもありませんから、早速彼の發議に同意して、當日はかねての約束通り柳橋の舟宿で落合つてから、まだ月の出ない中に猪牙舟で大川へ漕ぎ出しました。

「あの頃の大川の夕景色は、たとひ昔の風流には及ばなかつたかも知れませんが、それでも猶どこか浮世繪じみた美しさが残つてゐたものです。現にその日も萬八の下を大川筋へ出て見ますと、大きく墨をなすつたやうな兩國橋の欄干が、仲秋のかすかな夕明りを揺かしてゐる川波の空

に、一反り反つた一文字を黒黒とひき渡して、その上を通る車馬の影が、早くも水霞にぼやけた中には、目まぐるしく行き交ふ提灯ばかりが、もう鬼灯程の小ささに點點と赤く動いてゐました。三浦『どうだ、この景色は』私『さうさな、こればかりはいくら見たいと云つたつて、西洋ぢやとても見られない景色かも知れない。』三浦『すると君は景色なら、少し位舊弊でも差支へないと云ふ譯か』私『まあ、景色だけは負けて置かう』三浦『處が僕は又近頃になつて、すつかり開化なるものがいやになつてしまつた』私『何んでも舊幕の修好史がヴルヴァルを歩いてゐるのを見て、あの口の悪いメリイと云ふやつは、側にゐたデユマか誰かに『おい、誰が一體日本人をあんな途方もなく長い刀に縛りつけたのだらう』と云つたさうだぜ。君なんぞは氣をつけないと、すぐにメリイの毒舌でこき下される仲間らしいな』三浦『いや、それよりもこんな話がある。何時か使に來た何如璋と云ふ支那人は、横濱の宿屋へ泊つて日本人の夜着を見た時に、『是古の寝衣なるもの、此邦に夏周の遺制あるなり』とか何とか、感心したと云ふぢやないか。だから何も舊弊だからつて、一概には莫迦に出來ない。』その中に上げ汐の川面が、急に闇を加へたのに驚いて、ふとあたりを見ますと、何時の間にか我我を乗せた猪牙舟は、一段と櫓の音を早めながら、今ではもう兩國橋を後にして、夜目にも黒い首尾の松の前へ、さしかからうとしてゐるのです。』

は一類も早く、隣美夫人の問懸へ話題を進めようと思ひましたから、早速三浦の言尻をつかまへて、『そんなに君が舊弊好きなら、あの開化な細君はどうするのだ』と、探りの錘を投げ込みました。すると三浦は暫くの間、私の問が聞えないやうに、まだ月代もしない御竹倉の空をちつと眺めてゐましたが、やがてその眼を私の顔に据ゑると、低いながらも力のある聲で、『どうもしない。一週間ばかり前に離縁をした』ときつぱりと答へたぢやありませんか。私はこの意外な答に狼狽して、思はず舩をつかみながら、『ぢや君も知つてゐたのか』と、際どい聲で尋ねました。が、三浦は依然とした靜な調子で、『君こそ萬事を知つてゐたのか』と念を押すやうに問ひ返すのです。私『萬事かどうかは知らないが、君の細君と楡山夫人との關係だけは聞いてゐた』三浦『ぢや、僕の妻と妻の従弟との關係は？』私『それも薄薄推察してゐた』三浦『それぢや僕はもう何も云ふ必要はない筈だ』私『しかし——しかし君は何時からそんな關係に氣がついた？』三浦『妻と妻の従弟とのか？』それは結婚して三月程経つてから——丁度あの妻の肖像畫を、五姓田芳梅畫伯に依頼して描いて貰ふ前の事だつた』この答が私にとつて、更に又意外だつたのは、大抵御想像がつくでせう。私『どうして君は又、今日までそんな事を黙認してゐたのだ？』三浦『黙認してゐたのぢやない。僕は肯定してやつてゐたのだ。』私は三度意外な答に驚かされて、暫くは唯

茫然と彼の顔を見つめてみると、三浦は少しも迫らない容子で、『それは勿論妻と妻の従弟との現在の關係を肯定した譯ぢやない。當時の僕が想像に描いてみた彼等の關係を肯定してやつたのだ。君は僕が「愛のある結婚」を主張してゐたのを覚えてゐるだらう。あれは僕が僕の利己心を満足させたい爲の主張ぢやない。僕は愛をすべての上に置いた結果だつたのだ。だから僕は結婚後、僕等の間の愛情が純粹なものでない事を覺つた時、一方僕の輕擧を後悔すると同時に、さう云ふ僕と同棲しなければならぬ妻も氣の毒に感じたのだ。僕は君も知つてゐる通り、元來體も壯健ぢやない。その上僕は妻を愛さうと思つてゐても、妻の方ではどうしても僕を愛する事が出來ないのだ、いやこれも事によると、抑僕の愛なるものが、相手にそれだけの熱を起させ得ない程、貧弱なものだつたかも知れない。だからもし妻と妻の従弟との間に、僕と妻との間よりもつと純粹な愛情があつたら、僕は潔く幼馴染の彼等の爲に犠牲になつてやる考だつた。さうしなれば愛をすべての上に置く僕の主張が、事實に於て廢つてしまふ。實際あの妻の肖像畫も萬一さうなつた曉に、妻の身代りとして僕の書齋に残して置く心算だつたのだ。』三浦はかう云ひながら、又眼を向う河岸の空へ送りました。が、空はまるで黒幕でも垂らしたやうに、椎の樹松浦の屋敷のトへ陰陰と蔽ひかゝつた儘、月の出らしい雲のけはひは未だ少しも見せません。私は巻煙

草に火をつけた後で、『それから！』と相手を促しました。三浦『處が僕はそれから間もなく、妻の従弟の愛情が不純な事を發見したのだ、露骨に云へばあの男と榎山夫人との間にも、情交のある事を發見したのだ。どうして發見したかと云ふやうな事は、君も格別聞きたくはなからうし、僕も今更話したいとは思はない。が、兎に角或極めて偶然な機會から、僕自身彼等の密會する所を見たとき云ふ事だけ云つて置かう』私は巻煙草の灰を舐の外の落しながら、あの生稻の雨の夜の記憶を、まざまざと心に描き出しました。が、三浦は澁みなく言を繼いで、『これが僕にとつては、正に第一の打撃だつた。僕は彼等の關係を肯定してやる根據の一半を失つたのだから、勢、前のやうな好意のある眼で、彼等の情事を見る事が出來なくなつてしまつたのだ。これは確、君が朝鮮から歸つて來た頃の事だつたらう。あの頃の僕は、如何にして妻の従弟から妻を引き離さうかと云ふ問題に、毎日頭を悩ましてゐた。あの男の愛に虚偽はあつても妻のそれは純粹なのに違ひない。——かう信じてゐた僕は、同時に又妻自身の幸福の爲にも、彼等の關係に交渉する必要があると信じてゐたのだ。が、彼等は——少くとも妻は、僕のかう云ふ素振りに感づくと、僕が今まで彼等の關係を知らずにゐて、その頃やつと氣がついたものだから、嫉妬に驅られ出したとでも解釋してしまつたらしい。従つて僕の妻は、それ以來僕に對して、敵意のある監視を加

へ始めた。いや、事によると時時は、君にさへ僕と同様の警戒を施してゐたかも知れない。私
 『さう云へば、何時か君の細君は、書齋で我我が話してゐるのを立ち聴きをしてゐた事があつ
 た』三浦『さうだらう、ずるぶんその位な振舞はし兼ねない女だつた』私たちは暫く口を噤ん
 で、暗い川面を眺めました。この時もう我我の猪牙舟は、元の御厩橋の下をくぐりぬけて、かす
 かな舟脚を夜の水に残しながら、彼是駒形の並木近くへさしかかつてゐたのです。その中に又三
 浦が、沈んだ聲で云ひますには、『が、僕はまだ妻の誠實を疑はなかつた。だから僕の心もちが
 妻に通じない點で、——通じない所か、寧、憎悪を買つてゐる點で、それだけ餘計に僕は煩悶し
 た。君を新橋に出迎へて以來、たうとう今日に至るまで、僕は始終この煩悶と闘はなければなら
 なかつたのだ。が、一週間ばかり前に、下女か何かの過失から、妻の手にはひる可き郵便が、僕
 の書齋へ來てゐるぢやないか。僕はすぐ妻の從弟の事を考へた。さうして——たうとうその手紙
 を開いて見た。すると、その手紙は思ひもよらない外の男から妻へ宛てた艶書だつたのだ。言ひ
 換へれば、あの男に對する妻の愛情も、やはり純粹なものぢやなかつたのだ。勿論この第二の打
 撃は、第一のそれよりも遙かに恐ろしい力を以て、あらゆる僕の理想を粉碎した。が、それと同時
 に又、僕の責任が急に輕くなつたやうな、悲むべき安慰の感情を味つた事も亦事實だつた。三浦
 がかう語り終つた時、丁度向う河岸の並倉の上には、もの妻いやうな赤い十六夜の月が、始めて
 大きく上り始めました。私がさつきあの芳年の浮世繪を見て、洋服を着た菊五郎から三浦の事を
 思ひ出したのは、殊にその赤い月が、あの芝居の火入りの月に似てゐたからの事だつたのです。
 あの色の白い、細面の、長い髪をまん中から割つた三浦は、かう云ふ月の出を眺めながら、急に
 長い息を吐くと、さびしい微笑を帯びた聲で、『君は昔、神風連が命を賭して争つたものも子供の
 夢だとけなした事がある。ぢや君の眼から見れば、僕の結婚生活なども——』私『さうだ。やは
 り子供の夢だつたかも知れない。が、今日我我の目標にしてゐる開化も、百年の後になつて見た
 ら、やはり同じ子供の夢だらうぢやないか。……』
 丁度本多子爵がここ迄語り續けた時、我我は何時か側へ來た守衛の口から、閉館の時刻が既に
 迫つてゐると云ふ事を傳へられた。子爵と私とは徐に立上つて、もう一度周圍の浮世繪と銅版
 畫とを見渡してから、そつとこのうす暗い陳列室の外へ出た。まるで我我自身も、あの硝子棚か
 ら浮び出た過去の幽霊か何かのやうに。

開化の殺人

下に掲げるのは、最近予か本多子爵（假名）から借覽する事を得た、故ドクトル・北畠義一郎（假名）の遺書である。北畠ドクトルは、よし實名を明にした所で、もう今は知つてゐる人もあるまい。予自身も、本多子爵に親炙して、明治初期の逸事瑣談を聞かせて貰ふやうになつてから、初めてこのドクトルの名を耳にする機會を得た。彼の人物性行は、下の遺書によつても幾分の説明を得るに相違ないが、猶二三、予が仄聞した事實をつけ加へて置けば、ドクトルは當時内科の専門醫として有名だつたと共に、演劇改良に關しても或急進的意見を持つてゐた、一種の劇通だつたと云ふ。現に後者に關しては、ドクトル自身の手になつた戯曲さへあつて、それはヴォルテエルの Candid の一部を、徳川時代の出來事として脚色した、二幕物の喜劇だつたさうである。

北庭筑波が撮影した寫眞を見ると、北畠ドクトルは英吉利風の頬鬚を蓄へた、容貌魁偉な紳士である。本多子爵によれば、體格も西洋人を凌ぐばかりで、少年時代から何をするのでも、精力披瀝を以て知られてゐたと云ふ。さう云へば遺書の文字さへ、歐風流の奔放な字で、その淋漓たる黒痕の中にも、彼の風貌が看取されぬ事もない。

勿論予はこの遺書を公にするに當つて、幾多の改竄を施した。譬へば當時まだ授爵の制がなかつたにも關らず、後年の稱に從つて本多子爵及夫人等の名を用ひた如きものである。唯、その文章の調子に至つては、殆原文の調子をそつくりその儘、ひき寫したと云つても差支へない。

本多子爵閣下、並に夫人、

予は予が最期に際し、既往三年來、常に予が胸底に蟠れる、呪ふ可き祕密を告白し、以て卿等の前に予が醜惡なる心事を暴露せんとす。卿等にして若しこの遺書を讀むの後、猶卿等の故人たる予の記憶に對し、一片憐憫の情を動す事ありとせんか、そは素より予にとりて、望外の大幸なり。されど又予を目して、萬死の狂徒と做し、當に屍を鞭打つて後已む可しとするも、予に於ては毫も遺憾とする所なし。唯、予が告白せんとする事實の、餘りに意想外なるの故を以て、妄に予を誣ふるに、神經病患者の名を藉る事勿れ。予は最近數ヶ月に亘りて、不眠症の爲に苦しむつゝありと雖も、予が意識は明白にして、且極めて鋭敏なり。若し卿等にして、予が二十年來の相識たるを想起せんか。（予は敢て友人とは稱せざる可し。）請ふ、予が精神的健康を疑ふ事勿れ。

然らずんば、予が一生の汚辱を披瀝せんとする此遺書の如きも、結局無用の故紙たる何の選ぶ所か是あらん。

閣下、並に夫人、予は過去に於て殺人罪を犯したると共に、將來に於ても亦同一罪惡を犯さんとしたる卑む可き危険人物なり。しかもその犯罪が卿等に最も親近なる人物に對して、企畫せられたるのみならず、又企畫せられんしたりと云ふに至りては、卿等にとりて正に意外中の意外たる可し。予は是に於て予が警告を再するの、必要なる所以を感じざる能はず。予は全然正氣にして、予が告白は徹頭徹尾事實なり。卿等幸にそれを信ぜよ。而して予が生涯の唯一の記念たる、この數枚の遺書をして、空しく狂人の囈語たらしむる事勿れ。

予はこれ以上予の健全を喋々すべき餘裕なし。予が生存すべき僅少なる時間は、直下に予を驅りて、予が殺人の動機と實行とを叙し、更に進んで予が殺人後の奇怪なる心境に言及せしめずんば、已まざらんとす。されど、嗚呼されど、予は硯に呵し紙に臨んで、猶惶々として自ら安からざるものあるを覺ゆ。惟ふに予が過去を點檢し記載するは、予にとりて再過去の生活を營むと、畢竟何の差違かあらん。予は殺人の計畫を再し、その實行を再し、更に最近一年間の恐る可き苦悶を再せざる可らず。悲觀して善く予の善へ導く可き能なり。予は是を以て、

予は少時より予が従妹たる今の本多子爵夫人（三人稱を以て、呼ぶ事を許せ。）往年の甘露寺明子を愛したり。予の記憶に溯りて、予が明子と偕にしたる幸福なる時間を列記せんか。そは恐らく卿等が卒讀の煩に堪へざる所ならん。されど予はその例證として、今日も猶予が胸底に歴々たる一場の光景を語らざるを得ず。予は當時十六歳の少年にして、明子は未十歳の少女なりき。五月某日予等は明子が家の芝生なる藤棚の下に嬉戯せしが、明子は予に對して、隻脚にて善く久しく立つを得るやと問ひぬ。而して予が否と答ふるや、彼女は左手を垂れて左の趾を握り、右手を舉げて均衡を保ちつゝ、隻脚にて立つ事、是を久うしたりき。頭上の紫藤は春日の光を揺りて垂れ、藤下の明子は凜然として彫塑の如く佇めり。予はこの畫の如き數分の彼女を今に至つて忘るる能はず。私に自ら省みて、予が心既に深く彼女を愛せるに驚きしも、實にその藤棚の下に於て然りしなり。爾來予の明子に對する愛は益々烈しきを加へ、念々に彼女を想ひて、殆學を廢するに至りしも、予の小心なる、遂に一語の予が衷心を吐露す可きものを出さず。陰晴定りなき感情の悲天の下に、或は泣き、或は笑ひて、茫茫數年の年月を閲せしが、予の二十一歳に達するや、予が父は突然予に命じて、遠く家業たる醫學を英京龍動に學ばしめぬ。予は訣別に際

して、明子に語るに予が愛を以てせんとせしも、嚴肅なる予等が家庭は、斯る機會を與ふるに吝なりしと共に、儒教主義の教育を受けたる予も、亦桑間濮上の譏を懼れたるを以て、無限の離愁を抱きつつ、孤笈飄然として英京に去れり。

英吉利留學の三年間、予がハイド・パークの芝生に立ちて、如何に故園の紫藤花下なる明子を懐ひしか。或は又予がパルマルの街頭を歩して、如何に天涯の遊子たる予自身を憫みしか、そは茲に叙説するの要なかる可し。予は唯、龍動に在るの日、予が所謂薔薇色の未來の中に、來る可き予等の結婚生活を夢想し、以て僅に悶々の情を排せしを語れば足る。然り而して予の英吉利より歸朝するや、予は明子の既に嫁して第×銀行頭取滿村恭平の妻となりしを知りぬ。予は即座に自殺を決心したれども、予が性來の怯懦と、留學中歸依したる基督教の信仰とは、不幸にして予が手を癱痺せしめしを如何せん。卿等にして若し當時の予が、如何に傷心したるか知らんとせば、予が歸朝後旬日にして、再英京に去らんとし、爲に予が父の激怒を招きたるの一事を想起せよ。當時の予が心境を以てすれば、實に明子なきの日本は、故國に似て故國にあらず。この故國ならざる故國に止つて、徒に精神的敗殘者たるの生涯を送らんよりは、寧チチャイルド・ハロルドの一巻を抱いて、遠く萬里の孤客となり、骨を異域に抛るるの途に歸せしむるなり。

されど予が身邊の事情は遂に予をして渡英の計畫を抛棄せしめ、加之予が父の病院内に、一個新歸朝のドクトルとして、多數患者の診療に忙殺さる可き、退屈なる椅子に倚らしめたりぬ。是に於て予は予の失戀の慰藉を神に求めたり。當時築地に在住したる英吉利宣教師ヘンリー・ダウンゼンド氏は、この間に於ける予の忘れ難き友人にして、予の明子に對する愛が、幾多の惡戦苦闘の後、漸次熱烈にしてしかも靜平なる肉親的感情に變化したるは、一に同氏が予の爲に釋義したる聖書の數章の結果なりき。予は屢、同氏と神を論じ、更に人間の愛を論じたる後、半夜行人稀なる築地居留地を歩して、獨り予が家に歸りしを記憶す。若し卿等にして予が見女の情あるを晒はずんば、予は居留地の空なる半輪の月を仰ぎて、私に従妹明子の幸福を神に祈り、感極まつて歎歎せしを語るも善し。

予が愛の新たなる轉向を得しは、所謂「あきらめ」の心理を以て、説明す可きものなりや否や、予は之を詳にする勇氣と餘裕とに乏しけれど、予がこの肉親的愛情によりて、始めて予が心の創痍を醫し得たるの一事は疑ふ可らず。是を以て歸朝以來、明子夫妻の消息を耳にするを蛇蝎の如く恐れたる予は、今や予がこの肉親的愛情に依頼し、進んで彼等に接近せん事を希望したり。こは予にして若し彼等に幸福なる夫妻を見出さんか、予の慰安の益大にして、念頭些の苦悶な

きに至る可しと、早計にも信じたるが故のみ。

予はこの信念に動かされし結果、遂に明治十一年八月三日兩國橋畔の大煙火に際し、知人の紹介を機會として、折から校書十數輩と共に柳橋萬八の水樓に在りし、明子の夫滿村恭平と、始めて一夕の歡を俱にしたり。歡か、歡か、予はその苦と云ふの、遙に勝れるの所以を思はざる能はず。予は日記に書いて曰く予は明子にして、かの滿村某の如き、濫淫の賤貨に妻たるを思へば、殆一肚皮の憤怨何の處に向つてか吐かんとするを知らず。神は予に明子を見る事、妹の如くなるべきを教へ給へり。然り而して予が妹を、斯る禽獸の手に委せしめ給ひしは、何ぞや。予は最早、この殘酷にして評語なる神の惡戯に堪ふる能はず。誰か善くその妻と妹とを強人の爲に凌辱せられ、しかも猶天を仰いで神の御名を稱ふ可きものあらむ。予は今度斷じて神に依らず、予自身の手を以て、予が妹明子をこの色鬼の手より救助す可し。」

予はこの遺書を認むるに臨み、再當時の呪ふ可き光景の、眼前に彷彿するを禁ずる能はず。かの蒼然たる水霞と、かの萬點の紅燈と、而してかの隊々相銜んで、盡くる所を知らざる畫舫の列と——嗚呼、予は終生その夜、その半空に仰ぎたる煙火の明滅を記憶すると共に、右に大妓を擁し、左に雛妓を従へ、猥褻開くに堪へざるの俚歌を高吟しつつ、傲然として涼棚の上に酣醉し

たる、かの肥大家の如き滿村恭平をも記憶す可し。否、否、彼の黒網の羽織に抱明姜の三つ紋ありしさへ、今に至つて予は忘却する能はざるなり。予は信ず。予が彼を殺害せんとするの意志を抱きしは、實にこの水樓煙火を見しの夕に始る事を。又信ず。予が殺人の動機なるものは、その發生の當初より、斷じて單なる嫉妬の情にあらずして、寧不義を懲し不正を除かんとする道德的憤激に存せし事を。

爾來予は心を潜めて、滿村恭平の行狀に注目し、その果して予が一夕の觀察に悖らざる痴漢なりや否やを檢査したり。幸にして予が知人中、新聞記者を業とするもの、管に二三子に止らざりしを以て、彼が淫虐無道の行跡の如きも、その予が視聽に入らざるものは絶無なりしと云ふも妨げざる可し。予が先輩にして且知人たる成島柳北先生より、彼が西京祇園の妓樓に、雛妓の未春を懐かざるものを梳櫛して、以て死に到らしめしを仄聞せしも、實に此間の事に屬す。しかもこの無頼の夫にして、夙に溫良貞淑の稱ある夫人明子を遇するや、奴婢と一般なりと云ふに至つては、誰か善く彼を目して、人間の疫癘と做さざるを得んや。既に彼を存するの風を頹し俗を濫る所以なるを知り、彼を除くの老を扶け幼を憐む所以なるを知る、是に於て予が殺害の意志たりしものは、徐に殺害の計畫と變化し來れり。

然れども若し是に止らんか、予は恐らく予が殺人の計畫を實行するに、猶幾多の逡巡なきを得ざりしならん。幸か、抑亦不幸か、運命はこの危険なる時期に際して、予を予が年少の友たる本多子爵と、一夜墨上の旗亭柏屋に會せしめ以て酒間その口より一場の哀話を語らしめたり。予はこの時に至つて、始めて本多子爵と明子とが、既に許嫁の約ありしにも關らず、彼、滿村恭平が黄金の威に壓せられて、遂に破約の已む無きに至りしを知りぬ。予が心、豈憤を加へざらんや。かの酒燈一穗、畫樓簾裡に暗淡たるの處、本多子爵と予とが杯を含んで、滿村を痛罵せし當時を思へば、予は今に至つて自ら肉動くの感なきを得ず。されど同時に又、當夜人力車に乗じて、柏屋よりの歸るの途、本多子爵と明子との舊契を思ひて、一種名状す可らざる悲哀を感じしも、予は猶明に記憶する所なり。請ふ。再び予が日記を引用するを許せ。「予は今夕本多子爵と會してより、愈旬日の間に滿村恭平を殺害す可しと決心したり。子爵の口吻より察するに、彼と明子とは、獨り許嫁の約ありしのみならず、又實に相愛の情を抱きたるものの如し。予は今日にして、子爵の獨身生活の理由を發見し得たるを覺ゆ。若し予にして滿村を殺害せんか、子爵と明子とが仇讎を完うせんは、必ずしも難事にあらず。偶明子の滿村に嫁して、未一兒を擧げざるは、恰も天意亦予が計畫を扶くるに似たるの觀あり。予はかの獸心の巨紳を殺害するの結

果、予の親愛なる子爵と明子とが、早晚幸福なる生活に入らんとするを思ひ、自ら口邊の微笑を禁ずる事能はず。」
 今や予が殺人の計畫は、一轉して殺人の實行に移らんとす。予は幾度か周密なる思慮を重ねたるの後、漸くにして滿村を殺害す可き適當なる場所と手段とを選定したり。その何處にして何なりしかは、敢て詳細なる叙述を試みるの要なかる可し。卿等にして猶明治十二年六月十二日、獨逸皇孫殿下が新富座に於て日本劇を見給ひしの夜、彼、滿村恭平が同劇場よりその自邸に歸らんとする途次、馬車中に於て突如病死したる事實を記憶せんか、予は新富座に於て滿村の血色宜しからざる由を説き、これに所持の丸藥の服用を勧誘したる、一個壯年のドクトルありしを語れば足る。嗚呼、卿等請ふ、そのドクトルの面を想像せよ。彼は鼻々たる紅球燈の光を浴びて、新富座の木戸口に佇みつゝ、霖雨の中に奔馳し去る滿村の馬車を目送するや、昨日の憤怒、今日の歡喜、均しく胸中に蝟集し來り、笑聲嗚咽共に唇頭に溢れんとして、殆、處の何處たる、時の何時たるを忘却したりき。しかもその彼が且泣き且笑ひつつ、肅雨を犯し泥濘を踏んで、狂せる如く歸途に就きしの時、彼の呟いて止めざりしものは明子の名なりしをも忘るる事勿れ。——予は終夜眠らずして、予が書齋を徘徊したり。歡喜か、悲哀か、予はそれを明にす

る能はず。唯、或云ひ難き強烈なる感情は、予の全身を支配して、一霎時たりと雖も、予をして安坐せざらしむるを如何。予が卓上に三鞭酒あり、薔薇の花あり、而して又かの丸樂の箱あり。予は殆、天使と悪魔とを左右にして、奇怪なる饗宴を開きしが如くなりき……」

予は爾來數ヶ月の如く、幸福なる日子を閲せし事あらず。満村の死因は警察醫によりて、予の豫想と寸分の相違もなく、脳出血の病名を與へられ、即刻地下六尺の暗黒に、腐肉を蟲蛆の食したるが如し。既に然り、誰か又予を目して、殺人犯の嫌疑ありと做すものあらん。しかも仄聞する所によれば、明子はその良人の死に依りて、始めて蘇色ありと云ふにあらずや。予は満面の喜色を以て予の患者を診察し、閑あれば即本多子爵と共に、好んで劇を新富座に見たり。是全く予にとりては、予が最後の勝利を博せし、光榮ある戰場として、屢その花瓦斯とその掛毛氈とを眺めんとする、不思議なる欲望を感じしが爲のみ。

然れどもこは眞に、數ヶ月の間なりき。この幸福なる數ヶ月の経過すると共に、予は漸次予が生涯中最も憎む可き誘惑と闘ふ可き運命に接近しぬ。その闘の如何に酷烈を極めたるか、如何に歩々予を死地に驅逐したるか。予は到底茲に叙説するの勇氣なし。否、この遺書を認めつつある現在さへも、予は猶この水蛇の如き誘惑と、死を以て闘はざる可からず。鶴等にして若し予が

煩悶の跡を見んと欲せば、請ふ、以下に抄録せんとする予が日記を一瞥せよ。

「十月×日、明子、子なきの故を以て満村家を去る由、予は近日日本多子爵と共に、六年ふりにて彼女と會見す可し。歸朝以來、始予は彼女を見るの己の爲に忍びず、後は彼女を見るの彼女の爲に忍びずして、遂に荏苒今日に及べり。明子の明眸、猶六年以前の如くなる可きや否や。

「十月×日、予は今日日本多子爵を訪れ、始めて共に明子の家に赴かんとしぬ。然るに豈計らんや、子爵は予に先立ちて、既に彼女を見る事兩三度なりと云はんには。子爵の予を疎外する、何ぞ斯くの如く甚しきや。予は甚しく不快を感じたるを以て、辭を患者の診察に託し、匆惶として子爵の家を辭したり。子爵は恐らく予の去りし後、單身明子を訪れしならんか。

「十一月×日、予は本多子爵と共に、明子を訪ひぬ。明子は容色の幾分を減却したれども、猶紫藤花下に立ちし當年の少女を髣髴するは、未必しも難事にあらず。嗚呼予は既に明子を見たり。而して予が胸中、反つて止む可らざる悲哀を感じるは何ぞ。予はその理由を知らざるに苦む。

「十二月×日、子爵は明子と結婚する意志あるものの如し。斯くして予が明子の夫を殺害したる目的は、始めて完成の域に達するを得ん。されど——されど、予は予が再明子を失ひつつある

如き、異様たる苦痛を免るる事能はず。
 「三月×日、子爵と明子との結婚式は、今年年末を期して、舉行せらるべしと云ふ。予はその一日も速ならん事を祈る。現状に於ては、予は永久にこの止み難き苦痛を脱離する能はざる可し。」

「六月十二日、予は獨り新富座に赴けり。去年今日、予が手に付れたる犠牲を思へば、予は觀劇中も自ら會心の微笑を禁ぜざりき。されど同座より歸途予がふと予の殺人の動機に想到するや、予は殆ど歸趨を失ひたるかの感に打たれたり。嗚呼、予は誰の爲に満村恭平を殺せしか。本多子爵の爲か、明子の爲か、抑も亦予自身の爲か。こは予も亦答ふる能はざるを如何。」

「七月×日、予は子爵と明子と共に、今夕馬車を驅つて、隅田川の流燈會を見物せり。馬車の窓より洩るる燈光に、明子の明眸の更に美しかりしは、始予をして傍に子爵あるを忘れしめぬ。されどそれ予が語らんとする所にあらず、予は馬車中子爵の胃痛を訴ふるや、手にポケットを搜りて、丸薬の函を得たり、而してその「かの丸薬」なるに一驚したり。予は何が故に今宵この丸薬を携へたるか。偶然か、予は切にその偶然ならん事を庶幾ふ。されどそは必ずしも偶然にはあらざりしものゝ如し。」

「八月×日 予は子爵と明子と共に、予が家に晚餐を共にしたり。しかも予は始終、予がポケットの底なるかの丸薬を忘るゝ事能はず。予の心は、殆ど予自身にとりても、不可解なる怪物を藏するに似たり。」

「十一月×日 子爵は遂に明子と結婚式を挙げたり。予は予自身に對して、名狀し難き憤怒を感じぜざるを得ず。その憤怒たるや、恰も一度遁走せし兵士が、自己の怯懦に對して感ずる羞恥の情に似たるが如し。」

「十二月×日 予は子爵の請に應じて、之をその病床に見たり。明子亦傍にありて、夜來發熱甚しと云ふ。予は診察の後、その感冒に過ぎざるを云ひて、直に家に歸り、子爵の爲に自ら調劑しぬ。その間二時間、「かの丸薬」の函は始終予に恐る可き誘惑を持續したり。」

「十二月×日 予は昨夜子爵を殺害せる悪夢に脅されたり。終日胸中の不快を排し難し。
 「二月×日 嗚呼予は今にして始めて知る、予が子爵を殺害せざらんが爲には、予自身を殺害せざる可らざるを。されど明子は如何。」

子爵閣下、並に夫人、こは予が日記の大略なり。大略なりと雖も、予が連日連夜の苦悶は、卿等必ずや善く了解せん。予は本多子爵を殺さざらんが爲に、予自身を殺さざる可らず。されど予

にして若し予自身を救はんが爲に、本多子爵を殺さんか、予は予が満村恭平を屠りし理由を如何の地にか求む可けん。若し又彼を毒殺したる理由にして、予の自覺せざる利己主義に伏在したるものと做さんか、予の人格、予の良心、予の道徳、予の主張は、すべて地を拂つて消滅す可し。是素より予の善く忍び得る所にあらず。予は寧ろ予自身を殺すの、遙に予が精神的破産に勝れるを信ずるものなり。故に予は予が人格を樹立せんが爲に、今宵「かの丸薬」の函によりて、嘗て予が手に僵れたる犠牲と、同一運命を擔はんとす。

本多子爵閣下、並に夫人、予は如上の理由の下に、卿等がこの遺書を手にするの時、既に屍體となりて、予が寢臺に横はらん。唯、死に際して、縷々予が呪ふ可き半生の祕密を告白したるは、亦以て卿等の爲に聊自ら潔せんと思はるが爲のみ。卿等にして若し憎む可くんば、即ち憎み、憐む可くんば、即ち憐め。予は——自ら憎み、自ら憐める予は、悦んで卿等の憎悪と憐憫とを蒙る可し。さらば予は筆を擱いて、予が馬車を命じ、直に新富座に赴かん。而して半日の觀劇を終りたる後、予は「かの丸薬」の幾粒を口に啣みて、再予が馬車に投ぜん。節物は素より異れども、紛々たる細雨は、予をして幸に黄梅雨の天を彷彿せしむ。斯くして予はかの肥大冢に似たる満村恭平の如く、車窓の外に往來する燈火の光を見、車蓋の上に肅々たる夜雨の音を聞き

つゝ、新富座を去る事甚遠からずして、必予が最期の息を呼吸す可し。卿等亦明日の新聞を翫すの時、恐らくは予が遺書を得るに先立つて、ドクトル北畠義一郎が腦出血病を以て、觀劇の歸途、馬車内に頓死せしの一項を讀まんか。終に臨んで予は切に卿等が幸福と健在とを祈る。卿等に常に忠實なる僕、北畠義一郎拜。

妙

な

話

或冬の夜、私は舊友の村上と一しよに、銀座通りを歩いてゐた。

「この間千枝子から手紙が来たつけ。君にもよろしくと云ふ事だつた。」

村上はふと思ひ出したやうに、今は佐世保に住んでゐる妹の消息を話題にした。

「千枝子さんも健在だらうね。」

「あゝ、この頃ははずつと達者のやうだ。あいつも東京にゐる時分は、随分神経衰弱もひどかつたのだが、——あの時分は君も知つてゐるね。」

「知つてゐる。が、神経衰弱だつたかどうか、——」

「知らなかつたかわ。あの時分の千枝子と来た日には、まるで氣違ひも同様さ。泣くかと思ふと笑つてゐる。笑つてゐるかと思ふと、——妙な話をし出すのだ。」

「妙な話？」

村上は返事をする前に、或珈琲店の硝子扉を押した。さうして往來の見える卓に私と向ひ合つて腰を下した。

「妙な話さ。君にはまだ話さなかつたかしら。これはあいつが佐世保へ行く前に、僕に話して聞かせたのだが。——」

君も知つてゐる通り、千枝子の夫は歐洲戦役中、地中海方面へ派遣された「A——」の乗組將校だつた。あいつはその留守の間、僕の所へ来てゐたのだが、愈戦争も片がつくと云ふ頃から、急に神経衰弱がひどくなり出したのだ。その主な原因は、今まで一週間に一度づつはきつと来てゐた夫の手紙が、ぱつたり来なくなつたせいかも知れない。何しろ千枝子は結婚後まだ半年と経たない内に、夫と別れてしまつたのだから、その手紙を楽しみにしてゐた事は、遠慮のない僕さへひやかすのは、残酷な氣がする位だつた。

恰度その時分の事だつた。或日、——さうさう、あの日は紀元節だつた。何でも朝から雨の降り出した、寒さの厳しい午後だつたが、千枝子は久しぶりに鎌倉へ、遊びに行つて来ると云ひ出した。鎌倉には或實業家の細君になつた、あいつの學校友たちが住んでゐる。——其處へ遊びに行くと云ふのだが、何もこの雨の降るのに、わざわざ鎌倉くんだりまで遊びに行く必要もないと思つたから、僕は勿論僕の妻も、再三明日にした方が好くはないかと云つて見た。しかし千枝子

は剛情に、どうしても今日行きたいと云ふ。さうしてしまひには腹を立てながら、さつさと支度して出て行つてしまつた。

事によると今日は泊つて来るから、歸りは明日の朝になるかも知れない。——さう云うてあいつは出て行つたのだが、少時すると、どうしたのだからかぐつしより雨に濡れた儘、まつ蒼な顔をして歸つて来た。聞けば中央停車場から濠端の電車の停留場まで、傘もささずに歩いたのださうだ。では何故そんな事をしたのだと云ふと、——それが妙な話なのだ。

千枝子が中央停車場へはひると、——いや、その前にまだかう云ふ事があつた。あいつが電車に乗つた所が、生憎客席が皆塞がつかつてゐる。そこで吊り革にぶら下つてゐると、すぐ眼の前の硝子窓に、ぼんやり海の景色が映るのださうだ。電車はその時神保町の通りを走つてゐたのだから、無論海の景色などが映る道理はない。が、外の往來の透いて見える上に、浪の動くのが浮き上つてゐる。殊に窓へ雨がしぶくと、水平線さへかすかに煙つて見える。——と云ふ所から察すると、千枝子はもうその時に、神経がどうかしてゐたのだらう。

それから、中央停車場へはひると、入口にゐた赤帽の一人が、突然千枝子に挨拶をした。さうして「旦那様は御變りもございませんか。」と云つた。これも妙だつたには違ひない。が、更に妙

だつた事は、千枝子がさう云ふ赤帽の問を、別に妙とも思はなかつた事だ。「難有う。唯この頃はどうかすつたのだから、さつぱり御便りが来ないのでね。」——さう千枝子は赤帽に、返事さへもしたと云ふのだ。すると赤帽はもう一度「では私が旦那様に御目にかゝつて参りませう。」と云つた。御目にかゝつて来ると云つても、夫は遠い地中海にゐる。——と思つた時、始めて千枝子はこの見慣れない赤帽の言葉が、氣違ひじみてゐるのに氣がついたのださうだ。が、問ひ返ると思ふ内に、赤帽はちよいと會釋をすると、こそこそ人ごみの中に隠れてしまつた。それきり千枝子はいくら探して見ても、二度とその赤帽の姿が見當らない。——いや、見當らないと云ふよりも、今まで向ひ合つてゐた赤帽の顔が、不思議な程思ひ出せないのださうだ。だから、あの赤帽の姿が見當らないと同時に、どの赤帽も皆その男に見える。さうして千枝子にはわからなくて、あの怪しい赤帽が、絶えずこちらの身のまほりを監視してゐるさうな心もちがする。かうなるともう鎌倉所か、其處にゐるのさへ何だか氣味が悪い。千枝子はたうとう傘もささずに、大降り

の雨を浴びながら、夢のやうに停車場を逃げ出して来た。——勿論かう云ふ千枝子の話は、あいつの神経のせるに違ひないが、その時風邪を引いたのだらう。翌日から彼は三日ばかりは、ずつと高い熱が續いて、「あなた、堪忍して下さい。だの、何故歸つていらつしやらないんです。」

だの、何か夫と話してゐるらしい謔言ばかり云つてゐた。が、鎌倉行きの際にはそればかりではない。風邪がすつかり癒つた後でも、赤帽と云ふ言葉を聞くと、千枝子はその日中ふさぎこんで口さへ碌に利かなかつたものだ。さう云へば一度なぞは、何處かの回漕店の看板に、赤帽の畫があるのを見たものだから、あいつは又出先まで行かない内に、歸つて來たと云ふ滑稽もあつた。しかし彼は一月ばかりすると、あいつの赤帽を怖がるのも、大分下火になつて來た。姉さん。何とか云ふ鏡花の小説に、猫のやうな顔をした赤帽の出るのがあつたでせう。私が妙な目に遇つたのは、あれを讀んでゐたせるかも知れないわね。——千枝子はその頃僕の妻に、そんな事も笑つて云つたさうだ。所が三月の幾日だかには、もう一度赤帽に脅かされた。それ以來夫が歸つて來るまで、千枝子はどんな用があつても、決して停車場へは行つた事がない。君が朝鮮へ立つ時にも、あいつが見送りに來なかつたのは、やはり赤帽が怖かつたのさうだ。

その三月の幾日だかには、夫の同僚が亞米利加から、二年ぶりに歸つて來る。——千枝子はそれを出迎へる爲に、朝から家を出て行つたが、君も知つてゐる通り、あの界限は場所がらだけに、晝でも減多人通りがない。その淋しい路ばたに、風車賣りの荷が一臺、忘れられたやうに置いてあつた。恰度風の強い曇天だつたから。荷に挿した色紙の風車が、皆目まぐるしく廻つて

ゐる。——千枝子はさう云ふ景色だけでも、何故か心細い氣がしたさうだが、通りがりにふと眼をやると、赤帽をかぶつた男が一人、後向きに其處へしやがんでゐた。勿論これは風車賣が、煙草か何かのんでゐたのだらう。しかしその帽子の赤い色を見たら、千枝子は何だか停車場へ行くと、又不思議でも起りさうな、豫感めいた心もちがして、一度は引き返してしまはうかとも、考へた位だつたさうだ。

が、停車場へ行つてからも、出迎へをすませてしまふまでは、仕合せと何事も起らなかつた。唯、夫の同僚を先に、一同がそろそろ薄暗い改札口を出ようとすると、誰かあいつの後から、「旦那様は右の腕に、御怪我をなすつていらつしやるさうです。御手紙が來ないのはその爲ですよ。」と、聲をかけるものがあつた。千枝子は咄嗟に振り返つて見たが、後には赤帽も何もゐない。ゐるのはこれも見知り越しの、海軍將校の夫妻だけだつた。無論この夫妻が唐突とそんな事をしゃべる道理もないから、聲がした事は妙と云へば、確に妙に違ひなかつた。が、兎も角、赤帽の見えないのが、千枝子には嬉しい氣がしたのだらう。あいつはその儘改札口を出ると、やはり外の連中と一しよに、夫の同僚が車寄せから、自動車に乗るのを送りに行つた。するともう一度後から、「奥様、旦那様は來月中に、御歸りになるさうですよ。」と、はつきり誰か聲をかけた。その

時も千枝子はふり向いても見たが、後には出迎への男女の外に、一人も赤帽は見えなかつた。しかし後にはあつたか、途端にこちらを見返りながら、にやりと妙に笑つて見せた。千枝子はそれを見つた時には、あたりの人目にも止まつた程、顔色が變つてしまつたさうだ。が、あいつが心を落ち着けて見ると、二人だと思つた赤帽は、一人しか荷物を扱つてゐない。しかもその一人は今笑つたのと、全然別人に違ひないのだ。では今笑つた赤帽の顔は、今度こそ見覚えが出来たかと云ふと、不相變記憶がぼんやりしてゐる。いくら一生懸命に思ひ出さうとしても、あいつの頭には赤帽をかぶつた、眼鼻のない顔より浮んで來ない。——これが千枝子の口から聞いた、二度目の妙な話なのだ。

その後一月ばかりすると、——君が朝鮮へ行つたのと、確前後してゐたと思ふが、實際夫が歸つて來た。右の腕を負傷して居た爲に、少時手紙が書けなかつたと云ふ事も、不思議にやはり事實だつた。千枝子さんは旦那様思ひだから、自然とそんな事がわかつたのでせう。——僕の妻なぞはその當座、かう云つてあいつをひやかしたものだ。それから又半月ばかり後、千枝子夫婦は夫の任地の佐世保へ行つてしまつたが、向ふへ着くか着かないのに、あいつのよこした手紙を見

ると、驚いた事には三度目の妙な話を書いてある。と云ふのは千枝子夫婦が、中央停車場を立つた時に、夫婦の荷を運んだ赤帽が、もう動き出した汽車の窓へ、挨拶の心算か顔を出した。その顔を一目見ると、夫は急に變な顔をしたが、やがて半ば恥かしさうに、かう云ふ話をし出したさうだ。——夫がマルセイユに上陸中、何人かの同僚と一しよに、或カツフェへ行つてゐると、突然日本人の赤帽が一人、卓子の側へ歩み寄つて馴々しく近状を尋ねかけた。勿論マルセイユの往來に、日本人の赤帽などが、徘徊してゐるべき理屈はない。が、夫はどう云ふ譯か格別不思議とも思はずに、右の腕を負傷した事や歸朝の近い事などを話してやつた。その内に酔つてゐる同僚の一人が、コニヤツクの杯をひつくり返した。それに驚いてあたりを見ると、何時の間にか日本人の赤帽は、カツフェから姿を隠してゐた。一體あいつは何だつたらう。——さう今になつて考へると、眼は確に明いてゐたにしても、夢だか實際だか差別がつかない。のみならず亦同僚たちも、全然赤帽の來た事などには、氣がつかないやうな顔をしてゐる。そこでたうとうその事に就いては、誰にも打ち明けて話さずにした。所が日本へ歸つて來ると、現に千枝子は、二度までも怪しい赤帽に遇つたと云ふ。ではマルセイユで見かけたのは、その赤帽かと思ひもしたが、餘り怪談じみてゐるし、一つには名譽の遠征中も、細君の事ばかり思つてゐるか、嘲られ

さうな気がしたから、今日まではやはり黙つてゐた。が、今顔を出した赤帽を見たら、マルセ、
エのカツフェにはひつて来た男と、眉毛一つ違つてゐない。——夫はさう話し終つてから、少時
は口を噤んでゐたが、やがて不安さうに聲を低くすると、「しかし妙ぢやないか？ 眉毛一つ違は
ないとは云ふものゝ、おれはどうしてもその赤帽の顔が、はつきり思ひ出せないんだ。唯、窓越
しに顔を見た瞬間、あいつだなと……」

村上が此處まで話して来た時、新にカツフェへはひつて来た、友人らしい三四人が、私たちの
卓子に近づきながら、口々に彼へ挨拶した。私は立ち上つた。

「では僕は失敬しよう。いづれ朝鮮へ歸る前には、もう一度君を訪ねるから。」

私はカツフェの外へ出ると、思はず長い息を吐いた。それは恰度三年前、千枝子が二度まで
も私と、中央停車場に落ち合ふべき密會の約を破つた上、永久に貞淑な妻でありたいと云ふ、簡
単な手紙をよこした譯が、今夜始めてわかつたからであつた。……

2、2、2、2、

L

黒衣聖母

—この涙の谷に呻き泣きて、御身に願ひをかけ奉る。…御身の憐みの御眼をわれらに廻らせ給へ。…深く御柔軟、深く御哀憐、すぐれて甘くまします『びるぜん、さんたまりや』様—

—和譯「けれんど」—

「どうです、これは。」

田代君はかう云ひながら、一體の麻利耶觀音を卓子の上へ載せて見せた。

麻利耶觀音と稱するのは、切支丹宗門禁制時代の天主教徒が、屢聖母麻利耶の代りに禮拜した、多くは白磁の觀音像である。が、今田代君が見せてくれたのは、その麻利耶觀音の中でも、博物館の陳列室や世間普通の蒐集家のキヤビネットにあるやうなものではない。第一これは顔を除いて、他は悉く黒檀を刻んだ、一尺ばかりの立像である。のみならず頸のまはりへ懸けた十字架の瓔珞も、金と青貝とを象嵌した、極めて精巧な細工らしい。その上顔は美しい牙彫りでしかも唇には珊瑚のやうな、一點の朱まで加へてある。…

私は黙つて腕を組んだ儘、暫くはこの黒衣聖母の美しい顔を眺めてゐた。が、眺めてゐる内に、何か怪しい表情が、象牙の顔の何處だかに、漂つてゐるやうな心もちがした。いや、怪しいと云つたのでは物足りない。私にはその顔全體が、或悪意を帯びて嘲笑を漲らしてゐるやうな氣さへしたのである。

「どうです、これは。」

田代君はあらゆる蒐集家に共通な矜誇の微笑を浮かべながら卓子の上の麻利耶觀音と私の顔とを見比べて、もう一度かう繰返した。

「これは珍品ですね。が何だかこの顔は、無氣味な所があるやうぢやありませんか。」
「圓滿具足の相好とは行きませんか。さう云へばこの麻利耶觀音には、妙な傳説が附隨してゐるのです。」

「妙な傳説？」

私は眼を麻利耶觀音から、思はず田代君の顔に移した。田代君は存外眞面目な表情を浮かべながら、ちよいとその麻利耶觀音を卓子の上から取り上げたが、すぐに又元の位置に戻して、
「ええ、これは禍を轉じて福とする代りに、福を轉じて禍とする、縁起の悪い聖母だと云ふ

事ですよ。」

「まさか。」

「處が實際さう云ふ事實が、持ち主にあつたと云ふのです。」

田代君は椅子に腰を下すと、殆物思はしげなとも形容すべき、陰鬱な眼つきになりながら、私にも卓子の向うの椅子へかけると云ふ手眞似をして見せた。

「ほんたうですか。」

私は椅子へかけると同時に、我知らず怪しい聲を出した。田代君は私よりも二三年前に大學を卒業した、秀才の聞えの高い法學士である。且又私の知つてゐる限り、所謂超自然的現象には寸毫の信用も置いてゐない、教養に富んだ新思想家である。その田代君がこんな事を云ひ出す以上まさかその妙な傳説と云ふのも、荒唐無稽な怪談ではあるまい。――

「ほんたうですか。」

私が再かう念を押すと、田代君は燐寸の火を徐にパイプへ移しながら、

「さあ、それはあなた自身の御判断に任せるより外はありませんまい。が、兎も角もこの麻利耶觀音には、氣味悪い因縁があるのださうです。御退屈でなければ、御話しますか。――」

この麻利耶觀音は、私の手にはひる以前、新潟縣の或町の稻見と云ふ素封家にあつたのです。勿論骨董としてあつたのではなく、一家の繁榮を祈るべき宗門神としてあつたのです。

その稻見の當主と云ふのは、丁度私と同期の法學士で、これが會社にも關係すれば、銀行にも手を出してゐると云ふ、まあ仲々の事業家なのです。そんな關係上、私も一二度稻見の爲に、或便宜を計つてやつた事がありました。その禮心だつたのでせう。稻見は或年上京した序に、この家重代の麻利耶觀音を私にくれて行つたのです。

私の所謂妙な傳説と云ふのも、その時稻見の口から聞いたのですが、彼自身は勿論さう云ふ不思議を信じてゐる譯でも何でもありません。たゞ、母親から聞かされた通り、この聖母の謂はれ因縁をざつと説明しただけだつたのです。

何でも稻見の母親が十か十一の秋だつたさうです。年代にすると、黒船が浦賀の港を擧がせた嘉永の末年にでも當りますか――その母親の弟になる、茂作と云ふ八ツばかりの男の子が、重い麻疹に罹りました。稻見の母親はお榮と云つて、二三年前の疫病に父母共世を去つて以來、この茂作と姉弟二人、もう七十を越した祖母の手に育てられて來たのださうです。ですから茂作が

重病になると、稻見には曾祖母に當る、その切髪の隠居の心配と云ふものは、一通りや二通りではありません。が、いくら醫者が手を盡しても、茂作の病氣は重くなるばかりで、殆一週間と經たな内に、もう今日か明日かと云ふ容態になつてしまひました。
すると或夜の事、お榮のよく寝入つてゐる部屋へ、突然祖母がはひつて来て、眠むがるのを無理に抱き起してから、人手も借りず甲斐々々しく、ちやんと著物を著換へさせたさうです。お榮はまだ夢でも見てゐるやうな、ぼんやりした心もちでゐましたが、祖母はすぐにその手を引いて、うす暗い雪洞に人氣のない廊下を照らしながら、晝でも滅多にはひつた事のない土蔵へお榮をつれて行きました。

土蔵の奥には昔から、火伏せの稻荷が祀つてあると云ふ、白木の御宮がありました。祖母は帯の間から鍵を出して、その御宮の扉を開けましたが、今雪洞の光に透かして見ると、古びた錦の御戸帳の後に、端然と立つてゐる御神體は、外でもない、この麻利耶觀音なのです。お榮はそれを見ると同時に、急に蟬の鳴く聲さへしない眞夜中の土蔵が怖くなつて、思はず祖母の膝に縋りついた儘、しくしく泣き出してしまひました。が、祖母は何時もと違つて、お榮の泣くのにも顧著せず、その麻利耶觀音の御宮の前に坐りながら、恭しく織に十字を縫つて、何かお榮こ

からない御神體をあげ始めたさうです。
それが凡そ十分あまりも續いてから、祖母は靜に孫娘を抱き起すと、怖がるのを頻になだめながら、自分の隣に坐らせました。さうして今度はお榮にもわかるやうに、この黒檀の麻利耶觀音へ、こんな願をかけ始めました。

「童貞麻利耶様、私が天にも地にも、杖柱と頼んで居りますのは、當年八歳の孫の茂作と、此處につれて参りました姉のお榮ばかりでございます。お榮もまだ御覽の通り、婿をとる程の年でもございませぬ。もし唯今茂作の身に萬一の事でもございしましたら、稻見の家は明日が日にも世嗣が絶えてしまふのでございます。そのやうな不祥がございませぬやうに、どうか茂作の命を御守りなすつて下さいまし。それも私風情の信心には及ばない事でございましたら、せめて私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし。私もとる年でございますし、靈魂を天主に御捧げ申すのも、長い事ではございますまい。しかし、それまでには孫のお榮も、不慮の災難でもございませぬなら、大方年頃になるでございませう。何卒私が目をつぶりますまででよろしくございますから、死の天使の御劍が茂作の體に觸れませぬやう、御慈悲を御垂れ下さいまし。」
祖母は切髪の頭を下げて、熱心にかう祈りました。するとその言葉が終つた時、恐る々々顔を

擡げたお榮の眼には、氣のせるか麻利耶觀音が微笑したやうに見えたと云ふのです。お榮は勿論小さな聲をあげて、又祖母の膝に縋りつきました。が、祖母は反つて満足さうに、孫娘の脊をさすりながら、

「さあ、もうあちらへ行きます。麻利耶様は難有い事に、この御婆さんの御祈りを御聞き入れになつて下すつたからね。」

と、何度も繰り返して云つたさうです。

さて明るく日になつて見ると、成程祖母の願がかなつたか、茂作は昨日より熱も下つて、今まではまるで夢中だつたのが、次第に正氣さへついて來ました。この容子を見た祖母の喜びは、仲々口には盡せません。何でも稲見の母親は、その時祖母が笑ひながら、涙をこぼしてゐた顔が、未だ忘れられないとか云つてゐるさうです。その内に祖母は病氣の孫がすやすや眠り出したのを見て、自分も連夜の看病疲れを暫く休める心算だつたのでせう。病間の隣へ床をとらせて、珍らしく其處へ横になりました。

その時お榮は御彈きをしながら、祖母の枕もとに坐つてゐましたが、隠居は精根も盡きる程、疲れ果ててゐたと見えて、まるで死んだ人のやうに、すぐ寝入つてしまつたとか云ふ事です。

が彼は一時間ばかりすると、茂作の介抱をしてゐた年輩の女中が、そつと次の間の襦袢を開けて、「御嬢様ちよいと御隠居様を御起し下さいまし」と、慌てたやうな聲で云ひました。そこでお榮は子供の事ですから、早速祖母の側へ行つて、「御婆さん御婆さん」と二三度搔卷きの袖を引いたさうです。が、どうしたのかふだんは眼慧い祖母が、今日に限つていくら呼んでも返事をする氣色さへ見えません。その内に女中も不審さうに、病間からこちらへはひつて來ましたが、これは祖母の顔を見ると、氣でも違つたかと思ふ程、いきなり隠居の搔卷きに縋りついて、「御隠居様、御隠居様」と、必死の涙聲を擧げ始めました。けれども祖母は眼のまはりにかすかな紫の色を止めた儘、やはり身動きもせず眠つてゐます。と間もなくもう一人の女中が、慌しく襦袢を開けたと思ふとこれも、色を失つた顔を見せて、「御隠居様、――坊ちゃんか――は、お榮の耳にも明かに、茂作の容へ聲で呼び立てました。勿論この女中の「坊ちゃんか――は、お榮の耳にも明かに、茂作の容態の變つた事を知らせる力があつたのです。が、祖母は依然として、今は枕もとに泣き伏した女中の聲も聞えないやうに、おつと眼をつぶつてゐるのでした。……」

茂作もそれから十分ばかりの内に、たうとう息を引き取りました。麻利耶觀音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです。

田代君はかう話し終ると、又陰鬱な眼を擧げて、ちつと私の顔を眺めた。

「どうです。あなたにはこの傳説が、ほんたうにあつたとは思はれませんか。」
私はためらつた。

「さあ——しかし——どうでせう。」

田代君は暫く黙つてゐた。が、やがて煙の消えたパイプへもう一度火を移すと、

「私はほんたうにあつたかとも思ふのです。唯、それが稲見家の聖母のせみだつたかどうかは、疑問ですが、——さう云へば、まだあなたは麻利耶觀音の臺座の銘を御讀みにならなかつたでせう。御覽なさい。此處に刻んである横文字を。——「汝の祈禱、神々の定め給ふ所を動かすべし」と望 DESINE FATTA DEUM LEOPISPERA-

「勿れの意」 RE PRECANDO.....」

私はこの運命それ自身のやうな麻利耶觀音へ、思はず無氣味な眼を移した。聖母は黒檀の衣を纏つた儘、やはりその美しい象牙の顔に、或悪意を帯びた嘲笑を永久に冷然と湛へてゐる。——

影

横濱。

日華洋行の主人陳彩は、机に背廣の兩肘を凭せて、火の消えた葉巻を啣へた儘、今日も堆い商用書類に、繁忙な眼を曝してゐた。

更紗の窓掛けを垂れた部屋の内には、不相變殘暑の寂莫が、息苦しい位支配してゐた。その寂莫を破るものは、ニスの匂のする戸の向うから、時々此處へ聞えて来る、かすかなタイプライターの音だけであつた。

書類が一山片づいた後、陳はふと何か思ひ出したやうに、卓上電話の受話器を耳へ當てた。

「私の家へかけてくれ給へ。」

陳の唇を洩れる言葉は、妙に底力のある日本語であつた。

「誰？——婆や？——奥さんにちよいと出て貰つてくれ。——房子かい？——俺は今夜東京へ行くからね、——ああ、向うへ泊つて来る。——歸れないか？——とても汽車に間に合ふまい。——ぢや頼むよ。——何？——醫者に來て貰つた？——それは神經衰弱に違ひないさ。よろしい。」

さやうなら。」

陳は受話器を元の位置に戻すと、何故か顔を曇らせながら、肥つた指に燐寸を摺つて、啣へてゐた葉巻を吸ひ始めた。

……煙草の煙、草花の匂、ナイフやフォクの皿に觸れる音、部屋の隅から湧き上る調子外れのカルメンの音楽、——陳はさう云ふ騒ぎの中に、一杯の麥酒を前にしながら、たつた一人茫然と、卓子に肘をついてゐる。彼の周圍にあるものは、客も、給仕も、扇風機も、何一つ目まぐるしく動いてゐないものはない。が、唯、彼の視線だけは、帳場机の後の女の顔へ、さつきからちつと注がれてゐる。
女はまだ見た所、二十を越えてもゐないらしい。それが壁へ貼つた鏡を後に、絶えず鉛筆を動かしながら、忙しさにビルを書いてゐる。額の捲き毛、かすかな頬紅、それから地味な青磁色の半襟。——

陳は麥酒を飲み干すと、徐に大きな體を起して、帳場机の前へ歩み寄つた。

「陳さん。何時私に指環を買つて下すつて？」

女はかう云ふ間にも、依然として鉛筆を動かしてゐる。

「その指環が無くなつたら。」

陳は小錢を探りながら、女の指へ顫を向けた。其處には既に二年前から、延べの金の兩端を抱かせた、約婚の指環が嵌つてゐる。

「ぢや今夜買つて頂戴。」

女は咄嗟に指環を抜くと、ビルと一しよに彼の前へ投げた。

「これは護身用の指環なのよ。」

カツフェの外のアスファルトには、涼しい夏の夜風が流れてゐる。陳は人通りに交りながら、何度も町の空の星を仰いで見た。その星も皆今夜だけは、……

誰かの戸を叩く音が、一年後の現實へ陳彩の心を喚び返した。

「おはひり」

その聲がまだ消えない内に、ニスの匂のする戸がそつと明くと、顔色の蒼白い書記の今西が、無氣味な程静にはひつて來た。

「手紙が參りました。」

黙つて頷いた陳の顔には、その上今西に一言も、口を開かせない不機嫌さがあつた。今西は冷かに目視すると、一通の封書を廢した儘、又前のやうに音もなく、戸の向うの部屋へ歸つて行つた。

戸が今西の後にしまつた後、陳は灰皿に葉巻を捨てて、机の上の封書を取上げた。それは白い西洋封筒に、タイプライターで宛名を打つた、格別普通の商用書簡と、變る所のない手紙であつた。しかしその手紙を手にすると同時に、陳の顔には云ひやうのない嫌惡の情が浮んで來た。

「又か。」

陳は太い眉を顰めながら、忌々しさうに舌打ちをした。が、それにも關らず、靴の踵を机の縁へ當てると、殆輪轉椅子の上に仰向けになつて、紙切小刀を使はずに封を切つた。

「拜啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、再三御忠告……貴下が今日に至るまで、何等斷乎たる處置に出でられざるは……されば夫人は舊日の情夫と共に、日夜……日本人にして且珈琲店の給仕女たりし房子夫人が、……支那人たる貴下の爲に、萬斛の同情無き能はず候。……今後もし夫人を離婚せられずんば、……貴下は萬人の嗤笑する所となるも……微衷不惡御推察……敬白。貴下の忠實なる友より。」

手紙は力なく陳の手から落ちた。

……陳は卓子に倚りかかりながら、レエスの窓掛けを洩れる夕明りに、女持ちの金時計を眺めてゐる。が、蓋の裏に彫つた文字は、房子のイニシアルではないらしい。

「これは？」

新婚後まだ何日も経たない房子は、西洋筆笥の前に佇んだ儘、卓子越しに夫へ笑顔を送つた。

「田中さんが下すつたの。御存知ぢやなくつて？ 倉庫會社の——」

卓子の上にはその次に、指環の箱が二つ出て来た。白天鷲絨の蓋を開けると、一つには眞珠

の、他の一つには土耳其古玉の指環がはひつてゐる。

「久米さんに野村さん。」

今度は珊瑚珠の根懸けが出た。

「古風だわね。久保田さんに頂いたのよ。」

その後から——何が出て来ても知らないやうに、陳は唯ちつと妻の顔を見ながら、考深さうにこんな事を云つた。

「これは皆お前の戦利品だね。大事にしなくちや濟まないよ。」

すると房子は夕明りの中に、もう一度あでやかに笑つて見せた。

「ですからあなたも戦利品もね。」

その時彼は嬉しかつた。しかし今は……

陳は身ぶるひを一つすると、机にかけてゐた兩足を下した。それは卓上電話のベルが、突然彼の耳を驚かしたからであつた。

「私。——よろしい。——繋いでくれ給へ。」

彼は電話に向ひながら、苛立たしさうに額の汗を拭つた。

「誰？——里見探偵事務所はわかつてゐる。事務所の誰？——吉井君？——よろしい。報告は？——何が来てゐた？——医者？——それから？——さうかも知れない。——ぢや停車場へ来てゐ

てくれ給へ。——いや、終列車にはきつと歸るから。——間違はないやうに。さやうなら。」

受話器を置いた陳彩は、まるで放心したやうに、少時は黙念と座つてゐた。が、やがて置き時計の針を見ると、半ば機械的にベルの鈕を押した。

書記の今西はその響に應じて、心もち明けた戸の後から、瘦せた半身をさし延ばした。

「今西君。鄭君にさう云つてくれ給へ。今夜はどうか私の代りに、東京へ御出でを願ひますと。」

陳の聲は何時の間にか、力のある調子を失つてゐる。今西はしかし例の通り、冷然と目禮を送つ

た儘、すぐに戸の向うへ隠れてしまつた。

その内に更紗の窓掛けへ、おひおひ當つて来た薄雲りの西日が、この部屋の中の光線に、どんよりした赤味を加へ始めた。と同時に大きな蠅が一匹、何處から此處へ紛れこんだか、鈍い羽音を立てながら、ぼんやり頬杖をついた陳のまはりに、不規則な圓を描き始めた。……………

鎌倉。

陳彩の家の客間にも、レスの窓掛けを垂れた窓の内には、晩夏の日の暮が近づいて来た。しかし日の光は消えたものの、窓掛けの向うに煙つてゐる、まだ花盛りの夾竹桃は、この涼しさうな部屋の空気に、快い明るさを漂してゐた。

壁際の籐椅子に倚つた房子は、膝に三毛猫をさすりながら、その窓の外の夾竹桃へ、物憂さうな視線を遊ばせてゐた。

「旦那様は今晩も御歸りにならないのでございますか？」

これはその側の卓子の上に、紅茶の道具を片づけてゐる召使ひの老女の言葉であつた。

「あの、今夜も寂しいわね。」

「せめて奥様が御病氣でないで、心丈夫でございますけれども——」

「それでも私の病氣はね、唯神経が疲れてゐるのだつて、今日も山内先生がさう仰有つたわ。二

三日よく眠りさへすれば、——あら。」

老女は驚いた眼を主人へ擧げた。すると子供らしい房子の顔には、何故か今までにない恐怖の

色が、ありありと瞳に漲つてゐた。

「どう遊ばしました？ 奥様。」

「いいえ、何でもないので。何でもないのでだけれど、——」

房子は無理に微笑しようとした。

「誰か今あすこの窓から、そつとこの部屋の中を、——」

しかし老女が一瞬の後に、その窓から外を覗いた時には、唯微風に戦いでゐる夾竹桃の植込み

が、人氣のない庭の芝原を透かして見せただけであつた。

「まあ、氣味の悪い。きつと又御隣の別荘の坊ちゃんが、悪戯をなすつたのでございますよ。」

「いいえ、御隣の坊ちゃんなんぞなくつてよ。何だか見た事があるやうな——さうさう、何時か

婆やと長谷へ行つた時に、私たちの後をついて来た、あの烏打帽をかぶつてゐる、若い人のやう

な気がするわ。それとも——私の氣のせるだつたかしら。」

房子は何か考へるやうに、ゆつくり最後の言葉を云つた。

「もしあの男でしたら、どう致しませう。旦那様は御歸りになりませんし、——何なら爺やでも警察へ、さう申しにやつて見ませうか。」

「まあ、婆やは臆病ね。あの人なんぞ何人來たつて、私はちつとも怖くないわ。けれどももし——もし私の氣のせるだつたら——」

老女は不審さうに瞬きをした。

「もし私の氣のせるだつたら、私はこの儘氣違になるかも知れないわね。」

「奥様はまあ、御冗談ばつかり。」

老女は安心したやうに微笑しながら、又紅茶の道具を始末し始めた。

「いいえ、婆やは知らないからだわ。私はこの頃一人であるとな、きつと誰かが私の後に立つてゐるやうな気がするのよ。立つて、さうして私の方をぢつと見つめてゐるやうな——」

房子はかう云ひかけた儘、彼女自身の言葉に引き入れられたのか、急に憂鬱な眼つきになつた。

……電燈を消した二階の寢室には、かすかな香水の匂のする薄暗がりか擲かつてゐる。唯窓掛けを引かない窓だけが、ぼんやり明るんで見えるのは、月が出てゐるからに違ひない。現にその光を浴びた房子は、獨り窓の側に佇みながら、眼の下の松林を眺めてゐる。

夫は今夜も歸つて來ない。召使ひたちは既に寢静まつた。窓の外に見える庭の月夜も、ひつそりと風を落してゐる。その中に鈍い物音が、間遠に低く聞えるのは、今でも海が鳴つてゐるらしい。

房子は少時立ち續けてゐた。すると次第に不思議な感覚が、彼女の心に目ざめて來た。それは誰かが後にゐて、ぢつとその視線を彼女の上に集注してゐるやうな心もちである。

が、寢室の中には彼女の外に、誰も人のゐる理由はない。もしゐるとすれば、——いや、戸には寝る前に、ちゃんと錠が下してある。ではこんな氣がするの、——さうだ。きつと神経が疲れてゐるからに相違ない。彼女は薄明い松林を見下しながら、何度もかう考へ直さうとした。しかし誰かが見守つてゐると云ふ感じは、いくら一生懸命に打ち消して見ても、だんだん強くなるばかりである。

房子はたうとう思ひ切つて、怖は怖は後を振り返つて見た。が、果して寢室の中には、飼ひ馴

れた三毛猫の姿さへ見えない。やはり人がゐるやうな気がしたのは、病的な神経の仕業であつた。——と思つたのはしかし言葉通り、ほんの一瞬の間だけである。房子はすぐに又前の通り、何か眼に見えない物が、この部屋を満たした薄暗がりの何處かに、潜んでゐるやうな心もちがした。しかも以前より更に堪へられない事には、今度はその何物かの眼が、窓を後にした房子の顔へ、まともに視線を焼きつけてゐる。

房子は全身の戦慄と闘ひながら、手近の壁へ手をのばすと、咄嗟に電燈のスイッチを捻つた。と同時に見慣れた寢室は、月明りに交つた薄暗かりを拂つて、頼もしい現實へ飛び移つた。寢臺、西洋燭、洗面臺、——今はすべてが晝のやうな光の中に、嬉しい程はつきり浮上つてゐる。その上それが何一つ、彼女が陳と結婚した一年以前と變つてゐない。かう云ふ幸福な周囲を見れば、どんなに氣味の悪い幻も、——いや、しかし怪しい何物かは、眩しい電燈の光にも恐れず、寸刻もたゆまない凝視の眼を房子の顔に注いでゐる。彼女は両手に顔を隠すが早い、無我無中に叫ぼうとした。が、何故か聲が立たない。その時彼女の心の上には、あらゆる經驗を超越した恐怖が、……

房子は一週間の以前の記憶から、吐息と一しよに解放された。その拍子に隣の三毛猫は、彼女の

際を飛び下りると、毛並みの美しい背を高くして、快くさうに欠伸をした。
「そんな氣は誰でも致すものでございますよ。爺やなどは何時ぞや御庭の松へ、鉄をかけて居りましたら、まつ晝間空に大勢の子供の笑ひ聲が致したとか、さう申して居りました。それでもあの通り氣が違ふ所か、御用の暇には私へ小言ばかり申して居るぢやございませんか。」
老女は紅茶の盆を擡げながら、子供を慰るやうにかう云つた。それを聞くと房子の頬には、始めて微笑らしい影がさした。

「それこそ御隣の坊ちゃんか、おいたをなすつたのに違ひないわ。そんな事にびつくりするやうぢや、爺やもやつぱり臆病なのね。——あら、おしやべりをしてゐる内に、たうとう日が暮れてしまつた。今夜は旦那様が御歸りにならないから、好いやうなものだけれど、——御湯は？ 婆や。」

「もうよろしうございますとも。何ならちよいと私が御加減を見て参りませうか。」

「好いわ。すぐにはいるから。」

房子は漸く氣輕さうに、壁側の籐椅子から見を起した。

「又今夜も御隣の坊ちゃんたちは、花火を御揚げなさるかしら。」

老女が房子の後から、静に出て行つてしまつた跡には、もう夾竹桃も見えなくなつた。薄暗い空虚の客間が残つた。すると二人に忘れられた、あの小さな三毛猫は、急に何か見つけたやうに、一飛びに戸口へ飛んで行つた。さうしてまるで誰かの足に、體を摺りつけるやうな身ぶりをした。が、部屋に擴がつた暮色の中には、その三毛猫の二つの眼が、無氣味な燐光を放つ外に、何もゐるやうなけはひは見えなかつた。……………

横濱。

日華洋行の宿直室には、長椅子に寝ころんだ書記の今西が、餘り明るくない電燈の下に、新刊の雑誌を擴げてゐた。が、やがて手近の卓子の上へ、その雑誌をばたりと抛ると、大事さうに上衣の隠しから、一枚の寫眞をとり出した。さうしてそれを眺めながら、蒼白い頬に何時までも幸福らしい微笑を浮べてゐた。

寫眞は陳彩の妻の房子が、桃割れに結つた半身であつた。

鎌倉。

下り終列車の笛が、星月夜の空に上つた時、改札口を出た陳彩は、たつた一人跡に残つて、一つ折の鞆を抱へた儘、寂しい構内を眺めまはした。すると電燈の薄暗い壁側のベンチに坐つてゐた、背の高い背廣の男が一人、太い籐の杖を引ずりながら、のそく陳の側へ歩み寄つた。さうして潤達に烏打帽を脱ぐと、聲だけは低く挨拶をした。

「陳さんですか？ 私は吉井です。」

陳は殆ど無表情に、じろりと相手の顔を眺めた。

「今日は御苦勞でした。」

「先程電話をかけましたが、——」

「その後何もなかつたですか？」

陳の語氣には、相手の言葉を弾き除けるやうな力があつた。

「何もありません。奥さんは醫者が歸つてしまふと、日暮までは婆やを相手に、何か話して御出ででした。それから御湯や御食事をすませて、十時頃までは蓄音機をお聞きになつてゐたやうです。」

「客は一人も來なかつたですか？」

「ええ、一人も。」

「君が監視をやめたのは？」

「十一時二十分です。」

吉井の返答もてきばきしてゐた。

「その後終列車まで汽車はないですね。」

「ありません。上りも、下りも。」

「いや、難有う。歸つたら里見君に、よろしく云つてくれ給へ。」

陳は麥藁帽の庇へ手をやると、吉井が烏打帽を脱ぐのには眼もかけず、砂利を敷いた構外へ大股に歩み出した。その容子が餘り無遠慮すぎたせみか、吉井は陳の後姿を見送つたなり、ちよいと両肩を聳やかせた。が、すぐ又氣にも止めないやうに、軽快な口笛を鳴らしながら、停車場前の宿屋の方へ、太い籐の杖を引きずつて行つた。

鎌倉。

一時間の後陳彩は、彼等夫婦の寢室へ、盗賊のやうに耳を當てながら、ぢつと容子を窺つてゐる

る彼自身を發見した。寢室の外の廊下には、息のつまるやうな暗闇が、一面にあたりを封じてゐた。その中に唯一點、かすかな明りが見えるのは、戸の向うの電燈の光が、鍵穴を洩れるそれであつた。

陳は殆ど破裂しさうな心臓の鼓動を押へながら、ぴつたり戸へ當てた耳に、全身の注意を集めてゐた。が、寢室の中からは、何の話し聲も聞えなかつた。その沈黙が又陳にとつては、一層堪へ難い呵責であつた。彼は目の前の暗闇の底に、停車場から此處へ来る途中の、思ひがけない出来事が、もう一度はつきり見えるやうな氣がした。

……枝を交した松の下には、しつとり砂に露の下りた、細い路が続いてゐる。大空に澄んだ無數の星も、その松の枝の重なつた此處へは、滅多に光を落して來ない。が海の近い事は、疎な芒に流れて來る潮風が明かに語つてゐる。陳はさつきからたつた一人、夜と共に強くなつた松脂の匂を嗅ぎながら、かう云ふ寂しい闇の中に、注意深い歩みを運んでゐた。

その内に彼はふと足を止めると、不審さうに行く手を透かして見た。それは彼の家の煉瓦塀が、何歩か先に黒々と、現れて來たからばかりではない、その常春藤に蔽はれた、古風な塀の見えるあたりに、忍びやかな靴の音が、突然聞え出したからである。